

三井甲之著

今上天皇御歌解説

附・万葉集論







三井甲之著

今上天皇御歌解説

附・万葉集論

斑鳩会刊行





三井甲之先生遺影

ますらものかなーきぶらちつみおさね

つみかさねまもるかまとーまねを 甲之

歌しきしまのやまと心はうつそみの  
めには見えぬど耳にきくへし

甲之

目次

表紙カバ―版西・故田代二見西伯

凡例……………3

天皇御歌解説……………5

今上御歌解説(第二稿)……………18

今上天皇御歌解説(第三稿)……………23

万葉集論……………27

一、万葉集の研究に就て……………28

二、詩歌製作の衝動と其表現法を論ず……………31

三、和歌俳句の形式比較論及現代歌俳墮落の原因……………49

四、万葉集の女詩人・額田王	53
五、柿本人麿の生活と作歌	59
六、大伴旅人の生活と作歌	80
七、山上憶良	89
八、沙弥満誓の歌	101
九、山辺赤人の歌を論ず	103
十、大伴家持	115
十一、万葉集中の民謡	122
十二、万葉集第十六巻に就て	130
附載・毛筆直筆「万葉集論」より二章	139
解 題	142
あとがき・刊行のことば	155
斑鳩会 夜久正雄	
亀井孝之	

## 凡例(第二刷)

一、本書所載「天皇御歌解説」本文は、三井甲之先生が「永訣の書」として昭和二十七年謄写出版によつて知友に贈呈頒布せられたものの翻刻である(『三井甲之歌集』所載「三井甲之年譜」参照)。なほ参考のため、当時謄写印刷に当つた夜久正雄氏所蔵の御遺稿「第二稿、第三稿」を附した。書名はその「第三稿」の標題に拠つて「今上天皇御歌解説」とした。

一、「万葉集論」は、三井先生が東京帝大卒業の際の卒業論文「万葉集につきて」(明治四十年)を加筆の上『アカネ』誌上に発表されたものである(明治四十一年五月一日発行第壹卷第四号以降約一カ年間十号にわたる)。卒論の清書と思はれる「万葉集論」は現在「敷島文庫」(城西大学図書館)に保管され、しきしまのみち会大阪支部発行の機関誌『人生随順』誌上に発表された(通巻32号以降)。本書所載のものは、『アカネ』誌上から採り、各章配列の順序は、卒論の「第十六章・撮要」を「一、万葉集の研究に就て」とし、卒論の「第八章・山上憶良」と「第九章・大伴旅人の生活と作歌」を『アカネ』誌上の発表順に入れ替へた。そのほかは、卒論の順序にあはせた。場所により句読点を加へ、字体に当用漢字の字体を用ひた。また、引用の和歌に振仮名を付した。そのほかは、すべて『アカネ』所載のとほりである。ために、『万葉集』の和歌の訓読・表記は、明治末年頃行はれたものであつて、今日のそれと異なる点がある。

一、右の翻刻について先生の御遺族のお許しを得た。

一、その他の点については、「解題」及び「あとがき」を参照されたい。

一、本書の「解題」「あとがき」はともに第一刷(昭和四十二年四月二十九日発行)当時のものそのままである。



天皇御歌解説

◎ 上古より一系連綿のシキシマノミチ和歌の純学術的研究

○ 敗戦の綜合原因は思想法のマチガヒであつたと反省し

○ 東西文化交流の概要に立つて

○ 個人安心世界平和の大海に注ぐ滴瀝

○ Ⅱ イエス、孔子、孟子、天武天皇、聖武天皇、明治天皇、弘法大師、菅原道真、契沖、田安宗武、

正岡子規、

聖徳太子、善導大師、親鸞聖人、ゲエテ、(ヘエゲル、マルクス、レニン) ヴント、リンカン、

ホイットマン Ⅱ

これらの人名系列に道標を求めつつ

○ 現実生活の暗夜に光明(コトバ)を求めつつ涙をぬくふ同胞にささぐるコトノハノミチの科学と

技術

◎ 和歌しきしまのみちこそ日本復興の無尽蔵力源なれ

あふみぢやうち出の浜に駒とめて比良のたかねの花をみるかな

箱根路を我こえくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

ツユホドモ理リタガヒタル事アラデ自然ノ景色ヲノベタレバ

人ノ心ヲ和グベク……………田安 宗武

世のさだめもひて立つなぎさ日の落ちしひととき潮は雪のごとくに

源 源 頼政  
実朝

眼あぐれば風もつめたし海のもはいよいよくろめどなほさがてに

道にあひて笑ませしからにふる雪のけなげぬかに恋ひもふ吾妹

人ノオモヒ無窮自然トシラベアハスルトキ人ノココロモトコシナヘノ

イノチニ抱納セラル、……………笹野 里人

岡田 質  
聖武 天皇

議會制度の与衆相弁自由討議のデモクラシイ原理は一三五〇年前に聖徳太子憲法に「夫事不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>独弁<sub>一</sub>。必与<sub>レ</sub>衆宜<sub>レ</sub>論。小事是輕<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>必衆<sub>一</sub>。唯逮<sub>レ</sub>テハ論<sub>二</sub>大事<sub>一</sub>若疑<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>失。故与<sub>レ</sub>衆相弁。辭則得<sub>レ</sub>理矣。」と適切明快細密微妙に説かれてをる。衆とともに相談すれば辭即ち思想法が正しくマチガハヌといふ。これがコトノハノミチであり、コトノハノミチ和歌は「月花のもてあそび」ではなく、「ことのはのまことのみち」である。和歌といへば百人一首を連想しカルタアソビと思ふが実は生死興亡を決する問題である。後桜町天皇は「まもれなほ神のめぐみにつたへきて明暮あふくことのはのみち」とよまれた。

中国では礼楽といひ欧米では道德宗教芸術と区分するが、言靈の幸はふ国日本では皇室を中心としてコトノハノミチが相続せられ天皇御歌にその示標を仰ぐといふ現実態を科学・技術的即ち學術的又は精神科学的に究明しようとするのである。

此の學術的見地から「敗戦」といふわれらの共に五体投地求哀懺悔しつゝある事実もこの

コトノハノミチ思想法のマチガヒに基くもので思想法の敗北、學術の敗北であると學術的に認識することによつて「平和」への一歩々々をふみ出すべきである。不斷に運行變化し複雑に關連する自然も人生も静止するものではない、月滿つればかくといふのは知らぬ者はないが、日本語で全し、まつたし、といつて全けし、といはぬことを氣附かぬから、東京の有力大新聞に有名歌人の和歌が出て、それに「大東亞全けからむ」の一句があるのを困つたものだと思つた。

認識論に低回せず、直進して「天皇御歌」について解説しよう。この「天皇御歌」の四字を音読すれば心がすがすがしくなる。これは二一年六月八日ロンドン發でオプザーバー誌東京特派員が千葉県行幸に際し農民労働者学童が「ある者は泣きある者は興奮し」て「茶の背広とつぶれた中折帽をつけた」天皇に敬礼するさまを叙述し「何もかも破壊されてしまつた日本人の社会にあつては天皇が唯一の安定点をなしてゐる」と論じてをる、それは日本人の感情である。御歌をよむ前に「天皇御歌」とよむだけですでに心があかるくなる。これは事實である。理由の説明は略するが、それは「迷信」だといふのは自分の無知を知らぬ故のさういふ人自身の迷信である。

○

戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてこゝに草とる (二二)

「戦にやぶれし後の今もなほ」この五七五の三句をタダそのまま即ちタダシクよめば天皇御自身かくよませられたことは歴史上未曾有の重大事実である。「今も」の一語を注意しよ。 「こゝに」は「皇居に」である。重大事が平易のコトバでよまれたことが「日本のコトノハノミチ」としてのシキシマノミチの秘訣である。古い背広につぶれた中折帽の天皇に対し「百姓女達は深くお辞儀をして鼻が地につくほどであつた。」このオプザーバー記者の實見した外貌の内面に脈絡するものは日本文化三千年の練成である。それが「今もなほ」活動してをる。「いにしへは語るにしのびず眼前をしつよく語らばこゝろ和まむ」といふ明治時代の世に知られぬ歌がある。「明日の事を思ひわづらふ勿れ、一日の苦勞は一日にて足れり」(馬太伝七ノ三四)

#### 室戸にて

室戸むろとなる一夜ひとよの宿やどのたましだをうつくしと見つ岩間々々に(二二五)

四国巡幸の御歌である。タマシダは亜熱帯植物である。「一夜」の宿は「一泊」の宿。美しと「見つ」と眼前まきまかの一瞬ひとときに全心身が集注する「つ」といふコトバに注意しよう。此の「つ」に力点を置けばタマシダは此のウタをよむ人の全視界に広がり天地に拡充する。四国に生れた弘法大師の「法性の無漏土むろと(室戸)」ときけど我が住めば有為うゑの波風立たぬ日ぞなき」といふ教義説明和歌の如きは微塵みじんの如く此の御歌に吸収されてしまふ。神通力を有したといはれ

る弘法大師は仏教のコトノハノミチ真言宗の開祖であるが、その末流に僧契沖が出てその分派に国学者歌人が輩出してシキシマノミチにその通力を發揮しようとしてをる。

名古屋の街さきに見しより美しくたちなほれるがうれしかりけり (二二五)

二十五年秋第五回国民体育大会へ行幸の時の三首中の一首である。「美しく」ウツクシはイツクシと近親語である。厳しは高度の美としての莊嚴を意味し、慈しむ、慈悲、又広く「愛」と連絡する。仏陀の慈悲、クリストの愛、孔子の仁は人情の自然の表示である。孔子は里仁為美といつた。仁に里るを美となす、といふのである。此の愛憐仁慈の心からこそ都市も其廃墟より復活するのである。此の慈悲心は和歌一首中に配置せらるゝ一語々々の音調から触発せらるゝのである。

#### 霜夜月

風さむき霜夜の月を見てぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと (二三)

「かへらぬ人」は無限の悲痛感を背負ふ未帰還同胞である。「いかにあるか」といふ単純のコトバは極限の傷心事を包含する。「風寒き霜夜の月」も血の滴るやうな風物の肉迫するコトバである。風蕭々兮易水寒。壯士一去兮不復還。は芝居がかつてをるが、これはそれよりも内心に沁刻せらるゝことばである。現実不安のまつただ中の生活の表現である。此の

現実を耐忍してこれを如実に「つゆほども理りたがひたる事あらで」のべたのであるから「人の心を和ぐべく」此のカナシキ心に解脱の静寂がやどるのである。正岡子規は臨終に近づきつゝある病床で「一八の花咲き出で、我目には今年ばかりの春行かむとす」と詠んだが、そこに解脱のゆとりがある。「ウエルテルの悲み」を読んで自殺したものもあつたが、作者ゲエテは活動に満ちた八十三歳の長命を保つた。

病苦を回避せず之に直面して随順するが病苦を耐へる方法で、困窮の境遇のうちにも無窮の天地が見出さるゝ。生命は不思議である。臨終病床の辞世の和歌にも不朽の生命の表現は完成せらるゝ。梵鐘のひびきは無量寿の実感を伝播する。「わが神なんぞ我を遺てたまふや」といふ十字架上の絶叫も、山上垂訓の諧調も、ともに大宇宙生命の波瀾に應ずる旋律の変化である。宇宙人生の一切を摂取不捨抱納無窮なるが故にそこに尽十方無礙の光明がかがやく、それが「あまてらす神のみ光」である。この「光」は今日ではコトバの形式をとつて来た。コトバは印刷されまた電波によつて全世界に伝へられる。この光の源泉また中核が日本では皇室であることは余りに明瞭の歴史的文化事実であるから却つて人はうっかりして気がつかずに居る。人麻呂、実朝を始め歌人は皇室への文化面に於いての忠臣で、天武天皇から聖武天皇へと時代の進展を精査すれば有名有力歌人の脈絡はこれを実証する。それは「御頸珠の玉緒たまのむすもゆらに取りゆらかして」伝へられたミタマでありイノチであつて、それは「さきに見し

より美しく」といふ具象実感をともなふコトバを一首のシラベに乗せて実験せられたい。

「室戸なる」の一首では、「タマシダを美しと見つ」とキツパリ言ひ切つたので、「見つ」が強調されて、「岩間々々に」といふ実景が露呈せらるゝ。露骨で円滑化されぬやうのコトバであるが、慣習法上のまた認識論的不均衡は無い。

天皇が東宮時代に作らせられた「広き野を流れゆけども最上川海に入るまでにごらざりけり」といふ御歌がある。実によい歌である。ニゴラヌまたクモラヌといふのはカガミをイツキマツル伝統の自然表示である。「海に入るまで」と平易素朴に言はれたからこそ「けり」が千鈞の重量を以て一首を安定し、余韻を無窮空間に揺曳せしむる。

二十三年一月の東京の大新聞〇〇〇欄に有名の歌人であり有力の和歌研究者でもある一人が天皇にお目にかゝり、この御歌に対して「自作をお示しゝた」とあつた。この朱筆を加へた添削と見らるる自作といふのは「最上川流れ清けみ時の間もとどこほることなかりけるかも」といふのである。与衆相弁の新時代の美談として歌道に趣味を有する記者の筆であらう。

「清い」といふのは結論で情態ではないから「清けし」とはいはぬのが日本語の論理である。「清み」といつて「清けみ」とはいはぬ。滞らぬから清いとはいふが、清いから滞らぬでは因果関係がアベコベである。「時間」といつても「時の間」とはヘンである。結句「け

るかも」は空世辞の類で内容空虚である。

御歌は清新で澆刺として意味深長で加筆添削は思ひもよらぬ。歌論の第一人者田安宗武の和歌の眞価を適確に評論した正岡子規竹の里人をして今上御製をよましめたらばと思ふ。明治時代は再びかへり来ぬ「堯舜」時代であつたか。さうではない、と答へるであらう。御歌をくりかへし／＼よむ人々は。

日の丸をかゝげて歌ふ若人の声たのもしくひゞきわたれる (二五)

「名古屋の街」の一首につゞく御歌である。「たちなほれるが」「ひゞきわたれる」この現在完了の動詞助動詞は殆んど未完了に近く、姿態を完成せぬ動勢の如く情景の活躍を示す。此の如き歌のシラベの抑揚と進行とを綿密に味へばこゝに地上の天国が実感せらるゝ、戦災国土に住むわれらの心に。親鸞聖人の善導大師和讃に

信は願より生ずれば

念仏成仏自然なり

自然はすなはち報土なり

和歌の音調と調和するひゞきが味はるゝ。「願」とは仁愛意志である。「自然」はありのままに明鏡裡に投ぜられたる情景である。いつくしみの意志につながる時に報土・極楽

が実感せらるゝ。天国は近づけり（馬太伝四ノ一七）といふ情意の振興である。二四年元旦  
国旗掲揚許可のマ元師のメッセージの言葉に「この国旗が」「平和の象徴として長へに世界  
の前にひるがへらむことを」とあるをよんで、天地が「自照明」とある古事記の言葉を思ひ  
出さしめらるゝ。古事記や福音書の言葉は今日のわれらの言葉と心理的に脈絡する。降臨昇  
天等の事実は今日そのまま再現出来るとは思はぬが、さういふ言葉が古事記と福音書とに記  
されてあることは明確の史実である。始にコトバあり、といひコトバは光であり、神である  
とは約翰伝巻頭のコトバである。宇宙生命を攝取不捨のアミダブツは尽十方無礙光である。  
法華経觀世音信仰が梵音海潮音の音律を慈母育兒の愛情に結合したものが天満天神菅原道  
真、太平記悲劇の中心人物楠木正成、近世国学の源流僧契沖の如き民族信仰の系列に於いて  
文化神人聖徳太子、善導の音律宗教の大成者親鸞聖人、位人臣を極めて謙抑道徳の模範た  
りし三条実美、祝詞の音調に古代精神の雄偉を会得した吉田松陰等と連絡するのである。  
アメリカのデモクラシイの将来を予言した詩人ホイットマンが私淑したリンカンはスコッ  
トランドの薄倅詩人ウイリアム・ノックスの詩を熱淚滂沱として口吟した詩人であり、自ら  
も詩作した多感温情の人であつた。日本歴代天皇が幼時よりシキシマノミチを修業した歌人  
であつたことは日本の将来の光明を予告する。孟子に「今夫天下之人牧未<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>嗜<sup>レ</sup>殺<sup>レ</sup>人  
者<sup>一</sup>也」と嘆いてをる。この殺人嗜好は弁証法系列思想の余波である。弁証法は「否定作用」

といふ「思想力」が概念を生み出し得るとするのに基づくもので、Aに否定を附加し「非A」とすることダケで実有知レアイレスウイッセンを獲得するとマチガフのである。此の「否定」といふのは実際には反抗心であることはヘエゲルがゲエテに面接会話して告白した所で、ゲエテは此の弁証法の弊害を恐れて之を救ふものは「自然」であるといつて達人の見解を示して居る。弁証法が破壊的残虐行動に転化するのには此の思想法の飛沫である。折衷主義エクレクティズムは生温く非科学的であるとレニンが力説するのも弁証法に憑かれての有りふれた一例である。レニンはロシヤが文化後進国であることを率直に認めて同志に「学ばねばならぬ」と警告して居つたが學術的反省の途中で世を去つたのである。論理学は詩魂に導かれねばならぬ、実有ヴァイシッは思惟デケンクに先行するからだ。ヴント「論理学」一八九三年版第一卷序論には弁証法を正しく批判したヴントの詩魂がよく出て居る。ゲエテ、カアライルを追憶するヴントは青年時代にすでに病床に於いて涅槃の静寂体験者であつた。

#### コスモス

秋ふけてさびしき庭に美しくいろとりどりのあさざくら咲く(二三)

一三年一月二四日「山梨日々」に「コスモス咲く御文庫前にて」と註して「最近の天皇陛下」の御写真を掲げた。御帽子を手に歩みをとどめられし御姿勢に、全宇宙の進展を一瞬に

集約せられたる生命の寂靜を味はしめられた。從<sup>レ</sup>仏逍遙<sup>シテ</sup>歸<sup>ニ</sup>自然<sup>一</sup>といふ善導大師のコトバが此時自分の心に浮んだのである。コスモスは比島死刑囚の墓にも咲いてゐる花である。

(藤田武文氏「文春」二六年十月号の文による)

このころ「国民<sup>くにたみ</sup>とともに心をいたためつつ歸り来ぬ人をただ待ちに待つ。外国<sup>とくごく</sup>につらさしおびて歸りこし人を迎へむまごころをもて」と述懐せられた。当時「天皇免訴の理由」が「キーンン檢察官談」として二三年五月二九日の新聞に報ぜられ、UP通信極東総支配人マイルズ・ヴォーン氏署名の通信「天皇地位の安定」は同情をこめて報ぜられた。万感錯綜する情意を平易に表現する和歌と、その作者天皇の御表情とを仰ぐものの深沈の情緒よ。

### 折にふれて

枯れ立てるコスモスのみにむらがりこかはらひわは冬たつ朝<sup>あした</sup>(二四)

一首の主格「こかはらひわ」を第四句に置いて第五句にポツンと「冬たつ朝」と置く、一首の姿勢は安定といふよりむしろ断続的で、小鳥の動揺する諸体位がさながらに活躍してゐる。「立春」を「春立つ」といふが「冬立つ」は現実に即して慣用法にとらはれぬ。変易<sup>へんえき</sup>無常の姿そのままに動揺する、奇<sup>い</sup>きしらべである。

神奈川県訓盲院

めしひたる少女がともの編物にはげむ姿を感じてわれ見つ

「はげむ」の一語は労作意志に直結する。「感<sup>あ</sup>けて」に近代感覚が顫動する。「少女がとも」の「とも」と集団生活を表現する。一語一語に精微の妙趣がしのばしめらるゝ。「いくしみ」の言調である。声を出して音読朗誦すれば一首三十一音の音律に乗つてその一語一語は生命の脈絡につながる。

吉田松陰が「神州不滅」といつた「神州」とは実際には「天朝の御学風」であり、具体的には「和歌」である。和歌の批判は正しい學術の任務であり民族興亡の分岐する枢機である。皇室式微はシキシマノミチ興隆の前提条件であつた。外形は衰微するかに見えても中核威力は減退せざる光はコトバの光である。ヒロクナリセマクナリツツカミヨリタエセヌモノハシキシマノミチである。宇宙の原理、人生の法則、榮枯盛衰の波動に随順すれども「以<sup>レ</sup>和為<sup>レ</sup>貴」のまたツマゴミニヤヘガキツクルの精神を伝へる和歌シキシマノミチはその波動を久遠のみ空にひびかしむる。全世界を東西に分つ文化の海潮音交錯するひびきを抱納せよシキシマノミチよ。その第一声をわれらは眼前<sup>まへまへ</sup>に全心身にこれをきくのである。発声して朗誦せよそのしらべを「百万遍」朗誦せよ。

## 今上御歌解説 (第二稿)

「人間天皇」の御歌の純学術的研究、先入の偏見、儀礼形式を離れて、平易の解釈、通俗の説明を志す。

### ——天皇象徴性の学術的分析——

戦にやぶれし後の今もなほ民たみのより来てここに草とる (二二年作)

五七七七、三十一字 (三十一音) の和歌は途中で切らずに休まずに一気に、堂々とゆつくりよむ。それで自然に調子が出てくる。上の句五七五、下の句七七と二段に切らぬこと。

「人間天皇」御自身が「戦にやぶれし」と言はるゝ、これは日本歴史上未曾有みぞうの重大事実でそれをあつさりかう言はるゝ。「今」の一語に注意する。イマは「生間まゐ」で、生命の中核としての現在実存生成の瞬間である。「ここに草とる」、は宮中で草をとる、である。「草とる」は日用語である。贅沢ぜいたくは生活から締出されてをる。

夕立の雨ふるごとに春日野の尾花が末の白露思はゆ  
夕づく日さすや河辺に構屋つくるやの形かたをよろしみうべぞより来る。

(万葉一六、小鯛王)

左註 右歌二首、小鯛王宴居之日取こたひのみかみまゐ琴登時必先吟すなはち二詠此歌一也。

和歌は上下三千年連続するものなることを実感して詠み又味ふべきもの。

身につもる罪やいかなる罪ならむ。今日ふる雪と共に消ななむ（源実朝）  
ゼイタクせぬ簡素生活者にも無量の日光がそそがれる。

### 興居島にて

静かなる潮の干潟の砂ほりてもとめえしかなおほみどりゆむし（二五）

室戸なる一夜の宿のたましだをうつくしと見つ岩間々々に（同）

「静かなる」の一句をおちついて味ひ、「潮の干潟」といふ複雑の内容を簡約に示す造語を仔細に味ひ、一語々々を味ひつつ、オホミドリユムシと打とめると、此の珍しい環形動物のさゝやかな生命に作者天皇の御心が集注し、この微小生物は大自然にひろがりつゝ、全宇宙につながる。この一首をしづかに朗詠すれば心境は寂滅の静さに入り忘我の歡喜が湧く。

タマシダは亜熱帯植物、それを眼前にウツクシと見る、美しはイツクシと近親語で、美しと見るのは慈むことである。美は仁、愛また慈悲とつらなる。芸術と宗教とは近親である。一首にまとまつた和歌は無限の自然そのもので、一首を詠むことは苦惱人生より解脱することである。朗詠することは念仏することと通ずる。説経に対して念仏が呪文の役をするやうに和歌も三十一文字にまとまつて居るから唱名の代りをする。観音の慈悲を説く普門品を含む法華経は中世以来上下に普及し、歴代天皇を始め楠木正成も加藤清正も其信者であり、聖徳太子、菅原道真、親鸞聖人は観音の

化身であると信ぜられ、近世国学の開祖、空海の末流真言密教の僧、契沖は天満天神菅原道真の崇拜者であつた。契沖はその學術と信念とによつて和歌しきしまのみちの學術的樹立者となつたのである。

「美しと見つ」は藝術的直観の三昧境に入る刹那を表現する。「見つ」は「見る」を現在完了の形で強調する。これは仏の相好を観念し、仏の法身を憶念するにもあらず、もはら仏の名号を直接声を出して称念する、といふ念仏唱名の態度である。間接に観念憶念し思慮反省するのではなく声を出して万人ひとしくその名をよぶのである。唱へれば相互間に通ふのである。契沖は「光こそ光に通へ唱ふれば仏も同じみ代のもし火」と唱へることの意義を詠んだ。「光」はコトバで、音を出して唱へることで、それが和歌をヨムことと通ずる。この生きた生命をつたへるコトバが無窮無量に連続するその経路がシキシマノミチである。祈りのコトバ、称名のコトバ、ウタのコトバ、それが耳目に訴へる、生命の生きた脈絡である。「心法色形あることは顯教の知らざる所なり」(契沖)「悟性は自然の高さにとどかない。」(ゲエテ)「かねの音の聞ゆる時ぞ夢路より現にかへるさかひなりける」(契沖)鐘声が心身に連絡する時、その人の心身は全宇宙に連絡しその中に没入する、三昧境に入るのである。これが真言密教象徴主義の深秘である。コトノハノミチ和歌は學術的論理學の精密を以て念仏の礼拝行為と阿弥陀經教理とを連絡するのである。莊嚴の仏國土に衆鳥も微妙になくをきけば、自然に念仏、念法、念僧、篤敬三宝の心を生ずるといふのは和歌により華光乱転する美の世界に入れば忘我歡喜するのである。和歌シキシマノミチが「天地も動かす」といふ妙境に入る

のは今上御歌がその好適例である。

「美しと見つ岩間々々に」と「岩間」といふコトバも和歌の用語としては清新潑瀾としてをる。潮の引く岩間藻の中石の下海牛をとる夏の日ざかり

の一首にも「岩間」がある。これはイハマモノナカ、イシノシタ ウミウシと同音の重ねるとともに一首は緊縮され、その句法は蕪村の

柳散り水涸れ石とところどころ

を思はしむるものがある。句を切り概念を引離すと、概念は急速度に融合する。ここに拈華微笑、瞬目の妙旨がある。無完成、生成しつつある一瞬に触るるシラベである。

### 松上雪

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞをしき人もかくあれ(二一)

「松ぞをしき」とまつすぐにいひ一転して「人もかくあれ」と率直に命令形を用ゐるのは

たて山の空にそびゆるをしきにならへとぞ思ふみよのすがたも

といふ東宮時代の御作とともに作者の意志は純粹清明率直に述べらるゝ。此の風格はニゴリナキ心のすがたである。

広き野を流れゆけども最上川海に入るまでにごらざりけり(東宮時代御作)

とともに同じ伝統と修養とによる「天朝の御学風」の客観的証明である。此の希望と要請との根源は相互同情共感の純粹素直の思ひやりである。

#### 大島療養所

あな悲し病忘れて旗をふる人の心のいかにと思へば(二五)

船ばたに立ちて島をば見つつ思ふ病やしなふ人のいかにと(同)

四国巡幸の御歌である。旗をふりつつ御船の方向に海岸を走りお見送りする人々を双眼鏡で見そなはしつ詠まれたのであるといふ。「あな悲し」といふコトバは万葉集から二十一代集には用例がない。「あゝ悲し親あり妻ある人々をみなたすけむに手だてはなきか」といふ船長三田峻策氏の四十九首連作中の一首があるが、それは大正年間の作である。

「あな悲し」は非常時の痛切の同情に密着するコトバである。この忠義感情は、ここでは感激の涙のうちに上下君民の階次をも消え失せしむる。このニゴラヌ清明の心境は神の心に通ふのである。それを御歌を朗誦しつつ自然に感受する、その手だてをと思つてこの解説を書くのである。

「人の心の」「病やしなふ人のいかにと」此の主格を示す助詞(てにをは)のがよく御歌に用ゐられる。これを「が」又は「は」と比較すれば、「の」が簡單率直に主語を指示するコトバであることがわかる。

一切ノ法(理論)ヲ学ンデ貫綜縷練シツツそこから念仏に向ひ、またコトノハノミチの和歌に転

ずれば、ここに無窮の世界が開かれ無量寿の生命が実感せらるゝ、それは「美<sup>うつく</sup>し」と感じ、慈<sup>いづく</sup>しむ心が起る、その時刻の極促即ち一瞬に全心身活動を「断滅」しつゝ、「相統」する、そのために三十一字の和歌、また六字の名号を唱へるのである。天朝を中心としてこの道の三千年の伝統が呼応共鳴する、それが無極自然を逍遙する「天地をも動かす」コトノハノマコトノミチである。それが「ひとりつむ言の葉草」である。ヒトリツムコトノハグサノナカリセバナニニココロヲナグサメテマシ(明治三八 明治天皇)

## 今上天皇御歌解説 (第三稿)

### — 天皇象徴性の学術的分析 —

「人間天皇」の御歌みうたの純学術的研究、先入偏見儀礼形式を離れて、平易の解釈、通俗の説明を志す。

戦にやぶれし後の今もなほ民のより来てここに草とる (二一年)

五七五七七三十一字(音、綴)の和歌は繰返して、堂々と、あせらずゆつくり誦む。五七五、七

七と句切らずに一氣に誦む。

夕立の雨ふるごとに春日野の尾花が末の白露思はゆ（万葉一六）

夕づく日さすや河辺に構屋の形をよろしみうべぞより来る（同）

身につもる罪やいかなる罪ならむ今日ふる雪と共に消ななむ（源実朝）

和歌は太古より上下三千年連続し全国民に親まれて来たもので、繰り返しゆつくりよんで居れば、此の伝統のしらべ（調子）が生れて来て身につく。万葉集の歌は小鯛王の作で酒宴の時琴を取つてまづ此歌をうたつたものである。実朝は稀有最勝の歌人である。此の三首を数回繰返しつ御歌を何回も何回も繰返しつ、「人間天皇」が御自身で「戦にやぶれし後の、今」といはるゝ、これは日本歴史上未曾有の重大事実であることを実感する。それをアツサリさういはるゝ。そして、「敗れし後の今」といふ一語が和歌の奥儀を示す。イマは生間の瞬間で、それが生命の中核である。それが万物生成実存の源泉であり根元である。「ここ」は天皇御住ひの宮中である。「草とる」は日用俗語で、贅沢を締出した簡素の生活の表現である。「より」来て、のヨリは寄り、依り、集り、である。草とる、の「とる」の本義は「手でとる」ことである。

### 興居島にて

静かなる潮の干潟の砂ほりてもとめえしかなおほみどりゆむし（二五）  
室戸なる一夜の宿のたましだを美しと見つ岩間々に（同）

静か、のシヅは下、沈むのシヅである。潮干、干潟、の二語が密着して「潮の干潟」が合成さるゝ。「もとめえしかな」モトメは「本」を探る、「えし」のエは獲物の得エである。えしかなのカナはよく利いて居る。此の珍しい環形動物のさゝやかな生物に作者天皇の御心が集注し、この微小生物は大自然にひろがりつゝ、全宇宙につながる。一首を静かに朗詠すれば、涅槃の寂滅に入り、忘我の歡喜が湧く。

タマシダは亜熱帯植物、それを眼前にウツクシトミル、といふ美しは、イツクシと近親語で、美しと見るのは慈しむことである。美は仁、愛また慈悲とつらなる。芸術と宗教とは近親である。「一首に円つた」和歌は、マトマツタことによつて宇宙のカタチをそなへ、一首としてよむとき苦惱の人生が断念され、そこから解脱する。読経に対して称名念仏が呪文の役目を果たす如く、三十一字の和歌は思惟冥想の繫絆を解くのである。称名のコトバの調子が人の心身を宇宙意志につなぐのである。「心法色形あることは顯教の知らざる所なり」と契沖が説いたのは、法然親鸞の念仏宗に近接し、ゲエテが「悟性は自然の高さにとどかない」といつたのは「かねの音の聞ゆる時ぞ夢路より現にかへるさかひなりける」と契沖が真言密教の秘義を説いたのと同じである。

心法色形ある、とは心理法則は色形をそなへた具体的なものだ、といふこと。だからあるがままの具体的現実の随順せよといふこと。ここに自然随順、神ながらの道がある。ここに和歌の論理学があり、それが自然法爾の教義であり、自然逍遙主義がある。礼拝し「従ふ」ことである。忠孝はこのマメヤカニシタガフことである。自然科学と精神とはここに交流し、八万四千の法門は

念仏の一向真宗に帰着する。諸芸術は文化の支脈を総撰し、ここに万物調和の人道主義が生成する。それが光明無量寿命無量の平和である。古今東西文化は「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」(親鸞聖人) また「四方海みなはらからと思ふ世」(明治天皇)の世界平和の思想に抱納せらるゝ。

此の見地からいへば「自力」とは個人の智解思慮に執着すること、「他力」とは宇宙(自然、如来、無量寿仏、アミダブツ、神)の意志(本願)に随順服従することである。自然に自力を離れて念仏する、没我称名するを清浄心といふ、自我を忘却するのである。

# 万葉集論

—明治四十一年、四十二年「アカネ」連載—

## 一、万葉集の研究に就て

純抒情詩的和歌が漸次發展して叙景的和歌を生じ、思想的和歌を生じ、思想感情の分枝は、和歌をして人間意志生活全体の反映たらしめず、人生の或る一部分の反映たらしめ、自然の衝動によらず人為的技巧によりて作歌するに至れる時代の推移にともなふ自然の傾向は、本論に於て額田王以下数人の作物につきて時代的に研究せる所により明かならむ。

詩歌の生命はそが人生全体の反映なることに存す。人間の要求は全体を理想とす。故に人間の活動は一層完全なる情態の希求に基く。しかして人間が其理想境を自己心中に見出さむとするときに生るるものは詩歌也。即ち吾人は全体の感情を一点に集注せむとする也。

人生の迷ひは感情の区分に基くもの也。吾人が全体の感情を動かし得るに至らば之を悟と名づく可し。詩歌に於ては作者も読者も全体感情をはたらかすの快感を得るを理想とす。故に詩歌の主なる又は根底の内容は男女の恋愛也。恋愛は全体感情をはたらかす点に於て人生活動の諸現象中最も模範的のものなれば也。詩歌が内容及形式の統一緊密を要求し散漫冗長を忌む所以もまた此の全体感情の表現たむがため也。

故に詩歌を論じ又は詩歌を作らむとするものは此の全体感情をはたらかせたる実験を人生

の上より直接に或は内心の静観によりなしたる人ならざる可らず。吾人は吾人の感情全体をはたらかすことによつて始めて人生の真相を認め得べし。故に詩歌が物質的文明のあらゆる勢力を超越して其威厳を保持しつつある所以は、他の人生上の活動よりも詩歌を作り又は味ふことの人間生存の目的に適あたひたれば也。詩歌のこの根本的特質は詩歌をして小宇宙たらしむるもの也。故に上代に於て人間は比較的詩歌に縁ありたるは、其生活情態の比較的簡單にして自己存在を自覚し人生及宇宙を統一して認識するに外部よりの障害少なりし故也。されども近世に及んでは人生は漸次複雑を加へ人々は外よりの強迫により機械的にはたらしき社会的団体生活を営み何等の自覚もなく死する也。此の複雑なる社会情態にありて之に感化せられざるのみならず、此の複雑なる社会情態の真相を看破し、外部にあらはれたる複雑を自己心中に簡單化し、人間本来の真面目を發揮するの行動をなすものを天才となす也。同様に国民としては外来の刺激に屈せずして寧ろ爲めに醒覚し国民的自覚を有せる時に始めて眞の詩歌を得べし。外来の文化に眩惑せる間は眞の詩歌は生れず。此の点に於て詩人は国民性の権化たらざる可らず。教育せられ経験を積みたる国民の小児たらざる可らず。

故に詩人は個人としては恋愛を、国民としては本国を憧憬の対象とせざる可らず。故に詩歌研究は国民全体のあらゆる方面の運動を知るに非ざれば完全に非ず。されど予は万葉集研究に於て個人心理情態を中心として論じたり。これは亦境遇上止むを得ざる所にして十分な

る研究は後日にゆづらざる可らず。

抒情詩的和歌は渾然たる思想をもつとも直接に表現せるを以て含蓄多く詩歌としての価値よりいふ時は之を第一に置かざる可らず。文学として感情の純粹にして形式の完備せる短詩形にして主観的方面と客観的方面とを代表するものは抒情詩的短歌と俳句也。人間思想の複雑を加ふるにしたがひ抒情詩的和歌が叙景的思想的の二方向に發展するは自然也。されども詩歌の主たる内容たるべきは人間精神生活全体にして決して外界現象にあらず。故に吾人の思想感情を余りに客観化し又分解する時は其芸術的価値を失ふに至るべし。

されど吾人の思想感情に客観的内容を与へ直覺的会得をなさしむるには必ず客観的対象と哲学的反省とを求めざる可らず。故に此点に於て和歌及俳句は詩歌の二要素にして、和歌發展の径路亦此の二要素を暗示するもの也。しかして此二要素を結合し客観的確實を有し造形美術に於ける如く直覺的に会得せられ内容豊富にして変化あり、深遠なる思想の底に熱烈なる感情の躍動する如き後世の理想的詩歌を得んとするには必ず其要素たるべき和歌俳句の研究をなさざる可らず。又日本国民が日本語を以て日本国民の思想感情を主として歌ひたる万葉集の研究より始むるに非ざれば他の詩歌研究は今日の日本人に取りては無意義也。日本人として詩歌文学を研究せむとして日本の詩歌文学の研究を研究の根本に置かざる如きは其愚笑ふべし。万葉集の文学史上の意義及価値は今簡単に述ぶるを得ず。

## 一、詩歌製作の衝動と其表現法を論ず

### (一) 生死苦樂の問題

一切の生物は自己の存在を保たむとする如く他者に対して運動す。自己と比すべき他なくば自己の存在は無意義なれば也。されど存在を完成したる時は死也。生きむとするは即ち死せむとする也。希求の対象を得たる時は自己の存在を完成したる時也。此瞬間吾人は自己と他とを二なりと感ぜず全く一となり差別滅したる時也。則ち存在の意義を失ひたる時也。自我の意識を失ひたる時也。人の生を欲するは死を欲するに外ならず、吾人は無意識の悦樂を得むと欲して活動し居る也。生と死とは別種のものに非ず連続せる両端也。苦と樂とは一を捨て去つて他を得可きものに非ず。苦と樂と生と死と皆同一の事實に向つて異りたる見地より命じたる異名に過ぎず。故に生は苦也。何となれば吾人は此真理に反対なる予想をなし、消え去るが故にこそ歡喜はあれ、其歡喜の常住ならむことを欲す。故に予想は事實として継ぎ起り来る感情と矛盾す。此の人間の迷は吾人の生の限り因果相統して底止する無し。

試に思へ指頭を傷けて始めて指の存在を強く感ず。精神的力のみならず、物理的力も障害にあうて始めて外に発す。障害に屈せず、追求の念燃ゆるが如く、人為的拘束を破りて猛進

し、指頭まさに美果に触れむとす此の瞬間は実に解脱の瞬間也。まさに得むとする激しき予想は却つて現在空虚の感情を激せしめ、欲求の心的活動最高度に達せむとする瞬間也。此の瞬間未だ満足の休息無く、失望の昏迷無く、主客彼我の差別滅せむとして未だ滅せず、精神力の興奮緊張其極に達せむとして、人為的拘束氷の如く融け、人間精神本来の活動を現じ来る時、身にも心にも溢るる思を自ら堪へ、夢と消ゆるはかなき此一瞬に至る道程を冷かに觀察し其過ぎ去り易き大調和の一瞬に永久の生命を与ふべく言語により其心的経過を客観化せむとする自然の要求を感じ来る能力を有する天才をまちて、詩歌はここに作らるるもの也。

## (二) 無常なる解脱の一瞬間

吾人をして更に此間の消息を詳述せしめよ。此の瞬間吾人は宇宙を統一せられたる全き一つとして感得す。強烈なる精神力が外界運命を征服したる時也。詩歌は自然力に対する人間の凱歌也。大宇宙を吾人の胸中に見出す也。しかれどもこれ反省の結果其の然るを認むるものにして、直接に其心的情態を驗すれば、前述の如く全く因果關係を超越したる自由奔放の精神活動也。此の如き精神活動を「無目的なる」或は「直観的」等の形容を以てあらはさむとする也。吾人は此瞬間に於てのみそれ自身に目的ある觀察思考行動をとり、万象を統一的に感得するの快感を得可し。然れどもこれ実に過度の一瞬間にして、此につぐべきは沈静弛

緩の心的情態也。此の過ぎ去りやすきに名付けて審美的仮感とはいふ也。物質と形式、現実と理想、現象と本体等は吾人が斯の如き感情を経験したる事実を追想して客観化したる諸概念に過ぎず。

此の解脱の感情は最も短かき継続を有す。何となれば其精神活動の速力最高度に達したる時なれば也。此の最も無常なる強烈の感情の裏には悠久無為の感情電光一閃し来らむとす。然れどもこれ吾人が其精神活動を肉体的行動に表現せずして、心中の黙想に解脱の活路を求めむとする冷静なる反省によるに非ざれば此の間の消息を解す可らず。何となれば肉体的行動によりて其感情の解脱を求めむとせば、其行動は自然なれども反省し、自覚するの余裕無ければ也。即ち不自然なる行動障害ある境遇のうちにおいて、精神的に自然なる行動を起し得可き力を潜ましめて、自発的なる心よりの叫びによりて感情を解脱せむとする時、始めて詩歌製作の衝動起る也。故に詩人は過去の夢の如き酔へるが如き絶対的なる印象を喚起し来り、目を静かなる天然に放ち、思を自己の経験にめぐらし、復活し来る自己心中の経験を、之に適応する言語により模写したるもの即詩也。

### (三) 文芸の客観性

此の製作をなす場合の反省の精神作用は詩歌の客観性を有する所以にして、宗教の全く真

撃のみを求むるに對し、文学及他芸術の時に遊戯的傾向をとることある所以也。故に喜劇的文学と悲劇的文学とは其根本を異にせるに非ずして、全く其製作し方の比較的直接的反省によつて、比較的間接の反省によるとの差にして、喜劇的文学の智に傾き哲學的となり、悲劇的文学の情に傾き宗教的となり、前者の自然派的写實的傾向をとり、後者の理想的神秘的傾向をとるは、皆其製作する時の反省の直接なるか間接なるかによるもの、決して別種の内容を有するものに非ず。

#### (四) 言語による芸術的表現

吾人は哲學的冥想或は理論より立論するものに非ず、日本固有の和歌俳句の研究製作を中心とせる一般詩歌の研究製作の實驗の根柢に立つもの也。故に論の詳細に進むにしたがひ和歌俳句の論に入らむとす。故に製作当時の反省の直接なるか間接なるかに就て詳述せむとするは、和歌俳句比較研究の上に必要なれば也。元來詩歌はある心的情態を言語により表現して始めて意義あるもの也。故に如何なる詩的なる心的情態も之を言語により表現せざれば詩としては無意義也。此心的情態を言語により客観化する事は詩歌の客観性を有する所以なれども、詩歌は常に読者をしてある實在を想起せしめざる可らず。故に哲學の如く一般的概括的真理を教ふるものと區別せざる可らざると同時に、単に内心の經驗を生命とし經文其他

は其内的經驗すなはち信念の符号としてのみ意義を有し実世間的活動を主眼とする宗教とも區別し、繪画に於ける形色の如く詩歌の言語組織の上に客觀的価値を与へざる可らず。元來言語は實在的像を直覺的に表現する能はざれども、概念の配合排列はある程度まで實在的像を描き得ると同時に、言語は其音楽的性質により、心的経過の最も直接なる模写をなし得可し。故に文学は哲学と宗教の間に、又芸術相互間に於ては繪画彫刻と音楽との中間に其位置を占む。吾國詩歌に於て詩歌中の兩極端を代表するものは和歌と俳句也。

#### (五) 製作的反省の心理的説明

吾人は再言せむとす、俳句和歌の内的區別は其表現法すなはち製作時の反省の直接なることの度によるもの也。此の反省なる概念を心理学的に説明すれば、吾人の心的活動漸次活発になり来り、初めの差別を認め意識を有せる節奏的感情次第に活動の極限に達し、ここに感情の運動に主觀的障害起り、殆んど無意識なる調和の感情来らむとす。此の禁欲的なる無意識の瞬間即ち自己を忘れたる瞬間に吾人は、外物を直接自己と關係無き見地に於て觀察し、外物相互の關係の真相を認め得、此の如き調和の感じを之に適應すべき外物の排列配合によりて客觀化せむとする、即ち作物を一瞥して直に調和の寂滅的禁欲的感情を起さしむるやうに製作せむとするを比較的間接なる反省と名附け、なほ自我意識を有し差別を認め活発に振

動しつゝ進行する節奏的感情を之に平行する言語の節奏により模写し、次ぎ来るべき感情をば之を言外の余韻に托せむとするを比較的直接なる反省と名附く。しかして兩者間諸種程度上の差別あること勿論也。

### (六) 詩人特有の心的経過

次に吾人の言はむと欲する所のものは、詩歌製作の衝動を感じ来る心的経過は決して普通の情態に非ず、必ず、異常の心的経過也。故に詩歌は、日常の現象に非ずして全く稀有の現象也。故に詩歌の研究は、普通一般の智識にては成功する能はず。故に詩歌の研究には病態心理学研究の如き用意なからざる可らず。即ち心理学的要素それ自身異常なる性質を有するのみならず、其要素の結合法亦異常にして、純粹なる回想觀念を直接經驗の如く客観化すること、は詩歌製作者の欠く可らざる能力と認む可く、したがひて再生的要素異常なる強さを有し、現実直接の刺激より起る觀念を變形せしむることあるは自然にして、これ詩人の思想行動の常規を逸する所以也。又觀念融合の力強烈なるを以て觀念融合の結果生ずる感情はつねに兩極端に飛躍するを自然なりとす。理解もいつしか想像におもむき更に全く受動的なる觀念連合にいたり、狂人の固定觀念により拘束せらるるが如きに類するに至る。然れども詩人は狂人には非ず。自覚しつゝ異常なる心理作用を起し、これに堪へて自ら冷静に自己を観察する精

神力を有する偉人也。詩歌の生命は異常なる強烈なる精神力にあり。差別と平等と、努力と無為と、飢渴と満足とを結合する精神力にあり。

故に詩人を以て空漠なる感情に耽るものとなすは大なる誤解也。元來感情は其自己生存力薄弱にして、且不明瞭なるもの故之を説かむとするや、思想の内容をかり来らざる可らず、即ち觀念の結合を以て之を説かざる可らず。故に其結果は觀念の並列となり、作者の有する夢の如き感情は少しも言語上に表現せられざるに至る。故に吾人は一層發達したる意志活動を以て文學の主なる内容となし、感情は其結果又は前驅として起り来らしめざる可らず。

此の意志作用は心的現象の出発点にして又歸着点也。感情情緒といふが如きは心理学的解剖の結果の名にして實在としては意志作用が最も模範的のもの也。故に吾人は感情情緒の意志に發展する経過を写して詩歌を得ざる可らず。即ち製作によりて感情の解脱を求めざる可らず。換言すれば製作は製作せざるを得ずして迫られて製作するものならざる可らず。詩人が自己心中にのみ其友を見出さざる可らざる時始めて眞の詩歌は製作せらるる也。故に詩歌製作は任意動作、撰択動作、にあらざして衝動動作たるべきを理想とす。即ち從屬的動機自然に消滅し、唯一なる動機により定められたる意志動作也。然れども詩歌製作は肉体的行動には非ざるを以て飢ゑたる犬が肉に走るが如き簡單初歩なるものに非ず。非常なる実世間的修養の結果再び小兒の自然にかへりたるもの也。即任意動作撰択動作の反復により漸次に機

械化せられたる動作なるが故に、反射的にしてしかも目的に適ひたる動作也。故に詩歌製作は能動的感情に移り行く間になさるるもの也。而して喜劇的智的文学は主として能動感情を過重し、悲劇的情的文学は受動的感情を主なる内容とするに至る。文学的製作物が吾人と与ふる効果は製作物それ自身にあらはれたる心的現象のみより定めらるるものに非ずして、之に続き起り来る心的現象との和也。故に吾人は異りたる方法によりて同一の効果を可し。これ各芸術の分るる所以にして又芸術中に各傾向の生ずる所以也。故に吾人は和歌と俳句とを比較研究し又は和歌の変遷を論ずるに当り、其外形及表現法の差を認むるとともに、詩歌として其根柢を同じうするを認め互に相交渉する所を究めむとす。

### (七) 視官聴官

視官と聴官とに就て観察するに、吾人が空間的及時間的表象を作るに二者の助け合ふは言ふまでもなければ、又二者の間の差別は十分に研究せざる可らず。視官は能動的にして開閉自在にして其生理的刺激は割合長く継続し化学的变化を生ず。聴官は受動的にしてつねに開放せられ、ここに起る生理的刺激は物理的にして其間変形少し。故に視官よりは能動的感情を起し聴官よりは受動的感情を起すが如き印象を得。抒情詩的悲劇的文学が音楽的となり、

叙事的喜劇的文学は絵画的に傾く。近世西洋に於ては絵画彫刻は形体を捨てて詩趣を憧憬し、文学は抒情的音調を捨てて絵画的描写をつとむるに至れり。勿論同時に相反する二傾向の存在するは明かなる事実なれども顯著なる一般的なる現象に就ていふ也。此の傾向は支那を中心とせる東洋芸術の特色にして、支那文字の内容濃き象形文字なることと、支那絵画の技巧が十分なる写生をなし得ず、殊に人物を描いて直接なる情趣を表現する能はざるが故に風景を描いて或る情趣の符号となさむとし、筆力氣韻を重んずるに至るは其主要なる原因ならむ。漢字を混用する中古以来の国文は能動的なる視覚に訴へて同時的直覺的に理解せらるる直線的の形を有する漢字と全く音より成立ち時間的に受動的に刺激せらるる曲線よりなる仮名よりの印象を調和するの困難なる自然思想の速力を減じ、融合の度を減じ到底痛切なる抒情詩的詩歌の製作せらるべくもあらざるに至れり。此間にありて和歌が一般国民に偉大なる魔力を有せりしも吾人が大和言葉によりてのみ感情をのべたるを以て也。

(八) 快不快及適意不適意

皮膚に於ける直接なる普通感覚は快不快の感情を起せども、視覚聴覚よりは興奮沈靜緊張弛緩の類目に入るべき客観的感情を起す。快不快の実感的感情を強むる時は単に意志力のみを感じ其感情の方向を意識せざるに至る。されどもここに再び其内容を要求せむとし快不快

の实感を得んとす。これ客観的感情は快不快の直接なる感情を内容として発達せるものなるを以て也。此の普通感情と客観的感情とは互に相交渉するものなるを知らざる可らず。詩歌に於て客観的内容を与ふるものは觀念にして主観的情趣をあらはすものは音調也。觀念は意識の全内容を分肢することによつて客観化せられ、情調は雑多なる感覺觀念を統一することによりて現はる。故に音調は詩歌に力を与へ、材料は變化を与ふ。和歌は音調を重んじ句切れを嫌ひ、俳句は觀念の配合を生命とし切字を約束とす。俳句は解剖的にして和歌は綜合的也。吾人が将来の詩歌が必ず和歌俳句を根柢とするものたらざる可らざるを信ずる所以は此の二傾向を同一なる詩歌に兼備せしめざれば十分なる効果を取むる能はざれば也。詩歌は感情を重んぜざる可らざれども同時に其感情に客観的内容を与へざる可らず。即ち理智と感情との調和は詩歌の生命也。

### (九) 詩歌の「山」と情調

簡單なる感覺は統一的意識の客観的主観的要素也。而してある感情要素他の要素を圧する時意識は統一せらるる也。故に詩歌に於ては何等か主なる情緒が他を從屬せしむるの位置にあらざる可らず。各觀念感情が同一なる勢力を有し横列的に排列せられ、繁多なる觀念の推積をなすが如きは、實在の情趣を表現せるものに非ずして、偽れる或は他の外形を模倣した

る作物たるべきものの証也。此の情調を客観化したるものを「山」と名附くる也。

### (十) 観念と感情との不和

観念と感情とは相ともなふ可きものなれども其間に不和を来すことあり。それが消極的に、観念に対する感情が統覚連想作用の感情のために圧せらるることあり。これ俳句に於て見る所也。積極的に観念に対する感情勢力を得、観念を圧するに至るは和歌に於て見る所也。此れ二様の意識統一にともなふ現象也。俳句の調和の感じを主として和歌の節奏の感じを主とする所以ここに存す。故に俳句は観念の配合を以て情趣の種類方向を示し、和歌は音調を以て情趣の推移動搖を示す。

### (十一) 俳句の詩形

俳句の詩形は十七綴より成るを以て、実世間的意志生活を歌ふべきほどの長さ無し。故に常に実世間を超絶したる純審美的感情を表現す。すなはち外物と自己との関係より起るに非ず外物と外物との関係より起る感情也。故に実世間と直接交渉せる感情を詠ずる如きは所謂月並也。此の内容を没却し形式を過重する故に如何なる材料をも之を詠じて美感を損ぜざる也。

紅梅の落花燃ゆらむ馬の糞

大徳の糞ひりおはす枯野哉

の如きあり。

(十二) 嗅覚

詩歌に於て、俳句の如き特別の形式を有する者に於ても客観化するに困難なる、直接刺戟なければ再生する能はざる味覚嗅覚の叙述の如きは避けざる可らず。況んや、味覚嗅覚の感覺が一首の主なる位置を占むるが如きは詩歌として全く無価値也。古今集春上にある

折りつれば袖こそほへ梅の花ありとやここにうぐひすの鳴く

色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれしやどの梅ぞも

宿近く梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

梅の花立よるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける

の如き梅の香が全く各首の中心となり居る也。其無価値なること言ふも愚か也。

(十三) 和歌の特色

俳句が一般の詩と異なる如く和歌も亦一般芸術に比して異なる点あるを知らざる可らず。和歌は聴く人を予想する事多し。即応答的の性質を有し実世間と密接の關係を有するを以て純

粹なる芸術品と異なる場合あり。「玉手さしまき」といふが如き触覚に關する印象觀念感情も容易に全体の情趣に統一せられ審美的効果を失はざること多し。且抒情詩としての和歌が全体の情趣を定むべき音調は内触覚及聴覚を感覺的要素とせる節奏の感情に依立するものなるを以て、和歌製作の動機の裏には節奏的なる肉体運動あるを以て肉体的感覺を和歌に詠ずるは自然也。されど觸覚的感覚感情が一首の中心となる如きは不可也。必ず實感を解脱せしむべき程の強き統一的情趣なからざる可らず。

#### (十四) 初等審美感情

初等審美感情は之を内包的及外延的の二に分類す。

内包的初等審美感情は調和の感情にして更に之を音の調和及色の調和の二に分つ。

外延的初等審美感情は(一)空間的性質を有し主として視覚に依立する形体感情及(二)時間的性質を有し主として聴覚に依立する節奏感情と及(三)此の両者は又觸覚に依立するを以て其結果として比例の感情を生ず。詩歌に於ては調和なる同時的感情は直接に表現し能はざるを普通とすれども俳句の短詩形に於ては此の調和の感情に類する觀念の瞬間的融合による美感を表現し得。されど和歌に於ては觀念の結合俳句に於ける如く緊密ならず又形式も長く直接此の調和の感情を表現し得ず。寧ろ時間的なる節奏の感情を主として現はし調和の感

情は之を其余韻に托せんとする也。又形体感情及比例感情は間接に審美的効果に貢献す。俳句にて「やかな止」を忌み和歌に於て頭重脚輕を忌む如き此の形体比例の感情の要求也。

### (十五) 調和と節奏

故に今調和節奏の二感情につきて詳述せむとす。和歌に於ては実世間的意志生活を節奏的に表現し、其最後究極の解脱調和の境を余韻の間に彷彿せしめむとす。俳句に於ては直接に調和の感情を起さしめむとする故に、すでに大調和の解脱境に出入しつつあるを予想せざる可らず。故に「季」「切字」等の約束を根柢となせり。故に俳句は作者に非ざれば十分味ふ能はず。何となれば俳句の生命は客觀的の言辞の上よりも作者が製作の工夫の上に存するを以て也。古今其作者の多数なる俳句に及ぶものなき亦同一の理由に基くもの也。故に俳句製作は宗教的實驗に類する傾向を生じ団體を作り其中心たるべき人格を崇拜する風を生ず。和歌に於ても後世其風を生じ滑稽なる伝授等の行はれたる也。

俳句に於ては各觀念の強度を感じずれどもそれが時間的節奏をば感ぜず。節奏は高低強弱二要素の規則的反復を要す。故に「五七五綴」の三句よりなる俳句に於ては到底節奏の感じを現はす可らず。和歌に於て五七五七の二群を繰返す時次の五七は前と同じ程度の緊張を与へず節奏は全体の経過を完了したる上に於て始めて一定の効果を有するものなる故、其連続の

長短により各要素の高低強弱の差を増減せざる可らず。故に五七五七七の形式は一定の節奏を表現するに適當なるものにして五七五七七と連続し來り更に七を繰返すを以て高潮に達して終結するを以て也。されど五七五七七の形式は変化ある多様の節奏をあらはさむには余りに短小也。且後世五、七五、七七の形式に變り行きては和歌は全く節奏の美を失へり。竹の里人の歌論に於て常に調子を論じたる實に和歌の根本生命は調子に存するを以て也。

#### (十六) 詩歌と哲学宗教

論理的感情は吾人思考の客觀的目的物及其相互間の關係より生ずるもの也。道德的感情は吾人の思考及行動に対する主觀的意識より發生する自我感情也。宗教的感情は自我感情と天然との關係より發するものにして皆能動的智的感情也。斯の如き能動的感情の統一融合せられ、それが初等審美感情と結合する時審美的感情起り來る也。故に審美的感情も、實世間的感情と根本の性質を異にするものに非ずして寧ろ吾人の情的生活を統一する所のものにして之を保持せしむるに初等審美感情を以てする也。故に其感情の進行には感官的感情及情緒をも其要素とし或は味ふ者に与ふる結果的印象として之を包括す。故に完全なる芸術は論理的感情道德的感情及宗教的感情を興奮せしむ。主として簡單なる形体の感情を起すべき均齊及比例的分枝等の形式より成立し論理的倫理的及宗教的感情と獨立し易き建築に於てすらも其大

さの關係を認識する時は論理的感情を満足せしめ又其形式が吾人認識の極限に達する如き大規模なる時は宗教的感情を起さしむ。造形美術は悉く外界現象と結合するが故に連合關係主要の地位を占むるに至るべし。されども詩歌に於ては統覺的觀念結合にともなふ即ち思想進行の難易成否に依立する智的感情をもつとも直接にあらはし得可し。音楽は之を主として情緒の動揺及解脫としてあらはす。故に詩歌と音楽とは互に相助くもの也。

### (十七) 審美的感情

此の智的感情と初等審美的感情と官覺的感情情緒とが相融合し統一したる効果に合一せらるることにより高級の審美的感情起る。故に詩歌に於ては初等審美感情が智的感情の保持者となり又統一者となる也。詩的感情は凡ての内容が必ず同一効果に向つて融合せざる可らず、各現象を万有全体と相関連せしめざる可らず、外見の繁雜を徹して事物の本体真相を直觀せざる可らず。自己の意志を一度びは断絶に導き再び之を宇宙に拡充せざる可らず。自己を宇宙に同化せしめ再び覺めて自己心中に宇宙を見出さざる可らず。

### (十八) 詩歌の本性

詩は天然現象及人間情的生活に就て言ひたるものに非ず、詩は就て言はるべきもの也。何

となれば詩歌創作は吾人の心的活動の全体を直接に発表したる一種の衝動作用なれば也。詩そのものは無自覺の所産たらざる可らざれば也。即ち詩は天然の模写に非ずして天然そのもの也。

吾人の思想は全体として一つとして、統一せられたるものとして実在す。故に其實在の心的活動を表現したる言語の形式及内容の上にも統一なからざる可らず。而して其統一は作者の精神力と技巧とによりて數種の程度に現はさるべしと雖もある一定の優勢なる情趣により統一せられたる緊密なる、しかも簡明にして眞実なる内容と形式とを有する詩歌にして始めて紛乱を極めたる実地意志生活に対し解脱の歎びと生命の力とを与ふるを得可し。

### (十九) 詩歌批評の標準

故に詩歌批評の標準はそれが眞実なる心的活動の表現なりや否やと、其表現せられたる内容と形式とが吾人を実世間の紛乱より解脱せしむるの力ありや否やにあり。故に統一し融合し緊密なる形式内容と強烈なる感情の消長とに詩人の心を傾けつくせる熱誠を認めざるものは高級の詩歌といふ可らず。所謂低徊趣味者流の遊戯的消閑的文学の如き吾人の理想を去るものと數千里也。

### (二十) 詩的解脱の心的情態

詩歌は徒爾に製作せらるべきものに非ず。必ず大なる人格の感化と捨身追求の熱誠とを以てし、機縁相熟し行滿ち功成るの時、忽然花の開くが如く心中に輝き来る光明に驚嘆したる叫び即詩歌也。雜と助とを捨て正に向つて專念希求し、能生の因たる吾人の意志と、所生の縁たる客觀的対象と相融和し、理想と現実と、究竟と莊嚴と相一致するの一瞬に詩歌は製作せらるる也。詩歌は日常平凡の現象に非ず、微妙にして稀有の現象也。故に詩歌製作の瞬間に於ては吾人は万象を全体として、又一定の關係に於て結合せられたるものとして活発なる情趣のもとに認識したる時に製作したるものに非ざれば理想的詩歌とは云ふ可らず。

人間一度此の人生の真相に触れなば宇宙万象は全く新たなるものとして伝來の拘束を脱し吾人の眼前に活躍すべし。此の機に触るるや、驚嘆につぐに自己能力の自覺となり、勇猛なる心的活動無邊際に増長し、骨体に徹入せざれば止まざらむとす。これ函蓋相稱ふが如き靜止的調和に非ず、他と自己と分つ可らざる水波の如く、悲しみに非ず歡びに非ず、差別の見減せむとするの一刹那、電光一閃し來る心意の転機也。乱意に非ず空閑に非ず、乱意を捨てて空閑に処せんとするの一刹那也。即得必定時刻の極促也。水火相交るの間に於ける唯一の白道也。貧窮富貴下智高才罪根淨業の差別の見氷の如く消え去るの一瞬也。漸に非ずして頓、堅涉に非ずして横超、淺近に非ずして深遠、雜に非ずして純、迂路に非ずして捷徑也。詩歌は人生至高の經驗をへたる天才の所有也。日常平凡の談話には非ず。

### 三、和歌俳句の形式比較論及

#### 現代歌俳墮落の原因

万葉集に於てすでに客観的、思想的、写生的和歌發展し来り、其近世的傾向は俳句に至つて極点に達せり。国文学に於ける純抒情詩的作物は万葉集を以て終を告げたりといふ可し。物語日記等は天然の景の描写以外人間の運命を写せども抒情詩的文学の根本要素たる人間の努力を写さず。物語日記隨筆の類より後世の殆んど一切の文学は皆和歌と何等かの關係にあり。されど其關係の如何なるものなるかを觀察するに、皆和歌を味ふ上に於て關係するものにして、和歌と歌学書との關係也。決して和歌製作と同様の動機より製作せられたるもの非ず。

和歌に長歌旋頭歌及短歌の三形式ありと雖も、吾人の認めて今後發達すべき形式となすものは短歌三十一綴の形式也。又和歌發展の歴史より見るも常に短歌が優勢なるを認む可く、今は主として短歌に就て論ぜんとす。

俳句は十七綴より成る故に其詩形の短小なる、時間的節奏により情趣の進行動搖を摸する

能はず、又空間的形体の直覺的描写をなす程の長さ無し。故に同時的調和の感情を現はさむとす。其短小なる詩形は同時的調和の感情を現はす可く内容たる諸觀念を密接に利那的に融合せしむるに好都合也。故に要素たる各觀念は其外延的性質を失ひ内包的性質のものとなる。

古池や蛙飛び込む水の音

芭蕉

荒海や佐渡に横たふ天の川

同

牡丹散つて打ち重りぬ二三片

蕪村

斧入れて香に驚くや冬木立

同

古池の句に於て吾人は古池に蛙飛び込むといふ实景を目に浮べて趣味を感じるには非ず。古池、水音、なる觀念の一群を「蛙飛び込む」といふ一群の優勢なる觀念の下に統一し、其觀念融合の結果一種の形式的、純審美的の感情を起す也。作者が实景を見たる上に作りたりと仮定するも、必ず複雑なる实景より得たる情趣を眼目して考へ、其情趣の本質たる可き觀念を探り来りて製作したるもの也。此觀念の撰択に於てすでに間接なる思考を経たるものなるを知る可く、其動く動かぬといふ如き皆此觀念撰択の上よりいへるものにして俳句の技巧を無視する能はざる所以也。而して要素たる各觀念は一見何等の親しみも無く関係も無き如くにして其裏面には内的關係を有せしめざる可らず。此暗示の了解は俳句の秘訣也。何となれば俳句は各觀念の同時的調和に其趣味を托するものなるを以て、要素たる各觀念は電光の

如く融合して吾人をして其不意打に驚ろかしむるが如くせざれば十分の効果を得可からず。しかして表面上、外見上無縁の諸觀念の融合する時其融合もつとも迅速也。故に俳句は機智的傾向を有するを避く可らず。故に全く実世間を忘却し、実世間を自己と關係なきものとして觀察し得る客観性を有する人格に非ざれば眞の俳人たる能はず。此意味に於て俳句は詩歌中もつとも客観性を有しもつとも審美的のもの也。元来言語は吾人の思想を時間的に分肢して表現するものなるを以て直覺的了解をなさむは困難也。されど俳句に於ては比較的直覺的に了解し得、これ俳句を誦して得たる感じの絵画を一瞥直覺して得たる感じと類する所以にして、俳句も亦絵画の如き成立を有し得と誤解し絵画に於ける色形に平行する外延的性質を有する觀念を以て其空漠なる感情の色合を記載せむとする迷妄を生ずる所以也。これ眞摯なる態度と精確なる思考無き文芸の門外漢が、詩の成立及製作の動機とその批評解釈及賞玩とを混同するより起り来る極めて普通なる文芸墮落の徑路也。俳句は其之を味ふ感じの上に於てこそ絵画を味ふと平行する感じを得べけれ、其成立上よりすれば其要素たる各觀念は純然たる内包的性質のものにして、絵画の色彩輪郭とは全然異れり。俳句は特別の短詩なりと雖も遂に詩也。言語の芸術也。詩と造形美術とは決して混同すべからず。混同、疑惑、徘徊、彷徨斯の如くにして芸術は墮落する。其原因は一也、至誠の欠如のみ。故に又俳句は危険の詩也。俳句は正道を行くものに非ず奇道を行くもの也。其感情の節奏的進行を写さず単

刀直入に調和の利那的感情をあらはさむとする故其趣味は純なる丈一分の弛緩を許さず。一分の間隙亦全体の趣味を破る可ければ也。故に俳句は極めてキワドキ性質を有す。故に俳句を誦しての美感は複雑なる葛藤の簡單化せられたる所に生ずる也。迅速なる理解より起る美感也。故に俳句は決して天然の模写に非ず。天然の模写をなさむには絵画彫刻によるに若かず、少くも散文を以てすべし。何を苦んでか俳句の如き小詩形を以てせむ。故に「荒海や」の句も其生命は「佐渡に横ふ」なる思ひ附にありて、荒海に天の川が傾き居るといふ客觀的光景の壮大なるものを選択したるが生命に非ず。単に壮大なる光景を概叙せむとならば決して難事に非ず。古来此句を解するもの単に壮大の趣味をあらはせりといふに止り伝來的に名句なりといふのみ。これ文芸に対する門外漢の淺見のみ。「牡丹散つて」の句も決して牡丹の散り重りたる光景を吾人の眼に浮ばしむるを以て生命あるに非ず、「打重りぬ二三片」の二句が牡丹の花の特色を本質的に暗示し無限の連想の中心点を与ふるを以て也。故にその花は必ず牡丹ならざる可らず。これ俳句が題詠の域を離るる能はず、少くも季の連想を離るる能はざる所以也。「牡丹散つて」と「打重りぬ二三片」の二句が表面に於てはさほど必然的近親の關係にありとも見えざれども、吾人の牡丹に対する經驗は突如として二群の觀念を迅速に融合せしむ。「斧入れて」の句も「香に驚くや」の一句に生命を托するもの也。

物いへば唇寒し秋の風

吾人は俳句より一般的真理の一般的叙述を期待せず。此句各觀念の結合余りに理性的にして理窟に適ひすぎて平凡に失す。かかること誰にても思ひ附き又知り居ること也。吾人は主張の真なるを認むれども何等の美感をも起すこと無し。斯の如きは俳句に一般的人情を運び来つて内容たらしめむとするもの也。然る時は各觀念余りに自然に結合し居る故連想の余地無し。之を月並趣味といふ也。小説殊に世俗的戯作者的小説の作に従事することにより其人の詩人的価値を失ふは実に此点にあり。俳句は上述の如き性質を有するを以て時代思潮に對する反動的精神の所産にして其脱俗的機智的批評的になるは自然の傾向也。直接の感情を直接に告白する恋愛詩の如き俳句の能ふ所に非ず。

和歌は直接の人情を歌ふものにして国民一般の精神を代表し恋愛を歌へるもの其主要の部を占む。和歌は時間的節奏と空間的形態の感情とにより情緒生活の進行動揺を表現す。和歌が実世間意志生活と密接の關係を有し抒情詩の性質を有する所以也。

抽象的觀念は外界の事物と直接關係するものなるを以て、直覺的にして主観客観に對する差別明らかならざる上代に於ては抽象的觀念に依立する客観的詩歌は生れざりし也。故に抒情詩の内容は智的整理の内容そのものにして感情の未だ外界対象に散布せられざるもの也。故に常に單純なる形式を要求す。何となれば實在の感情は統一せられたる單一のものにして



和<sup>にぎ</sup>田<sup>た</sup>津<sup>つ</sup>に船<sup>ふね</sup>乗<sup>り</sup>せむと月<sup>つき</sup>待<sup>て</sup>てば潮<sup>うしほ</sup>もかなひぬ今はこぎてな

也。齊<sup>せい</sup>明<sup>めい</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>わう</sup>の西<sup>せい</sup>征<sup>てい</sup>にしたがひまつりし時の歌なるべし。發展しつつある事件の過渡の一瞬を捕へ「今はこぎてな」の一句を以て全体を統一す。光景一転の機を指して前後を連想せしめ無限の余韻あらしむ。後世技巧的作物の及ぶ所に非ず。同卷同じく齊明天皇代の歌

三<sup>みつ</sup>諸<sup>もろ</sup>山<sup>やま</sup>見<sup>み</sup>つつ行<sup>ゆ</sup>け吾<sup>われ</sup>が背<sup>せ</sup>子<sup>こ</sup>がい立<sup>た</sup>たし見<sup>み</sup>けむ巖<sup>いわ</sup>櫃<sup>づ</sup>がもと

措辞の大胆にして内容の清新なる、何等か痛切なる感情の根柢に潜めばなるべし。前の「甕道の宮子の借廬し思はゆ」の歌も単に行幸の昔をしのぶとのみにはあらざらむ。

同卷 近江大津宮御宇天皇代天皇詔三内大臣藤原朝臣三競憐三春山万花之艶、秋山

千葉之彩二時額田大王以レ歌判レ之歌

冬<sup>ふゆ</sup>ごもり 春<sup>はる</sup>去<sup>り</sup>くれば 鳴<sup>な</sup>かざりし 鳥<sup>とり</sup>も来<sup>き</sup>鳴<sup>な</sup>きぬ 咲<sup>さ</sup>かざりし 花<sup>はな</sup>もさけれど 山

を茂<sup>も</sup>み 入<sup>い</sup>りても収<sup>と</sup>らず 草<sup>くさ</sup>を深<sup>ふか</sup>み とりても見<sup>み</sup>ず 秋<sup>あき</sup>山の 木<sup>き</sup>の葉<sup>は</sup>を見ては 黄<sup>もみぢ</sup>葉<sup>ぢ</sup>を

ば 取<sup>と</sup>りてぞしぬぶ 青<sup>あお</sup>きをば 置<sup>お</sup>きてぞ嘆<sup>なげ</sup>く そこしうらめし 秋<sup>あき</sup>山<sup>やま</sup>われは

詩人の生命は外形の華美に非ずして内心の真実也。其の取りてはしぬび置きては嘆かむ秋の黄葉の身にしむ趣のうらめしさよと歌へる、よく女詩人の心持ちをあらはせり。

吾人をして自由に想像を走らしむれば、相去るいよいよ遠く思ひいよいよしげく大海人の皇子をしぬぶ絶えせぬ思ひの歌にあらはれしには非ざるか。天武紀に「天皇始娶鏡王女額田

姫王生十市皇女」とあり、懷風藻葛城王伝に「王子者淡海帝之孫大友皇子之長子也母淨明原天皇之長女十市内親王」とあり。故に大友皇子と十市皇女との間に葛城王生れ給ひしを見れば額田姫王は天武天皇の皇子にましませし時めされたまひしは明か也。しかして第一卷天皇遊獵蒲生野時額田王作歌

茜刺す紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる  
皇太子答歌

紫のにはへる妹をにくくあらば人孀故に吾恋ひめやも

#### 第四卷額田王思近江天皇作歌

君待つと吾が恋居れば我やどの簾動かし秋の風吹く

等の歌を見れば天智天皇は大海人の皇子より額田姫王を奪ひ給へるが如し。しかして第二卷の近江大津宮御宇天皇代天皇大殯之時歌二首中

かからむとかねて知りせば大御船はてしとまりにしめ結はましを

は額田王と註あり。又同卷これにつぎて従山科御陵退散之時額田王作歌一首

八隅知し わが大君の かしこしや みはかつかふる 山科の 鏡の山に 夜はも 夜  
のことごと 昼はも 日の盡 ねのみを なきつつありてや 百しきの 大宮人は 行  
きわかれなむ

等の歌を見れば、姫王は天智天皇崩御まで大津宮にいませるを知るべく、又第二卷藤原宮御宇天皇代幸吉野宮時弓削皇子賜額田王歌一首、額田王奉和歌一首あり。これにつき従吉野折取蘿生松柯遣時額田王奉入歌一首あり。これも弓削皇子に奉りしなるべくともに天武天皇御在世のとき吉野に行幸ありしを思ひ出で贈答せしものならむ。故に壬申乱後姫王は又天武天皇にめされ、天皇崩御の後は持統天皇に仕へまつりしならむ。此の姫王の歌簡潔にして力強きは吾人必ず心いたき人生上の経験の其の根柢に横はるを思はずんばあらず。

第一卷額田王下近江国時作歌

味酒 うまさけ 三輪山 みわのやま 青丹吉 奈良山の 山の間よ い隠るまで 道のくま いつもるまで  
つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 心無く 雲の 隠さふべしや

反歌

三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらなむ隠さふべしや

これにつぎて井戸王歌

三輪山の林のさきの狭野榛の衣につくなす目につく吾背

此の歌の作者につきて異説あり。前二首の次に「右二首歌山上憶良大夫類聚歌林曰遷都近江国時御覽三輪山御歌焉」とあり最後一首の左註に「右一首歌今案不似和歌但旧本載于此次故以猶載焉」とあり。井戸王は考ふる所なし。故に「井戸王即和歌」は衍文として三首とも

額田王の歌とするか、又は井戸王が額田王の心を思ひやりて作れるか、さなくばともに一人を思ひ出でて唱和したりと見るべし。「吾背」を額田王とせば和する意不明也。又「即和歌」とあれど後人の追加せるものなるやも知る可らず。「下近江国」とある故遷都以前の作ならむとするが普通なれど、遷都の時大海人の皇子に別れ奉りてなつかしき三輪山を見かへりつつ詠ませしならむとも推し得可し。又前にあげし

三諸山見つつ行け吾背子がいたたし見けむ巖櫃がもと

の歌と対して見るときは、三諸山三輪山同じなればこの地は額田女王に対して忘るべからざる魔力を有せるを知るべし。又「三輪山の林のさき」の歌をも女王の歌とする時は女王の歌は少くとも単なる叙景叙事に非ずして切実なる抒情詩なることを知るべく、藤原朝以後の歌人の如く、対句を作り活き活きたる感情を固定したる形式により枯死せしむること無く、内部を貫く感情は直線的にして明瞭に、外言辭に発しては曲折の妙を極む。

茜刺紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖ふる

の「野守は見ずや」の一句を転倒して上に置き「君が袖ふる」といひ切らずして結べる、

三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらなむ隠さふべしや

と天然を人格化する激烈なる感情は従山科御陵退散之時額田王作歌一首とある長歌の結末「泣きつつありてや百しきの大宮人は行き別れなむ」と言ひ切らざる、後世の平板にして多

言に失せる作と比して新鮮なる生命の漲るを見る。これ多事にして活動的なりし天智天武兩帝の治世の間にありて感情鋭敏才智明快なる女性の必ず深刻なる印象を受けて斯の如き万葉女詩人中第一の傑作をなせしならむ。

## 五、柿本人麿の生活と作歌

- 一、其経歴
- 二、其時代
- 三、無常観
- 四、行幸の歌
- 五、詩歌製作の秘訣
- 六、支那思想の影響
- 七、羈旅の歌
- 八、思想的抒情詩
- 九、国家宗族に対する思想及人生観
- 十、悲惨の運命
- 十一、彼の歌の特色、憶良との比較、彼の死

## 一、其経歴

人麿の伝は万葉集による外考ふべきたよりなし。其万葉集第一卷第二卷にある彼が詠は皆藤原宮御宇天皇代と表する下にあり。第三卷天皇遊雷岳時柿本朝臣人麿作歌一首とあるは単に雑歌と表する下にありて、確かには知る可らざれども前後より推すに天皇といふは持統天皇なるが如し。第三卷長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麿作歌一首並短歌とある、同卷柿本朝臣人麿献新田部皇子歌一首並短歌とあるも亦持統天皇の朝の作ならむ。長皇子は天武天皇第四の皇子にして靈龜元年に薨ぜられ、新田部皇子は天武天皇第七の皇子にして天平七年薨ぜられたり。故に人麿は持統文武兩帝の御世に専ら作歌せしものなるを知る也。第十卷秋雑歌部七夕歌三十八首あり、次に「此歌庚辰年作之」とあり、次に「右柿本朝臣人麿歌集出」とあり。庚辰は天武天皇の八年にあたる故、此歌を人麿の作とするも、別人の作とするも、人麿歌集を人麿の集めしものとすれば当時彼が作歌の練習時代なるべく、又第二卷日並皇子殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首並短歌とあるを見るに其舎人なりしが如く、皇子は朱鳥三年二十八歳にて薨ぜられたるを思へば人麿は当時決して老年にあらざりしを知るべし。又次いで高市皇子に仕へまつれるを見ても彼は当時壮年時代なりしならむ。第二卷高市皇子城上殯之時柿本朝臣人麿作歌一首並短歌とある長歌の、万葉集約五千の長短歌中他に比すべきなき豪宕の

雄篇なるを以てしても彼が藤原朝初期に於て其天才を十分發揮せるを知るべし。高市皇子薨御は朱鳥十年也。第二卷藤原宮御宇天皇代柿本朝臣人麿在石見国臨死之時自傷作歌一首ありこれ寧樂遷都以前なること明かなれば彼は和銅三年以前に死せりし也。第二卷藤原宮御宇天皇代柿本朝臣人麿從石見国別妻上来時歌二首並短歌あり。彼は少くも日並皇子薨御より高市皇子薨御まで都に居りしならむと思はるる故この石見より上京せるは朱鳥三年以前か朱鳥十年以後なるべし。而して其死せるは石見なること明かなれば、其後再び石見に下りしならむ。又第一卷第二卷第三卷の歌によるに吉野行幸等に随ひ奉り諸皇子皇女に歌をも奉りたること明かなり。足迹は近江讚岐筑紫越前に及びたること明か也。又其妻は少くも二人ありたる如し。第二卷柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首並短歌とあるは内容より推して一人を正妻一人を妾となす説あれども必ずしも然りといふ可らず。第二卷柿本朝臣人麿從石見国別妻上来時歌二首並短歌とあるにいへる妻と同人を指すならむ。第二卷柿本朝臣人麿妻依羅娘子与人麿相別歌一首、又同卷柿本朝臣人麿死時妻依羅娘子作歌二首とあるは後妻也。

## 二、其時代

我国の歌聖といはるる人麿は如何なる時代に生れ、如何なる時代に活動したりしか。藤原朝は彼が最も活動したる時代也。当時開国以来千三百年、神功皇后の西征以来朝鮮半島の文

化と富の輸入とは、漸次複雑を加へ来りし外交關係とともに吾國民に国家的自覺を与へ、雄略天皇に至り内治上の大發展をなし、欽明天皇の朝仏教輸入せられてより約五十年にして推古朝に至りては、聖德太子の保護の下に仏教を中心とし有らゆる学芸技術は隋唐支那南北統一の文化とともに印度西域の文化をも輸入し、外来の新鮮なる文化は吾國民を刺激し一躍世界的國民ならしめむとし、大化の改新となり、天智天武兩帝の施設となり、壬申の乱を経て、蓄積せる文化の華まさに開かむとする天平時代の前駆、急潮の如き過度振動の時代、驟風逼迫の時代は即持統文武の藤原朝也。天平時代の燦乎目を射るの花は、やがて翻々面を撲つ落下凋落の哀情なく、実に培養醱酵の生育時代、急激なる動揺を起すべき潜勢力内部に漲ぎりし時代也。万葉集古事記風土記等上代国文学、後世律令の模範たる大宝令等は、一方推古朝よりの仏教にもなひし美術の發展とともに、吾国後代文化のあらゆる種子としてすでに地に散布せられ発育しつつありし時代也。感情濃かにして意氣旺盛なる詩人が根柢に潜める振動のあらはれを目に見、身に感じては自ら痛切なる歌詠とならざる可らず。

### 三、無常感

彼の歌には悲痛の情を述べたるもの多し。近江荒都をすぎては天津宮の昔をしぬび、其

「空見つ 大和を措きて 青丹吉 奈良山をこえ いかさまに 思ほしけめか……」

と歌へる、必ず何等かの寓意あらむ。其の

「神の命の　大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここといへども　霞立つ　春日か霧きれる  
夏草か　繁くなりたる」

と一種の人格化を以て天然に対せる、第三卷柿本朝臣人麿歌一首とある

「淡海ちひみのうみ夕浪千鳥汝ながなけば心もしぬにいにしへ思ほゆ」

といへる、同卷柿本朝臣人麿從近江国上来至宇治河辺作歌一首

「もののふの八十氏川の網代木にいざよふ波のゆくへ知らずも」

といへる皆同時の作なるべく、感動せる詩人の目には無心のものなし。故に其詠は情景活躍す。世上の諸相はしばらくもとどまらず、過去を追ひ未来を望み目を山川に放たばここに亦人生の真相を見出し得可し。

#### 四、行幸の歌

當時行幸頻々として時に民の業に安んぜざりしことありしならむ。彼は持統帝の吉野行幸には随ひ奉りて第一卷に幸吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌二首并短歌二首あり。左注日本紀を引けるを見るに、朱鳥三年四年五年の間に数度吉野行幸あり、彼の長短歌各二首あるは二回行幸に随ひ奉りしかも知るべからず。同卷之に次いで幸千伊勢国時留京柿本朝臣作歌以下当

麻真人麿妻作歌石上大臣從賀作歌あり。左注に「右日本紀曰朱鳥六年壬辰春三月丙寅戌辰以淨広津瀬王等為留守官於是中納言三輪朝臣高市麿脱其冠位攀上於朝重諫曰農作之前車駕未可以動辛未天皇不從諫遂幸伊勢五月乙丑朔庚午御阿胡行宮」となり、當時人麿の作歌も裏面に此の如き事情あればにや、吉野行幸の時の歌より句々活動せり。

「網の浦に船乗すらむ少女らが珠袋のすそに潮満つらむか

劍著手節の崎に今日もかも大宮人は玉藻かるらむ

潮さるに伊良子の島べこく船に妹乗るらむか荒き島わを」

詩人の生命は現実の享樂に非ず捺望に存す。其「船乗すらむ」「潮満つらむか」「今日もかも」「玉藻かるらむ」「潮さるに」「こく船に」「妹のるらむか」「荒き島わを」といへる悉く動作を表し時間を限り位置方向を定む。故に一読して心に浮ぶものは動く景也。これ作者の精神活躍せるを以て也。

## 五、詩歌製作の秘訣

第一卷輕皇子宿安騎野時柿本朝臣人麿作歌一首並短歌あり、輕皇子は彼がかつて仕へまつりし日並皇子の御子也。

「安見しし吾大君、高光る日の御子、神ながら神さびせずと、太敷かす都を措きて、隠口

の泊瀬の山は、真木立つ荒山道を、石根いはねのしもと押靡おしなべ、坂鳥の朝越えまして、かげろひの夕さり来れば、み雪ふる阿騎あきの大野に、旗薄はたすさぎし條を押靡おしなべ、草枕旅宿りせず、古へ思へば」

其調の漸々急迫するとともに内容亦漸次飽和し来り、主として客観的動作及光景を叙し、最後「古へ思へば」の一句を以て全篇に生命を附与するが如き、巧を求めて達すべきに非ず。其反歌

真草みくさ苺もみぢる荒野にはあれど黄葉もみぢの過ぎにし君が形見とぞこし

これ実に彼が詩歌製作の秘訣を告白せるもの也。自己と天然とを何等か関係あるものとして観察し、つひに自己と天然との差別を認めざるに至り、目に見る形耳に聞く響は発して詩歌となるべし。詩は全体の感情を以て製作せざる可らず。詩歌の客観性を有するを見て詩歌は執着なく冷然対象を観察し描写するものとなすは根本的誤解也。詩歌は執着の極執着を忘るるに至り始めて製作せらるる也。反歌の二

東ひむがしの野にかげろひの立つ見えて反り見すれば月傾ぶきぬ

詩人の感覚は鋭敏也。現象転変の一刹那に全感情を集注し万象を一点の中心に凝集せしむ。過ぎ去る夢の如き一瞬を捕へてこれに無窮の生命を附与す。斯の如き歌を作るもの万葉集歌人中只一人の人麿あるのみ。其悲惨なる境遇にあひて切々断えむとするが如き歌詠をなすも

のありと雖も、内に異常なる感情の振動を潜めて之を客観的対象に繙散せしめ、無限の変化を極むる景の転変を叙し、人生の倏忽を暗示するの詩人的客観性を有するもの、吾人人麿に於て最も顯著なるを見る。

### 反歌の三、

日並知ひなめしの皇子みこの命の馬並めて御獵みかり立たしし時は来向ふ  
彼はつひに其意を直叙せざるを得ざりし也。

## 六、支那思想の影響

### 第三卷天皇遊雷岳之時柿本朝臣人麿作歌一首

すめろぎは神にしませば天雲のいかづちのうへにいほりせるかも

同卷、長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麿作歌一首並短歌とある。その反歌

久方の天ゆく月を綱にさし吾が大君はきぬがさにせり

すめろぎは神にしませば真木の立つ荒山あらかやまなか中に海をなすかも

等の如き支那思想をとりて成功せるもの也。外来の思想も其根本の情趣をとつて新らしき外形を与へざる可らず、故事典故をそのまま引用するが如きは詩歌に生命を与ふる所以に非ず。

七、羈旅の歌

第三卷柿本朝臣人麿羈旅歌八首

三津の崎波をかしこみ隠江の舟こぐ君が行くか奴島に

珠藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島が崎に舟近づきぬ

粟路の野島が崎の浜風に妹が結びし紐吹きかへす

荒栲の藤江が浦に鱧釣る海人とか見らむ旅行く吾を

稲日野も行き過ぎがてに思へれば心こひしき可古の島見ゆ

ともし火の明石の大門に入らむ日やこぎ別れなむ家のあたりを見ず

以上六首石見に下りし時の歌か、筑紫へ下りし時の歌か明かならざれども、同巻に筑紫へ下

る時の歌別にあれば石見へ下る時の歌ならむか。其上京の時の歌

天離かる鄙の長路を恋ひくれば明石の門より倭島見ゆ

飼飯の海庭よくあらし刈ごもの乱れ出づる見ゆ海人の釣船

飼飯は氣比にて越前にあれば前後の歌とは別類なるか或は同じく武庫浦附近の地名なるか疑

を存す。其都を去る悲しき感じと、都に近づき来る希望の感じとをよくあらはせり。

第三卷柿本朝臣人麿下筑紫国時海路作歌二首、

名くはしき稲見の海の奥津浪千重に隠れぬやまと島根は

大君の遠のみかどとあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ

「千重にかくれぬやまと島根は」といへる、遙けき旅路の追想の感をよく現はせり。「奥津浪」と第三句にて切れたるが如くにして直に「千重にかくれぬ」と息もつかせず接続せるところ、後世の腰折三句切れと同一視すべからず。其「神代し思ほゆ」といへるは人麿が常に長歌に於て神代のことより説き起すが如く、彼が現実にのみ生命を托せざる宗教的思想と神話的思想の追憶を有せりし証にして、同時に彼が眞の國民的詩人として祖国本土に対する無意識的憧憬を有せりし所以也。

## 八、思想的抒情詩

### 第四卷相聞、柿本朝臣人麿歌四首

三熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へどただにあはぬかも

古へにありけむ人も吾が如か妹に恋ひつついねがてにけむ

今のみのおざにはあらじ古への人ぞまさりてねにさへなきし

百重にも来及べかもと思へかも君が使の見れど飽かずあらむ

### 第四卷相聞、柿本朝臣人麿歌三首

少女らが袖振山の水垣の久しきときよ思ひき吾は

夏野行く小牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや  
珠衣たまぎぬのさる／＼沈み家の妹に物言はず来て思ひかねつも

直接なる感情を節奏により又は客観的外延ある形象及行動により客観化するは普通芸術の  
方法也。されど直接なる感情を全く外延的性質なき概念の結合により哲学的思想の形式と  
して表現することも決して閑却すべからず、思想的詩歌の生命全くここにかかれれば也。恋は  
距離と障害とを予想条件とす。ただにあはざればこそ心は千重に思ひまざるなれ。少くも詩  
歌に詠ぜんとする恋は簡單なる本能的発作にあらず、必ず自覚反省の心的活動也。故に束の  
間も忘るる能はざる切なる思の発動せる源泉を尋ねんと欲し、「水垣の久しき時よ思ひき吾  
は」「家なる妹に物言はず来て」と嘆じ自らの思を自ら批評解剖し、其「古へにありけむ人  
も吾が如か妹にこひつゝ」といひ、「今のみのわざにはあらじ」といへるに至つては人麿の  
客観性を有せる大詩人たる所以にして、自己心中の経験より推して直に「人生」及「人間」  
のつひに如何なるものぞとの哲学的思想を發せるもの也。眞の詩人は婦女子の如く現実の感  
情に自己を忘却して妄動するものに非ず。思を人生の帰趣に走せ翻つて世上の人を觀察せざ  
る可らず。詩は現実の差別と思想の平等との調和者也。

## 九、国家宗族に対する思想及人生観

彼が仕へまつりし皇子皇女の薨御の時に作れりし歌を研究して、彼が国家宗族に対する国民の感情を如何に代表せるかを知らむと欲す。

第二卷藤原宮御宇天皇代日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌とある、長歌は長篇なるを以てすべてを引用す可らず。

「……吾大君皇子の命の、天の下知しめせば、春花の尊からむと、望月のたたはしけむと、天の下四方の人の、大船の思ひたのみて、天つ水仰ぎてまつに」  
と消え去りし希望を述べ、その

「朝毎に御言みこととはせず、月日のまねくなりぬれ、そこゆゑに皇子の宮人、行方知らずも」と嘆ずる情を一層痛切ならしむ。其反歌

茜刺日は照らせれどぬば玉の夜渡る月の隠らく惜しも

日を天皇にたとへ月を皇子にたとへ奉まつれりとも見らるれど、かく余りに明瞭に解し去りては趣なし。作者もさる明瞭なる考を以て作れりしにはあらざらむ。只彼は日の光は消えざれども、身に近き親しむべき月の光の隠るゝ如く身まかり給ひし皇子をしぬび奉りしならむ。

此の一首を仔細に験する時は人麿が天才たる所以の徴候を認め得可し。詩人の求むる所は普く物を照す日の光にあらずして、直接にただ一すぢに吾身に注ぐ一道の光明也。これ日光

よりも月光星光の詩に歌はるること多き所以也。詩人は近接し得可き現象よりの印象により、近接すべからざる真理の認識に到達せざる可らず。外より得たる智識を自己直接の経験によりて統一したるとき詩歌は製作せらるる也。即彼は光明の存在を知れり。されど吾身に注がれし光を失へり。彼の智は其悲しみを消さむとせり。されども彼の情は空しき思ひに堪へて近づくままに消えゆく影を追はむとはする也。第二卷柿本朝臣人麿献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌一首並短歌とあるは彼が作として甚だ振はず。同卷明日香皇女木庭殯宮之時柿朝臣人麿作歌一首並短歌、長篇なれば全体を引く可らず、譬を明日香川にかりて

「玉藻ぞ絶ゆれば生ふる、川藻もぞ枯るれば生ふる」と自然の不滅にして人世の須叟なるを嘆ず。

「朝宮を忘れ給ふや 夕宮を忘れ給ふや」

と反復し、ありし世春秋の遊楽を追憶し、最後

「音のみも名のみも絶えず、天地のいや遠長く、思ひ行かむ御名にかけせる、明日香河万代までに、はしきやし吾大君の 形見か此を」

と結ぶ。前にあげし、

真草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ来し

とともに永遠の生命を有為轉變の人世に求むる偉大なる精神力を見るべし。其反歌

明日香川しがらみ渡しせかませば流るゝ水ものどにかあらまし

と天然はなほ人力を加ふ可し、人間の運命は人力の如何とする能はずと嘆ずる所以は、彼の強烈なる意志力はなほ人間の運命をも塞きとめなむとすれば也。

人麿の思想は雄大等の漠然たる形容詞を以て無雜作に評し去るべきものに非ず。

第二卷高市皇子城上殯之時柿本朝臣人麿作歌一首並短歌あり。高市皇子は天武の皇子にして壬申乱に大功あり、壬申乱より皇子薨御の朱鳥十年まで二十五年也。人麿は戦前に於ける皇子の勇ましき活動を円熟せる筆を以て叙して曰く、

「大御身おほみみに太刀取り佩かばし、大御手に弓取持たし、御軍みいくさをあどもひ給ひ、調ふる鼓の音は、雷の声ときくまで、吹きなせる小角つがの音も、敵見あかたる虎か吠ゆると、諸人のおびゆるまでに、指しあぐる旗の靡きは、冬ごもり春さりくれば、野辺ごとにつきてある火の、風のむた靡くが如く、取もたす弓はづのさわぎは、み雪ふる冬の林に、嵐かもし巻きたると、思ふまでききのかしこく、引き放つ矢のしげけく、大雪のみだれてきたれ、まつろはず立向ひしも、露霜の消なば消ぬべく、行く鳥の競あそふ端に、渡会わたらひの齋いっきの宮ゆ、神風にい吹き惑はし、天雲を日の目も見せず、常闇とこやみに覆ひ給ひて 定めてし」

と息をもつがせぬ急雨の如き激調の間、豊富にして清朗なる調子あり、一点の混濁無きは実に彼が氣力の旺盛にして一分の弛緩無きを証するもの也。吾人は斯の如き歌を誦するとき日

本語の将来を悲観する能はざる也。其一転して

「鶉うらちなすい這ひもとほり、さむらへどさむらひかねて、春鳥のさまよひぬれば」  
と沈静悲哀の調となり、其御葬の事を叙して最後に

「然れども吾大君の、万代と思ほしめして、作らしし香久山の宮、万代に過ぎんと思へや、天あめの如ごとふりさけ見つゝ、玉禪たまだんかけてしぬばむ かしこかれども」

と悲哀を堪へて過去の印象を永久に保持せむとする精神力は運命の力をも感ぜざらむとす。其「万代にすぎむと思へや」の一句味ふ可し。彼の詩歌が内容外形をば異にするとも、唯一根本思想の必ずいづれにか認められ得可きは注意すべきこと也。其反歌

久方の天知らしつる君ゆゑに月日も知らず恋ひ渡るかも

心に漲る主観的感情は外界現象をも認識せざるに至らむとす。皇子に対し奉りて身をも忘るる忠義の心あらはるゝと同時に、極めて親しき感じをあらはせることは我国民の国家を大なる家の如く感じ居るならむ。前後を通して万葉詩人の思想は皇室宗族郷土に向つて中心を求めつゝありしを見る。

## 十、悲慘の運命

彼が一身上に経験せる悲慘なる運命を如何に詩歌によりて解脱せるかを見む。詩歌は絶望

の声に非ず、勝利の叫びなれば也。

第二卷柿本朝臣人麿從石見国別妻上来時歌二首並短歌、長篇なれば全体を引用せず、其結末、

「浪のむた彼より此より、玉藻なす依りねし妹を、露霜の置きてしくれば、此道の八十隈毎に、万たび顧みすれど、弥遠に里はさかりぬ、いや高に山も越え来ぬ、夏草の思ひしなえて、しぬぶらむ妹があたり見む 靡け此山」

と相別るゝ一步一步しぬぶ心はいよゝ切に、其力無き妹が嘆を思ひやりては誰か男子の勇猛心を起さざらむ。「妹があたり見む靡け此山」の一句が天然を叱咤するの勇氣を見る可し。されども其反歌

石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか

小竹の葉はみ山もさやにさやげども吾は妹思ふ別れ来ぬれば

を誦するとき興奮緊張せる意志力の再び纏綿たる情緒に緩和するを認むべく、根本の情趣に動揺波瀾あるは人麿の歌を常に天空に翱翔するの語勢あらしむる所以也。其二の結末

「益荒雄と思へる吾も 敷妙の衣の袖は とほりてぬれぬ」といひ其反歌、

青駒の足搔を早み雲井にぞ妹があたりをすぎて来にける

秋山に落つる黄葉しばらくはな散りみだれそ妹があたり見む

天然は詩人の心のまゝに或は悲しみ或は歓ぶ、妹がり通ふべくは青駒の早き足搔をなどかいたまむ、人目をしぬぶべくは落つる黄葉をなどか嘆かむ。死せる天然に生命を附与するものは真の抒情詩人也。

第二卷柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首並短歌、第一の歌

「かげろひの磐垣淵いはかきもの、かくれのみこひつゝあるに」と言ひ

「吾恋の千重の一重も、思ひやるこゝろもあれやと、吾妹が止まず出て見し、軽の市に吾が立ち聞けば、玉手次たまぢ畝火の山に、なく鳥の音もきこえず、玉梓の道行く人も、独りだに似てし行かねば」

といへるを誦すれば、詩人の心が常に一点に集注せられ一切の現象をこの中心に干係せしむるを見るべし。一心専念にして始めて詩歌は製作せらるゝ也。散乱せる雑念を滅し去らしむるところに詩の生命あり。空漠なる感情の夢の如き記載は決して高級の詩歌に非ず。第二の歌、

「吾妹子が形見に置ける、緑児の乞ひ泣く毎に、取与ふ物し無ければ、男じものわきばさみもち」

と妻なき後の実景を叙しそゞろに同情を起さしむるも余りに身に近き出来事の反つて詩人をして想化の余裕なからしむるものあり、彼が歌に特有の語勢無し。彼の歌はある情趣をあらはさんとして作られたるに非ず。心にあふるゝ情趣の自ら音調にあらはれたる也。故に彼のすべての歌は無限の変化を尽して而も澆漓たる生命を宿せり。

### 十一、彼の歌の特色、憶良との比較、彼の死

#### 第二卷吉備采女死後柿本朝臣人麿作歌一首並短歌

秋山の下へる妹、なよ竹のとをよる子らは、いかさまに思ひ居りてか、栲たくなほ継の長き命を、露こそは朝置きて、夕には消ゆといへ、霧こそは夕に立ちて、朝には失すといへ、梓弓音きく吾も、ほのに見つことくやしきを、布栲しよたへの手枕まきて、劔太刀身にそへねけむ、若草のそのつまの子は、さぶしみか思ひてぬらむ、時ならず過ぎにし子らが、朝露のごと夕霧のごと。

これを高市皇子殯宮の時の歌の豪宕莊嚴なるに比して如何に可憐の趣あるか。彼は大瀑の天外より崩落する如く、此は細流の涓々岩伝ひ走るが如し。其純粹にして明快なる内容と、晴朗にして感觸鋭敏なる音調と相調和せる、実に万葉集中他に類例なき雄篇也。路上一瞥の印象は夢の如くたゆたひて消えやらず、常に詩人の胸中にやどれり。其死をきゝては余燼再び点火せられてそが面影彷彿として目にあり。「秋山の下へる妹、なよ竹のとをよる子ら」

と其容儀を叙し、結末「時ならず過ぎにし子らが朝露のごと夕霧のごと」と結ぶ斬々たる筆力は言外の余韻汲めども尽きざらしむ。彼の歌が常に天然と人生人間命数等の問題に触れ居るを認むべく、後世の歌人等が長歌を作り得ざりしも、連作の短歌を作り得ざりしも、一つは複雑なる内容を統一すべき思想を欠きし故也。詩人は必ず深遠なる思想と切実なる感情を併有せざる可らず。其反歌

楽浪さななみの滋賀津の子らかまかり路の川瀬の道を見ればさぶしも

天数あまかずふ大津の子らがあひし日をおほに見しかば今ぞくやしき

長歌と反歌と一動一静相呼応するの妙は人麿に於て最もよく發揮せられたり。

無常觀を有せざるものは大詩人たる能はず。無常なるを感ずればこそ常樂をねがふなれ。人麿が死者を見てよめる歌多きは決して偶然にはあらざる也。

第三卷、柿本朝臣人麿見香具山屍悲慟作歌一首

草枕旅の宿りに誰か孀か国忘れたる家待たなくに

同卷、土形娘子火葬泊瀬山時柿本朝臣人麿作歌一首、

隠口こもりくちの泊瀬の山の山こもりくのまにいざよふ雲は妹にかもあらむ

同卷、溺死出雲娘子火葬吉野時柿本朝臣人麿作歌一首、

山のまに出雲の児らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく

八雲さす出雲の児らか黒髪は吉野の川のおきになづさふ

其主観的感情を直接にいはずして、客観的形容をかりて情緒の瀰散を叙す。これ執着無く快活なる日本国民性の一面の特色を發揮せるもの也。

第二卷讚岐狭岑島視石中死人柿本朝臣人麿作歌一首並短歌、これを第五卷山上臣憶良和為熊凝述志歌一首並短歌とあるに比するに、一つは直接なる見聞により、一つは全くの想像によりて作れる、すでに二詩人性格の差より出づ。従て又題意も全く同じからざれども以て人麿憶良二人の思想人格の差異を知り得可し。人麿は常に主観的感情を中心とすれども、憶良の実世間的意志生活直接の感情にのみ執着せると同じからず。人麿はもとより楽天的なる自然讚美者にはあらざれども、実世間的道德的感情に束縛せられしものには非ざりし也。人麿は「那珂の水門ゆ船浮けて吾が漕きくれば時つ風雲居に吹くに、奥見れば跡位波立ち辺を見れば白浪どよみ」と狭岑島の景を叙し、「浪の音のしげき浜辺を、敷妙の枕となして、荒床とくろぶす君が、家知らば征きてもつげむ、妻知らば来て問はましを、玉梓の道だに知らず、おほしく待か恋ふらむはしき妻らは」と結べるに對して、憶良は全く概括的なる主観的感想のみを述べ、「垂乳の母が手離れ」といひ、「国にあらば父とり見まし、家にあらば母とり見まし、世の中はかくのみならし」といふが如き感情の輪郭を描くに止り微妙なる色合を表現せず、故に感情の消長動揺なき生命なき詩となるにいたる。吾人は直接の一瞥により生命あ

る全体を直覺せざる可らず。解剖分類はそれのみを以てしては決して全体を知る所以に非ず。故に吾人の感想も成るべく直接にいひあらはさざる可らず、外来の思想、伝来の名目を顯みず直接經驗を直接に言現はしてこそ詩歌に生命は宿るなれ。

人麿も相當に漢学の素養ありしこと、其歌の内容及書き方にて知らる。されど彼は全く其羈絆より脱せりし也。吾人は詩人としてもとより人麿を憶良の上に置かむとす、されど詩人に特有なる怨恨の聲は人麿より聞かずして憶良よりきけり。現代を呪ひ現代を諷したるは憶良にして、人麿はつひに忠良なる日本國民たりし也。人麿は此歌に於ても亦「天地の日月と共に満ち行かむ、神の御面と次て来る中の水門ゆ船浮けて」と天地の悠久を讀して人事の無常を嘆ぜり。人麿は常に純粹なる國民的詩人也。彼は愛染心より脱してしかも獸足の惰氣を有せず、故に其行動は円融無礙也。

第二卷、柿本朝臣人麿在石見国臨死之時自傷作歌一首、

鴨山の磐根しまける吾をかも知らずと妹が待ちつゝあらむ

吾国千古の大詩人人麿は六位以下の卑官を以て、石見の辺陬に客死せり。憶良の如く「万代に語りつく可き名」の立たざるを嘆ぜず、死の最後まで思は妹の上でありし也。

## 六、大伴旅人の生活と作歌

大伴氏は歴史上著名なる武人の家也。旅人は安曆の子にして、家持は旅人の子也。官歴は頗はしければ言はず。養老四年太宰帥となり筑紫に下り、天平二年大納言に任ぜられて上京し、天平三年に薨す。

武人は悲壯なる運命を経験す。しかして其子孫に真摯にして熱烈なる性情を遺伝す。和歌は殿上に坐して風月を弄する無気力なる公卿の手に委せられて墮落せり。直接なる人生の経験の痛みを感じずる活動的武人に歌人を有せるは極めて興味あることなり。

### 万葉集第三卷帥大伴卿歌五首

我が盛またかへれやもほとほとに寧楽の都を見ずかなりなむ

吾が命も常にあらぬか昔見し象きさきの小河をがはを行きて見むため

浅茅原あさぢ原つばら／＼に物思へば古りにし里の思ほゆるかも

萱草わすれぐさ吾紐ひもにつく香具山の古りにし里を忘れぬがため

吾行は久ひさにはあらし夢の和太瀬とはならずて淵にあれやも

太宰府にての作也。此等の歌の前後に太宰少弐小野老朝臣歌一首、防人司祐大伴四繩歌二

首、沙弥満誓詠綿歌一首、山上臣憶良罷宴歌一首あり。皆当年太宰府歌人の詠ならむ。小野老朝臣の

青丹吉奈良の都は咲く花のにはふが如く今盛りなり

大伴四繩の

安見しし吾大君のしきませる国の中には都し思ほゆ

藤波の花は盛りになりにけり奈良の都を思ほすや君

満誓の

白縫しらぬひの筑紫の綿は身につけて未いまだ着ねどもあたたかに見ゆ

憶良の

憶良らは今はまからむ子泣くらむ其子の母も吾をまつらむぞ

等の歌をつぎくよまば聖武盛世の面影彷彿として目に浮ばむ。しかして燦爛たる光輝の半面すでに一翳の陰影を認むべし。更に此等の歌につぐ太宰帥大伴卿讚酒歌十三首

験しるし無き物を思はずは一つきの濁れる酒をのむべくあるらし

酒の名を聖ひじりと負いとしんひし古の大きひじりの言ことのよろしさ

古ななの七の賢かしこき人だちも欲ほりするものは酒にしあるらし

賢かしこと物言ふよりも酒のみて酔泣かこきするしまさりたるらし

言はむすべせむすべ知らに極りてたふときものは酒にしあるらし

中々に人とあらずは酒壺となりてしがも酒にしみなむ

あな醜賢をすと酒のまぬ人をよくみれば猿にかも似る

価無き宝といふとも一つきの濁れる酒に豈まさまめやも

夜光る玉といふとも酒のみて心をやるに豈まさまめやも

世の中の遊びの道にをかしきは酔泣きするにありぬべからし

今の世し楽しくあらば来む世には虫にも鳥にも吾はなりなむ

生けるもの遂には死ぬるものになればこの世なる間は楽しくあらな

黙し居て賢するは酒のみて酔泣きするになほしはずけり

支那思想の影響あるは言ふまでもなし。「今の世に」といひ「来む世には」といへる仏教

思想の影響あるを証すべし。「無価宝珠」「夜光璧」「生者必滅」等の翻譯の原義を失はざ

る、枕詞を用ひず初句より意義充実せる句を以て起しつつもなほ結句は全体を安定に統一す

るの力あり。何等客観的像を描くなしに単に思想の変化を以て十三首の連作を完成す、其手

腕驚くべし。これ内面に強烈なる感情の動揺あるを以て、思想の形式感情の動揺と相一致す

れば也。其の「飲むべかるらし」「言のよろしさ」「酒にしあるらし」といふ如き断定的な

らざる言方は生動せる感情を彷彿せしむるものあり。憶良も旅人も外形のみを過重し敬神を

閑却せる文化開展の時代に反抗するものありて斯の如き歌詠ありしならむ。彼等は徳川時代の現世快樂の間に醉生夢死したる戯作流に比して天地の差あり。此の讚酒歌にあらはれたる思想は決して放縱なる樂天的快樂主義にはあらず。ただ煩鎖なる理窟を捨て直接なる感情を重んぜむとしたるものにして、全体に一種諷刺的傾向のあらはれたるを以て見るも、内面に人を動かすの真摯の態度あるを認むべく、後世の輕薄なる快樂主義の町人文学や淺薄なる滑稽文学の諷刺等と混ぜべからず。當時は未だ偽善的なる支那思想は全く國民を腐敗せしめたること徳川時代の如く甚しからず。武人なりとも古郷を恋しとも妻を恋しとも歌へり。少くも憶良旅人等は名義よりも現実の感情を重んぜんとする傾向あり。殊に精神力盛なりと思はる旅人に於ては今の十三首の如きフモリスチツシュのものあり。支那仙人の瘦我慢の現状満足主義と同じからず。常に理想に向はむとする意志力の活動を認め得可し。これ諷刺となり有情滑稽となる所以也。

同卷神龜五年戊辰太宰帥大伴卿思恋故人歌三首、故人は亡妻大伴郎女也。

愛いとくしき人のまきてし敷細しきたへの吾が手枕をまく人あらめや

右一首別去而經数句作歌

かへるべき時にはなりぬ都にて誰がたもとをか吾が枕せむ  
都なる荒れたる家に一人ねば旅にまさりて苦しかるべし

右二首臨近向京之時作歌

天平二年庚午冬十二月太宰帥大伴卿向京上道時作歌五首

吾妹子が見し鞆浦の室の木は常世とこよにあれど見し人ぞなき

鞆浦の磯の室の木見む毎に相見し妹は忘れめやも

磯の上に根はふ室の木見し人を如何なりと問はば語り告げむか

右三首過鞆浦日作歌

妹と来し敏馬みぬめの埼を還るさに独りし見れば涙ぐましも

行くさには二人吾が見し此埼このさきを独ひとりずぐれば情悲しき

右二首過敏馬埼作歌

還入故郷家即作歌三首

人も無き空むなしき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり

妹として二人作りし吾山やま齋さいは木高く繁くなりにけるかも

吾妹子が植うゑし梅の木見る毎に心むせつつ涙しながら

人麿の如く沈痛の調なけれども、憶良の如く概活的思想を冷かに記載するものと異り、過ぎ行く地の風物の変遷にともなひ感情の変化を写し、且明瞭なる音調は一層事件の内容の變化にともなふ感情を澆洩たらしむ。

第四卷大納言兼大將軍大伴卿歌一首

神樹にも手はふるとふを打細に人妻とへば触れぬものかも  
恋の歌也。同卷丹生女王贈太宰帥大伴卿歌二首あり。

天雲のそぐへの極み遠けども心しゆけばこふるものかも  
古の人のほませる吉備の酒病めばすべなし貫簀たばらむ

第八卷秋相聞の部丹生女王贈太宰帥大伴卿歌一首

高円たかまきの秋野の上の瞿麦なせしこの花うらわかみ人のかざせし嬰麦の花  
恋の歌といはむより贈答の歌といはん方適當ならむ。

第五卷太宰帥大伴卿相聞歌二首

竜の馬も今も得てしか青丹吉寧楽の都に行きてこむため  
現うつにはあふよしをなみ烏玉うばたまの夜の夢にをつぎて見えこそ

これ恋の歌にはあらず、洒落れて贈答したるものならむ。

第五卷天平二年の歌に冬十二月太宰帥大伴卿上京時娘子作歌二首

おほならばかまくもせむを恐こしと振りたき袖をしぬびつるかも  
大和路は雲がくれたり然れどもわがふる袖たもとを無礼なましと思ふな

左註によれば遊行女婦其字曰見鳥也とあり。契沖が代匠記に「貴人に対して袖振らむは恐れ

あれば招たく思へども忍びて得振らぬとなり、遊女なれば殊に謙退せるも身を知りて情あり  
大伴卿涙を拭はせけるもことわりなり」とあり。

同卷大納言大伴卿和歌二首

大和路の吉備の児鳥を過ぎて行かば筑紫の子鳥思ほえむかも

益良雄と思へる吾れや水茎の水城の上に涙のごはむ

当時の時代の思潮及歌風を知らむために、旅人の歌を中心とせる万葉集第三卷の一群の歌と、有名にして同時に旅人の思想学識を知るに足るべき讃酒歌十三首とについて二三の観察をなし、次に亡妻をしのびつつ京に上りし旅中の歌の一群を批評し、最後に恋に関する歌の全部をあげたる所以は、抒情詩の主なる内容たるべき恋が如何に旅人により詠ぜられしかを知ることは和歌の時代的發展を知るに好都合なれば也。以上の歌について見れば、当時一般の風潮は理想を求むるよりも、目前に現在する現象を観察し之を味はむとするに傾き、主観的態度よりも客観的態度に傾き来りしを知るべし。故に歌人も理想を追求するよりも、現在の現象を写し現世及人間の運命のはかなきを感じて、内心の反省に生命を托せむとする悲劇的思想をいだかずして、なほ現世に執着して怨恨の情をのべ、或は現世を諷刺し又は教訓したりし也。旅人の旅中の歌が人麿及其以前の歌の如き熱情無きも、清新軽快の趣味を有し、主観的情趣よりも客観的景物の漸次主要の位置を占め来るを見るべし。殊に其恋歌は故事を引用し、比喻

を用ひ機智を弄し自己の感情をも全く客観的に観察せむとす。其「水荖の水城の上に涙のはむ」といへる如き構想と措辞と音調と、後世の蕪村の俳句を誦する如き脱世間的の印象を与ふるものあり。

其他贈答の歌、伝説又は四季の風物を題詠せしもの多けれども、斯の如き歌の種類は憶良の作に於て最も顯著なる特徴を現はせるを以て憶良を論ずる時に譲るべし。

最後に当時漸く顯著になり来りたる客観的傾向に就て二三の観察をなし此の論を終へむとす。

第三卷天平二年旅人上京の時沙弥満誓の贈れる歌のかへし、大納言大伴卿和歌二首中

ここにありて筑紫やいづく白雲の棚引く山の方にしあるらし

の一首を見ば、「靡け此山」「雲だにも心あらなむ」といふ如き執着なく、天然をありのままに静観し心中の動乱を停止するものなるを見るべし。他の一首

草香江の入江にあさる蘆鶴のあなたづ／＼し友なしにして

思ふがまま感ずるがまゝに任せて人間のはからひを交へず、悲しきに悲しみ飲ばしきに飲び一切を自然のままに任せていたりとどまる所に安住せむとす。

第五卷帥大伴卿歌一首

いざ子ども香椎のかたに白妙の袖さへぬれて朝菜つみてな

悠悠自適天然に参ぜむとす。

第八卷秋雜部太宰帥大伴卿歌二首

吾岳に小牡鹿来鳴く初萩の花嬌つよ問ひに来鳴く小牡鹿

絢爛の美を極む。宛然一幅の画図、呦々たる鹿鳴天外よりひびき来たるの思あり。近世の文学は変化の多様と内容の豊富とを得むが爲めに必ず客観的写實的傾向をとりて実地生活と直接関聯なき全く文化の所産たる芸術品としての製作をなさざる可らず。此の客観的傾向は旅人に於て成功したるを認め得。此の客観的傾向の思想的方面を代表するものは憶良にして、写實的傾向を代表するものは旅人也。憶良と旅人とは神龜天平年間に於ける筑紫府詩人の中心也。二人とも相当の学識ありしこと万葉集五卷所載の其作の漢文を見て知るべし。二人とも其歌詠は悉く神龜以後老年の作のみと云ひ得可し。此の老年の作なりしことは一層客観的冷静の傾向をつよめたる可く、出離解脱の悟境に至らむとして静観反省の工夫をめぐらす。血を湧かしむるの情熱なけれども、高められたる自我意識を以て三世を達観する深遠幽邃の思想は万葉集歌人中この二人を外にして求むべからず。憶良の思子等歌に於て「瓜はめば子ども思ほゆ、栗はめばましてしぬばゆ」と起し、一転して「いづくより来りしものぞ」とまながひにかかりて安寝もせざる切なる思の由て来る所をたづぬる如き、旅人が第五卷太宰帥大伴卿報凶問歌一首

世の中はむなしきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

の如き冥想を詠ぜる、万葉詩人の思想及製作が、題詠のみによりて冗漫なる思想を措辞上の技巧のみを以てして漸く三十一綴にまとめたる古今集以後の歌と日を同じうして論ず可らざるを知る也。

## 七、山上憶良

万葉集第五卷に山上憶良作沈痾自哀文あり、中に「是時年七十有四」とあり、これは天平五年の作にして、此の後の作見えねば此の頃身まかりしなるべく、されば齊明天皇の六年に生れ天平五六年あたりに死せりとすべし。文武天皇の大宝元年に遣唐少録となり、二年に発して入唐し慶雲元年帰朝せり。靈龜二年伯耆守となり養老五年東宮に侍せしめられ、神龜三年筑前の守となり天平三年迄は筑前に居りしは、万葉集第五卷に筑前国司守山上憶良後和為熊擬述其志歌六首並序とある其序に「大伴君熊擬者肥前国益城郡人也年十八才以天平三年六月十七日為相撲使某国司官位姓名從人」とあるにて知らる。此の歌は熊擬の旅に死せるを思ひやりて作れるなれば也。万葉集第五卷天平五年山上憶良作好去好来歌一首反歌二首は天平五年夏四月難波津より發せる遣唐大使丹比真人広成に贈りしものにして歌の終りに「天平五年三月一日

良宅対面献三日山上憶良謹上大唐大使郷記室」とあるにて天平五年には京にありし事明也。

万葉集第一卷山上臣憶良在大唐時憶本郷作歌

いざ子どもはや日本べへ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ

同第二卷山上臣憶良追和歌一首、これ有馬皇子自傷結松歌二首に追和せるものなり。

鳥翔つばさなすありかよひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ

此の二首は彼が作中年代の古きものにして追和歌は後岡本宮御宇天皇代と表せる下にあれど  
齊明天皇の六年に生れたる憶良は同天皇御世の間に作歌すべき年令に達すべきに非ず。有馬  
皇子は齊明天皇四年に絞殺せられ給ひ其時よませし歌に憶良が後年追和せしものなるを類を  
以てこゝに列ねたるならむ。

万葉集第五卷は憶良の家集とも見るべく神龜初年より天平五六年までの歌をのせたり。其  
中大伴の熊凝に代りてよめる歌までは筑前守たりし間の作、貧窮問答以後の作は上京してよ  
りの作なるべし。其他第三卷第六卷第八卷にある少数の歌も其左注により又は前後の歌と比  
較して察するに神龜以後の作なること明か也。故に彼が沈痾自哀文に「初沈痾已来年月稍多  
謂経十余年也」といへるを見れば病にかゝりて後に歌を作り始めたが如し。

彼は入唐し又東宮侍講となりし位なるを以て十分の学識ありしならむ。これ其歌の序を見  
ても明かなり。彼は仏教思想と支那儒教思想とを調和せむとし常に世の無常を説き不幸なる

もの貧なるものに同情し、時に諷刺となり教訓となれり。其歌に着実を愛し人情の自然を重んじ子を愛すること深き如きは老年の作なるが故にもよるべけれど彼は詩人たるの性質よりも学者的性質を多く有せりしを知るべし。又印度支那の思想と支那詩文の形式とが如何に和歌の内容外形に影響したりしかは彼の歌に於て最も顯著なる徴候を認め得べし。

万葉集第五卷筑前守山上臣憶良挽歌一首並短歌の序に「三界漂流喩環不息」「三千世界誰能逃黒闇之搜来二鼠競争云々」等の印度思想の「過隙之駒」「三従」「四徳」等の支那思想と全く調和せられ居るは当時の宗教的信念ことに憶良に於ては実験に基くよりも信念の概括的記載たる教理に束縛せられ居りしを以て也。聖徳太子の憲法にも仏教思想と儒教思想との相混じ居るを認むべく、快活にして執着少き日本国民の外来の文物に対して審美的態度を以て悉く之を受け入れ、仏教の如きも一種の哲学又は美術として味はれしも、其の根本的思想を實世間の生活の上に実験せむとはせず。故に建築絵画彫刻の上には宗教的製作を有し又音楽も支那朝鮮の楽のみならず西域の楽をも輸入したれども、文学の上には宗教的製作の優秀なるものを有せず。同卷哀世間難住歌一首並序の如きは、其題及序は仏教思想より生じたれども歌の形式は支那の賦を模したる如し。されど支那の賦の如く断片的の即興的思想を譬喩的に言現はせるものに比すれば憶良の歌は統一せられたる思想と直接なる言現はしを認むべしと雖も、其の意を求めずして句を求め、莊重簡古の風を失ひ典麗端整の巧を求め模擬剽窃

を事とせる六朝以後の詩文の悪影響は憶良の異常なる人格及境遇を以てしてもなほ之を認め得べし。此の歌は長き故引用せざれども其の記紀の歌詞を襲用せるが如き冗漫なる対句を人工的に並列せる如き詩美を損する大なるものあり。されど其の反歌

ときはなすかくしもがもと思へども世のことなれば止みかねつも

の「世のことなれば」の一句、理想の高遠なるを思はしむ。同卷沈痾自哀文を見るに「何況生録未半為鬼枉殺顔色壯年為病横困者乎在世大患孰甚于此」に於て彼が常に一般的なる哲學的思索をなしたるを見るべし、「故知生之極貴命之至重欲言窮何以言之欲慮々絶」といふに至つては感情の眞実を見るべし。「向東向西莫知所為無福至甚惣集于我人願天從如有実者仰願頓除此病頼得如平」といへるに於ては断ち難き思の切なるを見るべし。同卷悲嘆道俗佞合即離易去難留詩一首並序も殆んど同じことを云へり。其詩の結句「心力共尽無所寄」といへる、其の理窟をいはざる所に詩人的性質を見るべし。

彼は吾身にたくひて不幸なるもの貧なるものに同情せり、当時咲く花のにはふが如く盛なりし御世の裏面には幾多犠牲者を出さざる可らざりしならむ。第二卷山上臣憶良罷宴歌一首  
憶良らは今はまからむ子泣くらむ其の子の母も吾をまつらむぞ

と歌へる如き諷刺の意を寓せるものあり。故に一方に第二卷に有間皇子自傷結松歌二首に追和せるもの及び第五卷筑前国司山上憶良敬和為熊擬述其志歌六首並序に於て父母の国を去

りて旅に死せし少年の心を思ひやりて作れる歌の如き又同卷貧窮問答歌の如き世の不幸なるものに同情して自らの思を述べたる如きものあり。されどこゝに注意すべきは彼の歌は自己直接の感情を中心とせずして概括的なる道德思想を中心とし事件を全く客観的に観察し叙事詩的構想をなすに至り更に自己の主張を述べ他を教誨せむとするに至り又贈答のため酒宴の興を助くるために作歌するに至れり。これ当時一般の歌風なるべく憶良に於て其の最も顯著なる例を見出し得。故に内容は複雑に形式は変化多くなりたることもに躍動せる感情の直接なる告白なく感情をも一種の概念に凝結せしめて無味なる談理に陥らむとす熊凝をよめる歌家において母が取り見ばなくさむる心はあらまし死なは死ぬとも

に於ける「心はあらまし」といへるが如き間接なる言方及び貧窮問答歌に於て「天地は広しといへども吾がため狭くやなりたる、日月は明しといへども吾がためは照りやたまはぬ」といへると人麿の「靡け此山」といへる、額田王の「雲だにも心あらなむかくさふべしや」といへるに比して、人麿額田王が常に自己直接の経験のみを歌へるに、憶良の歴史上の事実又は伝説を歌ひ、第五卷山上臣憶良詠鎮懷石歌一首並短歌の如き作をなし（第五卷遊松浦贈答歌及同卷詠領巾靡嶺歌一首は大伴旅人の作なりとの契沖の説をとる）又第五卷哀世間難住歌一首並短歌の如き全く一種の思想を歌ふに至れり。人麿に於ても其題詠の歌に於ては思想的和歌を作るに至れることを述べたり。此の題詠の風は確かに支那詩賦よりの影響を受けたると

同時に複雑にして散文的なる文学を要求する時代の推移が純粹なる抒情詩のみを以てしては満足せざりしにより漸次發展し来りしものなるべし。しかして其表現法も亦支那詩文に於けるが如き比興的なる其弊として絵画的記載多き製飾繁多にして文勢冗漫なる悪風に染み其上立法的なる儒教思想は教訓的なる傾向さへも加ふるに至れり。第五卷令反感情歌の如き取題そのものまでに詩歌の領土以外に逸せるものあり。されど其の思想の傾向は全く文学的にして其序「自称異俗先生意雖揚青雲之上身体猶在塵俗之中」といひ言行不一致の偽善を罵り「父母を見ればたふとし妻子見ればめぐし美し世の中はかくぞことわり鶉鳥のかゝらはしもよ行方しらねば」と人生のかゝらひにかゝらひ居らむを希ひ、「うき履を脱き捨つる如くふみ抜きて行くちふ人は岩木よりなりてし人か汝が名名のらさね」と輕薄なる文明の人を罵り「天行かば汝がまに／＼地ならば大君います」と架空の論議を弄すれども足は地上を離れざる人生の真相を喝破し其歌を結んで「かにかくに欲しきまにまにしかにはあらじか」といへる実なる感情を生命とせる詩人の性情をよくあらはせり。然れども和歌は当時すでに其形式により達し得べき限りの發展をなしたり。しかして他の新詩形を求めむとしつゝありし也。されど支那文学は決して新詩形の手本を示すの資格あるものに非ざりし也。複雑なる思想及歴史上の事実又は伝説に材料をとり叙事詩的構想の下に複雑なる感情を所作により表現せむには和歌の形式は決して適當なるものに非ず。發展の歴史上より見るも又單純に形式より見るも

長短歌ともこれをして文学的価値を保たしめむとならば単一なる統一せる相統せる感情を歌ふべく、複雑なる密接ならざる諸種の感情の配合によりて其結果としてある感情を運ぶ所の思想をあらはさむとする如きは和歌より文学としての第一要件たる客観性及直観性を奪ふもの也。何となれば一人の独語たるべきを以て常に直覺的に表現せむには必ず一人の感情を連続せる時間に起る進行動揺とこれに相応する単一なる対象の排列及変化によりて抒情詩的に作歌せざるべからず。単に変化を求め時代的要求に應ぜむとすと雖も、和歌の形式上より客観的確實を以て制限せらるべき能力の範圍を顧慮せざる時は、詩歌の特色を没却し、散文的になり間接なる比興的叙法の結果感情無き浅薄なる製飾多き記載的傾向を生じ詩歌の生命を失はむとす。されども斯の如き複雑なる思想及び事件を統一して長篇の叙事詩又は劇詩等を製作せんには異常なる精神力を有する天才が外的勢力を反発し現実には欠陥あるだけ熱心に理想に向つて向上し、現実の事件を観察し解剖するに止らず自ら理想を建設し綜合的製作をなさざる可らず。されども老年病に臥し意気鎖沈せる憶良のよくする所に非ず。又当時主として吾国文学に影響せる支那文学が此の点に関し何等の暗示をも与ふる能はざりしは又止むを得ざる所也。

されども吾人は憶良にいたりて和歌が各方面に大に發展し来り、人磨の如き情熱はあれども思想の範圍狭く変化乏しきに対して著しく豊富なる内容と変化ある形式とを持来せるは和

歌史上注意せざるべからず。人磨は上古よりの純抒情詩的和歌を完成したる人にして、そは人磨に至りて発展の極に達し、憶良は新時代の要求に応ずべき叙事詩的哲學的和歌を創始せるものなるを以て二人の文学史上の功は同じけれども詩人としては憶良は到底人磨の敵に非ず。況して支那文学の悪影響として酒宴の座興、贈答の具として和歌を用ひ名所故事の題詠をなせるは後世和歌墮落の俑をなせるもの也。第八卷七夕の歌の如き「青波に望は絶えぬ白雲に涙はつきぬ」「さ丹塗の小舟もがも、玉纏の真楫もがも、朝風にいかき渡り、夕潮にい漕ぎ渡り、久方の天つ河原に、天飛ぶや領巾かた敷き、真玉手玉さしかへ、あまたいも寝てしもがも秋にあらずとも」の如き技巧を弄し対句を並列し裝飾多くして生命を失はむとしつつあるに非ずや。又彼が智的判断に秀でたる人なることは常に真摯なる外見を以て時に嘲世的口調を弄し、第八卷山上臣憶良詠秋野歌二首

秋の野に咲きたる花を指折りかきかぞふれば七種の花

萩の花尾花葛花罌麦の花女郎花又藤袴朝顔の花

の如き頓才的作あり。後世和歌を遊戲的に製作する傾向の顯著なるものあり。又彼が「黄金も玉も何せんに」と歌へる、第五卷思子等歌同卷老年身重病経年辛苦及思兒歌七首中其反歌

なくさむる心はなしに雲隠れ鳴き行く鳥のねのみし泣かゆ

すべもなく苦しくあれば出ではしり去ななと思へど子らにさやりつ

水沫たぐなすもろき命も栲たぐなはの千尋にもがとねがひくらしつ

の如き皆感情を分解し説明したるものにして活動せる感情は斯の如き明瞭なる静止的のものにあらず。真の歌人たるべくば悲哀の裏にも一点の温気を感じずる熱烈なる意志力の発動なからざる可らず。和歌は到底間接なる思考工夫を歌ふに適さず。和歌はどこまでも人生に直接に感情に直接なる内容と表現法とを扱ばざる可らず。後世の俳句発達は実に和歌の能はざる所を補はむとする自然の要求に基くもの也。此の間の問題を解決するの根柢を作らむは和歌俳句比較研究の目的也。憶良が歌人としての資格に於て人麿に劣り、和歌本来の性質を没せむとし和歌をして文学的価値なからしめむとする傾向は其の内的動機より論じ得ると同時に其の原因の客観的徴候として観念の排列調子の強弱の上よりも論じ得べし。されども修辭学的方面より論ずることは非常に精細にして狭き範囲に限りて為さざる可らず。故に今一二の例に就て其一斑をうかゞはむとす。

なぐさむる心はなしに雲がくれ鳴き行く鳥のねのみし泣かゆ

に於て第一句に「なぐさむる心はなしに」といふ如き意義濃厚なる屈折せる消極的意義の句を置き、次に「雲隠れ鳴きゆく鳥の」といふ如き序歌的の意義なき句来る故、全く腰折歌となれり。

すべもなく苦しくあれば出で走り去なゝと思へど子らにさやりつ

「苦し」といふことよりも「如何に苦しきか」といふことは詩歌に於ては重要也。「出で走り」といふことと其原因の「すべなき」とは成るべく近く置く方感情に直接也。故に「苦しきのすべもなければ」とやうに置くこそ自然なれ。又「出で走り去ぬ」と同じやうの意味の動詞を重ね、しかも調子の上に何の効果なきは拙也。

次に実地生活と直接関係せる彼の歌を研究せむ。第五卷筑前守山上憶良挽歌一首並に短歌、これ京より下り来りて間もなく筑前にて死せし妻を悼みたるものにして、長歌に於ては常に主観的感情を概括的に述べれども其反歌、

はしきよしかくのみからに慕ひ来し妹が心のすべもすべなき

くやしかもかく知らませば青丹吉国内ことく見せましものを

大野山霧立ち渡るわが嘆く息その風に霧立ち渡る

の如き直接なる感情と光景とを歌へり。短歌は形式小なる故自然不用なる附屬物により主要なる感情を没却すること少なきを以て也。第五卷山上臣憶良思子等一首並短歌

瓜はめば子ども思ほゆ 粟はめばましてしぬばゆ 何くより来りしものぞ 目なかひにもとなかかりて安寝しなさぬ

### 反歌

白銀も黄金も玉も何せむにまされるたから子にしかめやも

思想的和歌として万葉集中有数の傑作なるべし。平凡なる材料を以てして清新なる歌詠をなせるは情の切なるが故也。第五卷山上臣憶良重病思児等歌一首並短歌、同卷恋男子名古日歌三首皆其子を思ふ老父の心を歌へるもの、後者の長歌に「明星の朝は敷栲の床のへ去らず立てれども居れども戯れ夕星の夕になればいざ寝よと手をたづさはり父母も表はな離り三枝の中にねむれと」の如き家庭のさまを写せるものは人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首並短歌とある第二首目の長歌の妻無き後の家庭のさまを写せると同じく極めて写實的也。

太宰帥大伴旅人と憶良とは当時筑紫にあつまれる歌人の中心にして二人の交情も密なりしなるべし。第八卷にある憶良の歌は作りし時と所とを注せり。中に「右天平二年七月八日夜帥家集会」と記せるあり、又第五卷太宰帥卿宅宴梅花歌三十二首並序の中には憶良の名は「筑前守山上大夫」として、

春さればまづさく宿の梅の花一人見つつや春日くらさむ  
といふ三句切れの古今集にあるが如き歌をのせたり。

第五卷書殿餞酒日倭歌四首は作者をしるさざれども憶良の作ならむ。其二首、

天飛ぶや鳥にもがもや都まで送りまをしてとびかへるもの

言ひつゝも後こそ知らめ乏しくもさぶしけめやも君いまさずて

これに次ぎて聊布私懷歌三首あり。これは終りに「天平二年十二月六日筑前国司山上憶良謹

上」とあり其二首

天離る鄙ひなに五年すまひ居て都の手振忘らえにけり

吾が主のみたまたまひて春さらば奈良の都に召上げたまはね

和歌は書牘に代用せられたり。以上の歌其の生活を知る上に光明を投ずべし。

人麿は詩人也。憶良は思想家也。二者を一にせば大なる悲劇作者を生ぜむ。されど二人の感情と学識とを一人に有せる天才は生れざりき。何となれば非文学的なる儒教思想はすでに日本民族の肺腑に感染し膏盲に及ばむとするものありし故也。

第六卷山上憶良沈痾之時歌一首

士やも空しかるべき万代に語りつくべき名は立たずして

右一首山上憶良沈痾之時藤原朝臣八束使河辺朝臣東人令問所疾之状於是憶良臣報語

已畢有須拭涕悲嘆口吟此歌

儒教的思想は「名」の一語に結晶せり。仮定の名によりて生きてる人生を拘束せむとす。元来肉慾盛にして抒情詩をも哲学をも有せざりし支那人に対する方便的の教訓を輸入したるは日本文学不振の唯一の原因なりし也。孔子の如きも芸術とは因縁無き人にして寧ろ法律家として研究すべきものならむ。儒教を中心とせる支那思想及漢字漢文の国文学上に及ぼしたる悪影響は他日詳論せむとす。

## 八、沙弥満誓の歌

彼の俗名は従四位上笠朝臣麻呂、養老七年筑紫観世音寺造營のため別当として差遣せらる。在俗の時慶雲三年美濃守となり、靈龜元年尾張守となり、同三年尾張参河信濃三国の按察使となり同四年右大弁となる。同五年太上天皇のため出家せむと請ひて赦許さる。

万葉集第三卷沙弥満誓詠綿歌一首、これ養老年間筑紫にての作也。

白縫の筑紫の綿は身につけて未だは着ねど暖かに見ゆ

後世の仏者の如く理窟を言はざりしこそなつかしけれ。

万葉集第三卷沙弥満誓歌一首

世の中を何にたとへむ朝びらきこぎ去にし船のあとなきがごと

契冲代匠記に「仏菩薩経論の中に無常を示し給へること数知らず、此一首はそれにもむかふばかり歌よまぬ人もおほえぬはなくてはつかに世の中を何にたとへむと誦しつれば胸中の常見をやることやがて順流の船の如くなるは此国に相・応・の・故・也」といへり。同集第三卷造筑紫観世音寺別当沙弥満誓歌一首

鳥・総・立・足・が・ら・山・に・船・木・伐・り・木・に・き・り・よ・せ・つ・あ・た・ら・船・木・を

撰者の特に造筑紫親世音寺別当としるせしも諷する意あればなるべし。筑紫親世音寺は天智天皇齊明天皇のために誓願して建立せしめられしもの、有司懈怠して功成らず。満誓をして工事を督せしめむがため養老七年に筑紫に下されしなり。同集第三卷満誓沙弥月歌一首、

見えずとも誰恋ひざらめ山の端にいざよふ月を外に見てしが

思想的和歌として含蓄多く比喻の法巧妙也。見ざればこそ恋はまさされ、見えずとて誰か恋せずといはむ、せめては山の端にいざよふ光をだにも見むとなり。中空に澄む月を心ゆくまで見むとはせざる、現世を捨てたる心の底にこそ現世に活動すべき無極の活力は宿るなれ。伸びむとするものは屈す。活きむとするものは先づ死せざる可らず。感情思想の一面を描き継ぎ来るべき動揺変化は之を余韻に托してこそ詩歌に生命は宿るなれ。一見して偏せる極端なる思想感情の多く詩歌にあらはるるは決して詩人の感情思想の偏頗なるが故に非ず。偽らざる生命ある、真なる思想感情の告白なれば也。笑ふ可し、笑の底に涙あらむ。泣くべし、涙の底に慰安の微笑あらむ。生きたる感情を直接に発表せず架空の教理の形となして作歌する後世の僧侶の歌の如き其他思想的和歌と称すべきもの皆間接なる概括的思想と叙法とを以てするものと比する時、流石に万葉時代の僧は偽善的ならざるを認め得可し。同集第四卷、太宰帥卿上京之後沙弥満誓贈卿歌二首

まそかぐみ見飽かぬ君に後れてや朝夕にさびつつあらむ

ぬば玉の黒髪白くかはりても痛き恋にはあふ時ありけり

大納言大伴卿和スル歌二首

こゝにして筑紫やいづく白雲の棚引く山の方にしあるらし

草香江の入江にあさる蘆鶴のあなたづ／＼し友無しにして

何ぞ其友情の濃かなる。今日にして此数首の歌を誦する感極めて深し。当時大宰府歌人の生活情態想ふべし。満誓の歌万葉集所載僅に六首。しかも彼が人格はこの六首の歌によりて其一面を窺ふ可し。詩歌は斯の如くにして始めて生命あり。

## 九、山辺赤人の歌を論ず

万葉集は後世文学のあらゆる要素を有す。故に価値を有する歌人のみならず何等か一特色を有するは悉くこれを研究せむとす。赤人は吾人の見る所によれば決して人麿と並称す可き程の歌人に非ず。されども今赤人を論ぜむとするものは人麿赤人と並称する伝来の謬見を破り同時に古今集以後の和歌に移り行く過渡の情態を研究せむがため也。赤人は目前の花を見て其色を知り其形を知り其配合排列を知れり。されども絢爛たる外面の内部を貫ける唯一真理の寂寥を知らざりし也。憶良は天平時代の裏面を歌はむとせり。旅人は裏面より見たる表

面を歌はむとせり。赤人は表面より見たる表面を歌へり。文明社会の表面に立てる人間は社会なる有機体の一要素として存在の意義を有し個人としての意義を有せず。故に文明社会の表面に動き居る人間は個人といふよりも天然の一部分といふ方当れり。生存の欲望すでに満足せられて満ちたる心を以て彷徨するものの眼に映ずるものは外部の裝飾也。吾国土の生活に適する氣候を有するのみならず明瞭に区分せられたる山野の河川湖海により雲霧草木により明瞭に裝飾せらるるを以て日常この間に愉快に生活せる国民は自然沈痛の趣味を欠き淡泊温雅の趣味發達し來れり。外に美飾をなすものは精神を忘却す。偉大なる精神力を表現する彫刻は粗大なる面と線とを以て其内の生命を活躍せしむ。繽紛たる繁飾をなすものは眼光茫然たり。春の花を見て人は酔ひ秋の落葉をききて人は醒む。芸術は古代に榮えたり。物質的文明初步なるだけ内心の活動激烈なれば也。しかして詩歌の繁榮は美術の繁榮に先だたざる可らず。美術の、精神よりも外形を過重し実世間的權威の保護によりて始めて製作せらるるものなるを以て個人の作たることよりも時代の産物たることの性質を多く有すれば也。写真主義は理想よりも現代、内面よりも外面を写すに傾くは自然也。詩歌は人為のはからひを破りて本来の自然に帰するを目的とす。故に太平の世に運命の儘に浮沈する人間は一見するときは意志なき天然の如く美なることあり。又天然自身はもとより直に文学美術の内容たり得可し。然れども天然及天然の如き人間は個性を發揮する人間に比する時は比較的静止の情態に

あり。されども詩歌の主たる内容は静止せる現象にあらずして動揺せる現象たるべきは既に述べたる所なり。故に詩歌の内容たるべき天然は吾人の精神により生命を与へられ活動に置かれ人格化せられたる天然ならざる可らず。故に若し外面の色形及排列のみを写さむとするときは詩歌に於ては其材料たる言語の能力は到底絵画に於ける絵具に及ばざるを以て芸術全体より見ればつひに生命なき作の濫作となり、又外形を尚び精神を忘るゝ故に模倣的に傾き伝来の陳腐なる思想の反復となるべし。且又写實的文学は偉大なる精神を有する天才に非ずとも忠実に写生するときはなほ文学として価値あるを以て平凡なる多数の作者の無数の作を生じ腐敗せざらむとするも得ざるに至る。故に写實的詩歌は天才の出現にいたる導火線として意義あるもの也。何となれば詩歌は没却せられたる個人威嚴復活の声なれば也。

赤人の伝は知る可らず。彼の歌にして年次を記せるもの、中最も早きは第六卷神龜元年甲子冬十月五日幸紀伊国時山部宿禰赤人作歌一首并短歌とあるもの。最後のは第六卷八年丙子夏六月幸干野野離宮之時山部宿禰赤人応詔作歌一首并短歌とあるもの也。第三卷に富士山を詠ぜし歌等東国に行きしと思はるゝ歌あり。大和に生れて東国へも下りけるにや。

今彼の歌を論ぜむとするに其歌は年代の明かならざるものあり。又年代明かなるも年代により歌風の変遷も認むる能はず。故に年代により並列して論ずる必要もなし。又其種類は大抵叙景の和歌のみなるを以て今は巻次にしたがひ其歌につき直接研究せむとす。第三卷所載

の歌は年を記さず。山部宿禰赤人望不尽山歌一首並短歌

天地の分れし時ゆ 神さびて高くたふとき 駿河なる富士の高嶺を 天の原ふりさけ見れば 渡る日のかげもかくろひ 照る月の光も見えず 白雲もい行きはばかり 時じくぞ雪はふりける 語りつぎ言ひつぎ行かむ 富士の高嶺は

有名なる歌也。調のとのへるはよし。されどもかゝる歌万葉集中に珍らしからず。「渡る日のかげもかくろひ照る月の光も見えず白雲もい行きはばかり」はこの歌の生命なれどもこれ山峻高以蔽日、日月避隠、日月蔽虧等の誇張的支那思想にして連山には適用すべきも富士山の如き孤立せる円錐形の火山には適切ならず。要するに目前に見たる富士山をそのまま描かずして伝来の思想をかり或は概括的に「時じくぞ雪はふりける」とやうにいひ決して客観的光景を目前に浮ばしめず。かかる記載的叙法を以てすれば地理学書をよむ心地こそすれ、何等感興をも起さず。何等異常の感動もなく余りに冷かに富士山を望見し当時すでに漢詩にも詠ぜられ通俗的になり居りし思想を反覆したりとて詮なきこと也。反歌、

田児の浦ゆ打ち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪はふりける

「打ち出でて」「漕ぎ出でて」とするの直覚的なるにしかず。「真白にぞ雪はふりける」とこそいふべけれ。これを「不尽の高嶺に」の句を中間にはさみて直接なる会得に不便ならしめたる所以のものは動ける感情なきに技巧と模倣とにより外形を補綴するを以て也。真実なる

感情を忠実に写さばいかにするも斯の如き不自然なる叙法をなすことある可らず。同卷山部宿禰赤人至伊予温泉作歌一首並短歌、これ舒明天皇齊明天皇の行幸と聖德太子の御事蹟とを追懐して作れる也。これも人麿等を模倣したるならむ。されど其価値に於ては天地の差あり、其反歌、

百敷の大宮人の飽田津に船乗しけむ年のしらなく

これを人麿の

さゝ波の滋賀の大和太<sup>わだ</sup>よどむとも昔の人にまたもあはめやも

に比するに赤人の歌の氣力なき驚くべし。人麿の結句「昔の人に又もあはめやも」と屈折し弾力あるに比し、赤人の「船乗しけむ年のしらなく」とか弱く言ひきりたる、日と同じくして論ずべからず。同卷登神岳山部宿禰赤人作歌一首並短歌其結末「見る毎にねのみしなかつ古思へば」といへれど「玉葛絶ゆることなくありつつもやまず通はむ明日香の古き都は山高み河遠白し春の日は山し見がほし秋の夜は河し清けし朝雲に田鶴は乱れ夕霧に蛙はさわぐ見る毎にねのみしなかつ古思へば」といふ続きを見なば絵の如く美しき対句を以てしてうれしみこそ思はるれ少しも悲しき調子なし。懐古の歌には「ねのみしなかつ」などいふが例なりとて、悲しからざるに悲しといふ其不調和なる感情の真偽を疑はしむるにいたる。其反歌、

明日香河川よど去らず立つ霧の思ひすぐべき恋にあらなく

「恋」は全く抽象的概念となれり。序歌も後世の掛言葉の如く冗漫になれり。彼は主観的感想を歌ふべく余りに楽天的也。同卷山部宿禰赤人歌六首、

繩の浦ゆそか背向に見ゆる奥つ島こぎたむ船はつりするらしも

武庫の浦を漕ぎたむ小船粟島を背向に見つつ乏しき小舟

阿倍の鳥鶉の住む石による波の間なくこのごろ大和し思ほゆ

潮干なば玉藻苳りつめ家の妹が浜苞乞はば何を示さむ

秋風の寒き朝けを佐農の岡越ゆらむ君に衣かさましを

みさご居る磯わに生ふるなのりその名は告げし子よ親は知るとも

序歌の漸く技巧の末に落ちて無意義冗漫のものとなり、元来意義無きが如くにして何等か全体の情趣と調和する内容と音調とを有すべきものか全くの洒落とならむとするの傾向を認め得可し。又句切れ多くなり名詞止めの句多くなりたるを認め得。主観的情趣を根柢とせず客観的対象の排列配合の上に趣味を求めむとせば自然一首中に成るべく多くの内容を運ばざる可らず。即全体観念の分枝を成るべく頻りに又細かくせざる可らず。されど和歌三十一綴の形式は依然たり。故に斯の如く表現せられたる全体観念は範圍広きされど統一せざる不明瞭なる故に冗漫なるものとなるべきは自然也。故に統一的連続を要件とせる節奏の美をも失ふに至る。同卷山部赤人登春日野作歌一首並短歌長歌は伝来的形式の反復のみ。反歌、

高松の三笠の山に鳴く鳥の止めばつがる恋もするかも

序歌の冗長なる、「恋も」と全く抽象的概念として恋なる語を使用せる皆古今集調の萌芽也。

同卷山部宿禰赤人歌一首、

吾宿に唐藍蒔からあるき生ふし枯れたれど懲りずてまたも蒔かむとぞ思ふ

太平の夢に酔ふものは人生も庭前の花苑を賞すると扱ふなけむ。「とぞ」の一言は全体の感情を全く客観化し去れり。同卷過勝鹿真間娘かつしかま子墓時山部宿禰赤人作歌一首並短歌「勝鹿の真間の手児名が奥つきをこことは聞けど真木の葉や茂りあるらむ松が根や遠く久しき言のみも名のみも吾は忘らえなくも」といへるは明に人麿の過近江荒都歌「すめろぎの神のみことの大宮はここと聞けども大殿はここといへども春草し茂く生ひたる霞立つ春日か霧れる百敷の大宮どころ見れば悲しも」を模したるものにして巧拙の如き比するも愚かなり。其反歌、

吾も見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手児名てごなの奥津城処おくつぎどころ

これ名所見物の老人の感慨也。只名所を見たるのみにては詮なし。詩人としては名所を見昔を思ふといふこと以外何等か微妙の感情なからざる可らず。長歌に「こことは聞けど」といひつつ反歌に「吾も見つ」といひ何となし不安心の感じを与ふるものあり。これ模倣の弊也。同卷山部宿禰赤人詠故太政大臣藤原家之山池歌一首、太政大臣は藤原不比等也。

古のふるき堤は年を深み池のなぎさに水草生ひにけり

平凡の作也。

第六卷神龜元年甲子冬十月五日幸紀伊国時山部宿禰赤人作歌一首並短歌、長歌は伝来的形式の反復也。反歌

奥津島荒磯の玉藻潮満ちていかくれ行かば思ほえむかも

若の浦に潮満ち来ればかた満を無み蘆辺をさして多頭たづ鳴き渡る

「潮満ちていかくれ行かば」「思ほえむかも」皆現在活動せる感情なく思ひたくみたる、決して大家の作たるべき簡明を有するものに非ず。第二首は有名の作なれども決して優秀なるものに非ず。「満をなみ多頭鳴き渡る蘆辺をさして」とこそいふべけれ。「真白にぞ富士の高嶺に雪はふりける」といへると同じく音調及思想は「満をなみ」にて中断せられ全体の音調及思想全く冗漫に流るゝものは「満を無み」の全体を分割する力強きが故也。感情に直接にいはば「満をなみか」とやうにこそいふ可けれ。人麿の「春日か霧れる」といへるを「春日霧れれば」とせば趣味索然たらむ。故に若し「満をなみ」と強く言ひ切らば直に「多頭鳴き渡る」と活動せる句を持ち来らざる可らず。「蘆辺をさして」の如き句を挿入するときは全体の接合密なる能はず。これ音調を閑却せる三句切の漸く発展し来りたるが故なり。而してこの歌の各句の切れ方強し。即ち各句は独立したる内容を有するやうになり全体として極めて複雑なる思想を運ぶに至る。故に斯の如き近世的煩雑を有せる詩歌は材料を重んずるに至

り肉感的に走り思想の屈折を重んずるに至り理窟的に走り更に教訓的傾向を生ずるにいたる。今この「若の浦」の一首を誦して直覚的には其趣味を感じ可からず。必ず会得するに一種の努力を用ゐざる可からず。何となれば一首は直覚的な感情の表現にあらずしてある現象を因果關係に分解して表現したるものなれば也。この因果關係を暗示するものは「滴を無み」の断定的一句にしてこれが下に来る各句のあらはす可き内容の予件たるを暗示する也。しかして斯の如き平凡なる暗示を了解したる間接なる智的満足を読者に与ふることが斯の如き第二流以下の歌の通俗的になりたる所以にして「朝がほに釣瓶とられて貰ひ水」の如き句の通俗的になりたると同理也。「潮満ち来れば」も露骨のいひ方也。複雑なる趣向決して悪しきに非ず、これは数首の連作を以てすべし。同巻山部宿禰赤人作歌二首並短歌、これ神龜二年芳野離宮御幸の時の作也。長歌は拙し、反歌

三吉野の象山際きさやまのまの木末こねにはここだも喧さわく鳥の声かも

烏玉の夜の更けゆけば久木生ふる清き河原に千鳥しばなく

「木末には」の「には」は屈折したる間接なる冗漫なるいひ方也。第二首内容複雑に過ぐ。煩雜なる形容以外に全体の音調により久木生ふる清き河原の夜深けゆくさまを髣髴せしむ可し。又一首に斯の如き雜多なる内容を選び来るは会得を困難ならしむるのみ也。且「久木生ふる」といひたりとも老樹翁然たるさまを眼に浮ばしむること絵画に及ぶべくもあらざれば

かゝる趣向は音調の助けをかりて連作の形式によるか、又は単刀直入全体の趣味を構成せる主要の点を捕へて地上の万象を顧みず思を天外に走せ忽然念頭に浮ぶ初一瞥初一念の印象を渾然たる句法に表現して「風雲の夜すがら月の千鳥かな 蕪村」とやうに緊密にいはば久木生ふる堤も清き河音も髣髴として目に浮び耳にきくべし。俳句製作の要求は当時に於てすでに明瞭に認め得べし。其二、

安見知し 我大君は 三芳野の 飽津の小野の 野上には 跡見居多置き 御山には  
射固立て渡し 朝獵に 鹿履み起し 夕狩に 鳥踏み立てて 馬並めて 御獵ぞ立たす  
春の茂野に

赤人の歌は感情の振動なけれどもクラシカルの整齊を有するは其特色也。其反歌、

足引の山にも野にも御獵人さつ矢手ばさみ乱れたる見ゆ

「乱れたる見ゆ」の一句瞬間の光景を叙し範圍広き山野を雙眸のうちに展開せしむ。自然派歌人の作として成功したるもの也。同卷山部宿禰赤人作歌一首並短歌、これ神龜二年十月難波宮行幸之時の作也。長歌はいふに足らず。反歌、

朝なぎに梶の音きこゆ御食津国野島の海人の船にしあるらし

初句に意義充実せる句を置き第三句に枕詞を置くを以て調子弱し。されど第二句にて切り第三句に枕詞を置くは赤人に於てなほ五七調の保たれ居る証拠也。上にあげたる

武庫の浦を漕ぎたむ小舟粟島を背向に見つつ乏しき小舟

潮干なば玉藻苅りつめ家の妹が浜苞乞はば何を示さむ

の如き明に五七調を保ち文勢の振動なきだけ一層明かにこれを認め得。同巻笠金村の

海人少子棚無小舟こき出づらし旅の宿りに梶の音聞ゆ

の如く煩雜なるものと比すれば赤人の作はなほ大家的簡潔を有せり。同巻山部宿禰赤人作歌一首並短歌は神龜三年九月播磨国印南野に行幸ありし時の作也。長歌は拙し、其反歌三首、内海の景を歌ふ彼の歌とし成功せるもの也。

奥津浪辺浪静けみ漁すと藤江の浦に船ぞどよめる

印南野の浅茅押し靡みさぬる夜のけながくあれば家ししぬばゆ

明石潟潮干の道を明日よりは下咲ましけむ家近づけば

同巻過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首並短歌其中「淡路の野島も過ぎぬ伊奈美孀辛荷の島の島の間ゆ吾が屋を見れば青山のそことも見えず白雲も千重になり来ぬ漕ぎたむる浦のごと往き隠る島の埼々くまも置かず思ひぞ吾が来し旅の氣長み」の如きよく旅情をあらはせり。行幸にしたがひ奉り儀式的によみ又は古人の模倣をなすが如きことなければ平易なる佳作を得る也。其反歌三首、

玉藻苅る辛荷の島にあさりする鶉にしもあれや家思はざらむ

鳥がくれ吾がこぎ来ればともしかも大和へのぼる御熊野の船

風吹けば浪か立たむと待つほどに都多の細江に浦がくれ行く

船行の情景目に見る如し。同卷過敏馬浦時山部宿禰赤人作歌一首並短歌、これ恋歌也。「深海松の見まく欲しみと莫名藻の己が名惜み間使もやらずて吾は生けりともなし」と結べり。

反歌、

須磨の海人の塩焼衣しほやまのなれなばか一日も君を忘れて思はむ

彼はつひに抒情詩人たるの資格なし。彼が生命は忠実なる天然の写生にあり。同卷天平春六年三月幸難波宮之時歌六首、其中赤人の歌一首

益荒雄は御獵に立たむ少女らは赤裳裾引く清き浜びを

これを同時の歌にして船王作

眉の如雲居に見ゆる阿波の山懸かけてこぐ船とまり知らずも

安倍朝臣豊継作

馬の歩み押してとどめよ住吉の岸の黄土ににほひてゆかむ

と比するときは赤人は決して当時の歌人中傑出したる人に非ざりしを知るべく、守部王作

児らがあらば二人聞かむを奥渚に鳴くなる鶴の暁の声

をみるときは「鳴くなる」といひ「鶴の暁の声」と名詞止にせる当時の和歌の調子まさに一

転せむとしつつありしを知る可し。同卷八年丙子（天平）夏六月幸于芳野離宮之時山部宿禰  
赤人応詔作歌一首並短歌、拙なるもの也。彼の歌八卷に六首十七卷に一首あれど就ていふべ  
きほどのものなし。

## 十、大伴家持

彼の作の年序の見えしものゝ始めは万葉集第八卷秋雜部大伴家持秋歌四首とあるものにし  
て左注に右天平八年丙子秋九月作とあり。其終りのものは万葉集第二十卷に三年春正月一日  
（天平宝字）於因播國廳賜饗國郡司等之宴歌一首右一首守大伴宿禰家持作之とあるものな  
り。万葉集第十七卷に天平十三年の歌三首あり右内舎人大伴宿禰家持從久邇京報送弟書持と  
あり、當時内舎人たりし也。天平十七年從五位下に叙せられ、天平十八年越中守となり、天  
平勝宝三年少納言に遷任し（万葉集第十九卷に「以七月十七日（天平勝宝三年）遷任少納言  
仍作悲別之歌贈貽朝集使掾久米朝臣広繩之館二首。既滿六載之期忽值遷替之運於是別旧之悽  
心心中鬱結拭滯之袖何以能旱因作悲歌二首式遺莫忘之志其詞曰云々」による）天平勝宝六年  
兵部少輔となり、同年山陰道巡察使となり、天平宝字元年兵部大輔となり同年因幡守となる。  
天平宝字三年以後の歌はなし。以後諸種の官に歴任して延暦四年死す。内舎人は二十一才以

上の貴族の子弟より簡むものなる故、天平宝字三年には家持は四十才前後なりしならむか。其父旅人及憶良等は老年の作のみのこせるに家持は壯年までの作のみをのこせり。しかして万葉集第八卷の歌天平八年の作は彼が二十才前後の作なるべし。

万葉集第八卷大伴家持秋歌四首

久方の雨間も置かず雲隠れ鳴きぞ行くなる早稲田かりがね  
雲隠れ鳴くなる雁の行きて居む秋田の穂立ち繁くしぞ思ふ

雨ごもり心いぶせし出て見れば春日の山は色づきにけり

雨はれて清く照らせる此の月夜又更にして雲な棚引き

右四首天平八年丙子秋九月作

「早稲田かりかね」を「刈り」にかけたるを注意すべし。彼が自然を愛することは此の若年の作にあらはれたり。第三卷天平十一年己卯夏六月大伴宿禰家持悲傷亡妾作歌一首、

今よりは秋風寒く吹きなむをいかでか一人長き夜をねむ

気力無く熱情無き歌也。彼当時三十才以下也。第六卷冬十月（天平十二）依大宰少貳藤原朝臣広嗣謀反発軍幸于伊勢国之時河口行宮内舍人大伴宿禰家持作歌一首、

河口の野べにいほりて夜のふれば妹がたもと思ほゆるかも

同じく熱情無き歌也。第三卷天平十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舍人大伴宿禰家持作歌

六首其反歌四首、

吾大君天知らさむと思はねばおほにぞ見ける和豆香蘇麻山わづかそまやま

足引の山さへ光り咲く花の散りにし如き吾大君かも

はしきかも皇子の命のありがよひ見し、活路の路は荒れにけり

大伴の名に負ふ鞆帯びてよろづよにたのみし心いづくかよせむ

平坦の作也。以て彼が性情を知るべし。

第十七卷大伴宿禰家持以天平十八年閏七月被任越中守即取七月赴任所時姑大伴坂上郎女贈家持歌二首より第二十卷の終りまでは彼の日記の体也。故に第三・四・六・八卷にある彼が歌中、年代の順により二三の歌をあげこれよりまた年代の順によりて大体の研究をなし、第四卷にある年代詳ならざる恋歌の如きは後に研究すべし。第十七卷哀傷長逝之弟歌一首並短歌左注・右天平十八年秋九月二十五日越中守大伴宿禰家持遙聞弟喪感傷作之也。かかる時すら彼は憶良の

くやしかもかくしらませば青丹よし国内ことごと見せましものを  
に做ひて

かゝらむとかねてしりせば越の海の荒磯の波も見せましものを

と詠じたり。かくては如何にして真情を見るべき。第十八卷天平感宝元年五月二十三日於越

中国守館大伴宿禰家持作之と左注せる賀陸奥国出金詔書歌一首並短歌、其後半

「大伴の遠つ神祖おやの 其名をば 大来目主と おひもちて 任へしつかさ 海行かば  
水漬く屍みね 山行かば 草むす屍」

より

「大君の 御門の守り われをおきて 人はあらじと いやたて 思ひしまさる 大君の  
御言のさきの 聞けば貴とみ」

の如き決して新らしき思想には非ざれども当時すでに東大寺大仏建立せられ帝都の莊嚴は人  
目を眩せむばかりにて越中に居りし彼も一度帝都を思ひやりては自ら血の湧きて祖先をしぬ  
び武人の自覚を歌ひたるものならむ。其反歌、

すめろぎの御世榮えむと東あづまなるみちのく山に黄金こがね花咲く

「黄金花咲く」の一句、彼は飽迄も天然詩人也。彼は革命の破壊的詩人に非ずして盛世の嘆  
美者也。同卷天平感宝元年五月の作、詠庭中花作歌並短歌に

「荒玉の年の五年敷妙の手枕まかず紐解かずまろねをすればいぶせみと心なぐさに石竹を  
屋戸に蒔き生ふし夏の野の小百合引き植ゑて咲く花を出て見る毎に石竹か其花妻に小百  
合花ゆりもあはむと慰むる心しなくば天離る鄙あはれの一日もあるべくもあれや」

を見れば彼が天然を愛せるを知るべし。同卷天平感宝元年閏五月六日以来起小旱百姓田畝稍

凋色至干六月朔日忽見雨雲之氣仍作雲歌の如き祈雨の歌にして和歌を他の目的の爲めに作れるもの決してよろこぶべきものに非ず。第十九卷天平勝宝二年の作見飛翻翔鳴歌一首

春まけて物悲しきに小夜更けて羽振なく鳴誰が田にか住む

思想も句法も三段に切れたるを見るべし。同卷同年の作遙聞沂江船人唱歌一首

朝床に聞けば遙けし射水河朝漕ぎしつづ唱ふ船人

技巧を弄しての作也。故に「朝床」「朝漕」と「朝」の字二あり、思想を冗漫ならしむ。彼の長歌は同卷天平勝宝二年作の詠白大鷹歌一首並短歌の如き詠物のもの、同卷同年悲世間無常歌一首並短歌の如き古人の句を補綴したるもの、同卷同年の作贈越前判官大伴宿禰池主霍公鳥不勝感旧之意述懷一首並短歌の如き単に華美なるもの等にして根柢に確實なる感情なく形式的に作れるもの多く散文の如く冗漫なるもの多し。今一々例証するの煩に堪へず。同卷天平勝宝四年の作歌

うらうらに照れる春日にひばり上り心かなしもひとりし思へば

春日遅々鶺鴒正啼悽憫之意非歌難撥耳仍作此歌式展締緒云々

の如き華麗を極むるものは短歌に於て之を見出すのみ。

第二十卷天平勝宝五年四月の作

八千種に草木を植ゑて時毎に咲かむ花をし見つつしぬばな

の如き彼が天然を愛好するを知るべく、之に次ぐ六首

宮人の袖つけ衣萩にはほしよろしきたかまとの宮

多可麻刀の宮のすそみの野つかさにいまさけるらむ女郎の花

秋野には今より行かなものふの男女の花にはほひ見に

秋の野に露負へる萩を手折らずてあたら盛をすぐしてむとか

多可麻刀の秋野のうへの朝霧に妻呼ぶ牡鹿出で立つらむか

ますらをの呼びたてしかば小牡鹿の胸分け行かむ秋の萩原

右歌六首兵部少輔大伴宿禰家持独憶秋野聊述拙懷作之

家持は天然を愛し天然を歌ふに巧み也。同卷天平勝宝八年の作喩族歌一首並短歌の如き全く武人的思想を歌へるものは前後を通じて佳作あり。これ飽く迄家持の客観的詩人たるの証にして元来武人の行動は自己中心の要素よりも国家社会宗族のために尽すものなるを以て自己以外に權威を認むるに至り、献身的妄我的になり、自己の感情にのみ執着せざるに至る也。其反歌、

敷島の大和の国に明らけく名におふとものを心つとめよ

劍太刀いよとぐべし古ゆさやけく負ひて来にしその名ぞ

古人の調を模倣せず、当時の調にて一直線に言ひ下せる、武人のすがしき心をしぬばしむ。

されども之に次ぐ臥病悲無常欲修道作歌二首、

うつせみは数なき身なり山河のさやけき見つゝ道をたづねな

わたる日のかげにきほひてたづねてな清き其道またもあはむため

の如きは淡泊なる武人氣質の余りに客観的冷静を有し思想的和歌としては優秀のものたる能はず。

彼は其妻坂上大嬢の外十数人女子と恋歌を贈答せり。其中坂上大嬢に対する愛最も深かりし如し。第四卷更大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌十五首中、

朝夕に見む時さへや吾妹子が見れど見ぬことなほ恋しけむ

生ける世に吾はまだ見ず言絶えてかくもあはれに縫へるふくろは

相見ては幾日もへぬにここたくも狂ひに狂ひ思ほゆるかも

の如き就中思の切なるものなれども、余りに冷静に自らの感情を自ら解剖分析し遂には機智的に「見れど見ぬごと」とやうにいふに至る。恋愛は暗憎たる境遇に居りて光明追求の念熾盛なる時にこそ成立するものなれ、現実に満足を見出し又は余りに冷静に自己の感情の執着を離れたるものの味ひ得べきにあらず。彼は女子に対し深き印象を与へたるが如し。第四卷笠女郎贈大伴宿禰家持二十四首中

朝霧のおほに相見し人故に命死ぬべく恋ひ渡るかも

夕されば物思ひまさる見し人の言問ひしさま面影にして

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後へにぬかづくがごと

等を見て彼が婦人に愛せられたるを知るべし。されど「相思はぬ人を思ふは」の歌はすでに機智的也。当時一般男女の風俗軽薄に流れたるなるべし。坂上郎女を始め当時の女性の和歌皆機智的なるは時代一般の風なりしなるべし。

## 十一、万葉集中の民謡

今万葉集第十一第十二巻に就て簡單なる研究をなさむとす。此二巻作者無し。第十一巻は古今相聞往来歌類之上と部を立て、類を分つて旋頭歌・正述心緒歌・寄物陳思歌・問答歌・譬喻歌とし、第十二巻は古今相聞往来歌類之下と部を立て類を分つて正述心緒歌・寄物陳思歌・問答歌・羈旅発思歌となす。すべて民謡の体也。民謡は元來抒情詩的のものなれども其間諸種の体をふくむ。民謡的和歌は一定の場合にある定まれる作者がよめるといふよりも一般の場合をうたへるもの多く、又此の傾向は伝誦の際一層強めらるべし。したがひて個人思想感情よりも一般的国民性をあらはし、直接感情よりも一般的真理をうたひ、或は穿ちとなり或は言語上の遊戯を弄するに至る。故に後世の詩歌及一般文学の發達を見る上にも民

詩的和歌の研究は必要也。

恋ひ死なむ後は何せむ吾命生ける日にこそ見まく欲りすれ

哲学的冥想よりも直覚的印象をたつとぶ、詩的國民の声也。現世的等の名を与へて淺薄の義を加ふ可らず。

さ丹づらふ色には出でずすくなくも心の中に吾思はなくに  
自己の感情のみに執せず他を顧みて己を制するの冷靜を見る可し。

雲だにもしるくし立たばなくさめに見つつしぬばむただにあふまでに  
思を物に寄せて感情を灑散せしむ、此の思想記紀の歌にも集中にも多し。

路のべの耆師いもちきの花のいちじろく人皆知りぬ吾が恋妻は  
人に誇らむよりは人知れず思に耽らむとす。

朝戸出の君が足結をぬらす露原とく起きて出でつつ吾も裳のすそぬれな  
朝寝髪吾は梳からじ愛しき君が手枕ふれてしものを

直覚的印象をたつとぶ故、恋人の形見としてある客観的対象を取扱ふ也。全然主観的感情に耽けるものの能ふ所に非ず。此の記念といふ考は集中至る所に之を見るを得可し。

眉根かき鼻ひ紐解き待つらむや何時しか見むと思ふ吾君

おほならば誰見むとかもぬば玉の吾黒髪をなびけて居らむ

足乳根の母に知らせず吾が持たる心はよし吾君がまにまに

吾が恋の事も語らひなくさまむ君が使をまちやかねてむ

吾妹子に恋ひてすべなみ白妙の袖かへししは夢に見えきや

等国民の風俗をあらはせるもの也。

打日さす宮道に人は満ちゆけど吾が思ふ君はただ一人のみ

秋柏ぬるや河辺のしののめに人もあひ見じ君にまさらじ

恋の真相を一般的に歌へるもの也。恋は全幅の感情を傾注するを要す。思は唯一の方向をとらざる可らず。

朝影に吾身はなりぬ玉垣のすきまに見えて去にし子故に

たまさかに吾が見し人はいかならむ依をもちてやまた一目見む

白妙の袖をはつはつ見しからにかかる恋をもわれはするかも

山の端にさし出づる月のはつはつに妹をぞ見つる恋しきまでに

恋の生命は一瞥の瞬間にあり。

君が目を見まくほりしてこの二夜千年のごとも吾がこふるかも

一日千秋の思、捺望によりてせめても心をやらむとす。

思ふにしあまりにしかばすべをなみ出でてぞ行きし其門を見に

向へれば面がくれするものからに継ぎて見まくのほしき君かも

ぬば玉の妹が黒髪今よひもか吾がなき床になびきてぬらむ

相見ては恋なくさむと人はいへど見ての後ぞも恋ひまさりける

我背子が朝あけのすがたよく見ずて今日のあひだを恋ひくらすかも

味沢あじさわふ目には飽かねど携たづさはり問はれぬことも苦しかりけり

過去の經驗を反省する時、事實の真相始めて明かにし得可し。されど以上の数首は反省の結果の作なりと雖も未だ穿ちに落ちず、抒情詩として優等のもの也。感情をはなるること遠からざれば也。

かくばかり恋ひしきものと知らませばよそに見るべくありけるものを

世の中は常かくのみと思へどもはて思ほえずなほ恋ひにけり

月見れば国は同じく山へだて愛し妹はへだてたるかも

たもとほり住篋すまみの里に妹を置きて心空なり土はふめども

かくばかり恋ひむものぞと想はねば妹が手もとをまかぬ夜もありき

漸次直接なる感情を離れて思想的和歌となりたるを見るべし。

天地と言ふ名も絶えてあらばこそ汝と吾があふことも止みなむ

水の上に数かく如き吾命わがいのちを妹にあはむとうけひつるかも

岩はすら行き透るべきますらをも恋とふことは後の悔あり

狗錦紐解き明けて夕べとも知らざる命恋ひつつあらむ

大船の香取の海にいかり下しいかなる人か物思はざらむ

大土もとれば尽くれど世の中に尽きせぬものは恋にしありけり

言にいへば耳にたやすしすくなくも心の中に吾がもはななくに

夢にだに何かも見えぬ見ゆれども吾かも迷へる恋のしげきに

其反省漸次間接になり哲学的になりしを見るべし。仏教思想も、「水の上に数かく」「大土

もとれば尽くれど」等に明かにあらはれたり。

玉垂たまだれの小簾せすのすげきに入り通ひ来ね足乳根の母がとはさば風と申さむ

吾宿の軒の下ぐさ生ふれども恋忘草見れども生ず

打田にも稗ひえはここにありとへど扱られし我ぞ夜一人ぬる

結ぶ紐解かむ日遠みしきたへの吾が木枕に蘿生かづらひにけり

小墾せはりだ田の坂田の橋のこぼれなば桁けたより行かなな恋ひそ吾妹

殺板もちふたげる板目のあはざらばいかにせむとか吾が宿りけむ

難波人葦火たく屋の煤たれど己が妻こそ常めづらしき

妹が髪あけ笹の葉の放れ駒あらびにけらしあはぬ思へば

吾屋戸の穂蓼古幹つみ生やし実になるまでに君をし待たむ  
吾妹子が袖をたのみて真野の浦の小管の笠を着ずて来にけり  
道のべの草を冬野にふみからし吾立ちまつと妹につげこそ  
天地に少しいたらぬ益荒雄と思ひし吾や雄心もなき

問 答

門立ちて戸も閉ぢあるをいづくゆか妹が入り来て夢に見えつる  
門立てて戸もとぢたれど盗人のゑれるあなより入りて見えけむ  
客観的反省、智的分解の遂に穿ち、誇張に至り滑稽に転ぜるを見るべし。同時に掛言葉の如き言語上の遊戯をも生ず。

吾妹子が吾を送ると白妙の袖ひづまでに泣きし思ほゆ  
待つらむに至らば妹がうれしみと咲まむ姿を行きてはや見む  
ともし火のかげにかがよふうつそみの妹が笑ひし面影に立つ  
馬の音のとどともすれば松かげに出でてぞ見つる若しは君かと

浅茅原茅生に足踏みこころくみ吾がもふ見らが家のあたり見つ  
純抒情詩的傾向より智的傾向に進みたる客観的傾向は又一方写實的方面に発達し、複雑なる  
光景及活動せる動作を描けり。

笠無しと人には言ひて雨つつみとまりし君が姿しぞ思ふ  
妹が門行き過ぎかねつ久方の雨もふらぬかそをよせにせむ

問 答

門立ちて戸も閉ぢあるをいづくゆか妹が入り来て夢に見えつる  
門立てて戸はさしたれど盗人のゑれるあなより入りて見えけむ

問 答

すべもなく片恋をすとこのごろに吾が死ぬべきは夢に見えきや

夢に見て衣をとり着よそふ間に妹が使ぞ先立ちにける

の如き小説的趣向を歌はむとするを見るべし。伊勢物語以下此の両巻の歌の引用せられたるもの多く又其趣向も此等の歌と同じきものすくなからず。民謡的和歌の研究が吾人に大なる興味を与ふる所以也。しかれど今は研究の範圍の散漫にならむを恐れ此方面の研究は暗示を与ふるに止めむ。

雲だにもしるくし立たばなくさめに見つつしぬばむただにあふまでに

は齊明紀の歌「いまきなるをむれが上に雲だにもしるくしたたば何かなげかむ」より出で、

古のしづ旗帯を結び垂れたれとふ人も君にはまさじ

は武烈紀の「大君の御帯のしづはた結び垂れ誰れやし人もあひ思はなくに」繼體紀の「安見

しし吾が大君の帯ばせるささらの御帯の結びたれ誰やし人もうへにでてなげく」等と同じく古代の民謡に根柢あるものなるを知るべし。

人の国に夜ばひにゆきて太刀が緒も未だ解かねば夜ぞ明けにける

は古事記の「さよばひにあり立たし、夜ばひにあり通はせ、太刀が緒も未だ解かずて、おすひをもいまだとかねば云々」と同じ形式と思想とを有せるを見るべし。

あしき山木末ことごと明日よりは靡きたれこそ妹があたり見む

は人麿の「妹が門見む靡け此山」と同じき思想なるを見るべし。以上の歌を以てして上代の思想をうけて又後代に其影響を及ぼせるを知るべし。

劔太刀諸刃の利きに足を踏み死にも死ななむ君によりては

彼方のはにふの小屋に小雨ふり床さへぬれぬ身そへ吾妹

高嶺より出でくる水の石にふれ破れてぞ思ふ妹にあはぬ夜は

味のすむすさの入江の荒磯松吾をまつ児なは只一人のみ

蘆垣あしがきの中なかにこ草くさにこやかに我わがと咲あみして人にしらるな

この言をきくとにやあらむまそ鏡てれる月夜も闇にのみ見ゆ

の如き上代的風格をそなへたる抒情歌と同時に、

窓越しに月さし入りて足引のあらし吹く夜は君をし思ふ

ませ越しに草はむ駒の罾らるれどなほも恋しく思ひがてぬを

桜花さきてや散ると見るまでに誰かここにて散りゆくを見む  
の如き写實的方面に於て俳句に於けるが如き内容と句法の發達したるをも認め得可し。

發展變化の極は復古によつて再び新生命を持來さざる可らず。其、

玉梓たまはだの道行占うらひにうらなへば妹にあはむと吾にいひつる

面忘れだにもえせずと手握りて打てどもこりず恋の奴は

思ひけむ其人なれやぬば玉の夜毎に君が夢にし見ゆる

伊勢の海人が朝な朝なにかづくとふ鮑あわびの貝の片思にして

の如きに至りて爛熟に過ぎて生氣無し。因襲的形式に囚はれ生命を失はむとするを見る可し。

## 十二、万葉集第十六卷に就て

万葉集第十六卷は有由縁歌並雜歌と表し、新古の歌を雜へ載す。

伝説につきての歌を研究すべし。数人の男子一人の女子に恋ひし、其女子身を殺すこと、  
こは「桜児の歌」に二人の男子女子を恋ひ命を顧みずして相争ふ、女子ために林中に縊れて

死す。二人の男子之を哀みて作れる歌二首、

春さればかざしにせむと吾が思ひし桜の花は散りにけるかも

妹が名にかけたる桜花咲かば常にや恋ひむいやとしのにはに

又「縵児の歌」は三人の男子一人の女子を恋す、女入水して死す、三人の男子各一首の歌を作る。

耳無しの池しうらめし吾妹児が来つつ潜かづかば水は涸れなむ

足びきの山縵かづちの児今日往くと吾に告げせばかへり来ましを

足びきの山縵の児今日のごと何れの隈を見つつ来にけむ

女子の名を桜児といひ、山縵児といふに注意すべし。

日本民族の神話的意識の傾向を見るべし。万葉集中此の類の伝説は、勝鹿真間娘子及葦屋海辺処女となり、次に竹取翁偶逢九箇神女購近狎之罪作歌一首並短歌、娘子等と和歌九首あり。此の仙女といふ思想は支那より来れるものならむ。仙女のことを詠せしものは第三卷仙柘枝歌、第五卷大伴旅人作（代匠記の説により旅人作とす）玉島仙女歌、第九卷浦島子歌となり。竹取翁の歌は長ければ引かず、原本を見られたし。今之に就て二三の観察をなすべし。人心自然の要求として現実以外の理想境を憧憬す。されど其の理想境も経験し得可き現実社会を根柢とするものなるを以て此の間の關係に注意して研究せざる可らず。其の序は

昔有老翁号日竹取翁此翁季春之月登立遠望忽值煮羹之九個女子云々干時娘子等呼老翁嘖曰叔父來吹此燭火也云々乃竹取翁謝之曰非慮之外偶逢神仙迷惑之心無敢所禁近狎之罪希購以歌即作歌一首並短歌

とあり。歌の内容は自己が幼年より成長する順序を述べ、昔は多くの女に恋せられたるものぞ、な侮りそといふ意也。其うち、

「麻あさ読の児等 あり衣の宝の子等が 打拷は経て織る布を 日にさらし朝手づくりを 布裳あさなすしきにとりしき 綻ほころべる稲置少女が つま問ふと我ぞ米にし」

といふは、貴き顔よき女も、賤しき見にくき女も吾により来しをいふ也。源氏物語伊勢物語の思想と相類似し、其の幼年よりの経歴をのぶるさまも相似たり。又

「春さりて野べをめぐれば面白み我を思ふか……刺竹の舎人男も忍ぶらひかへらひ見つゝ誰が子ぞやと思はれてある」

と、人を見ては直に其親を思ふも我国の俗也。又終りに厚殿の故事を引用し老者を厭ふをさとし、反歌に、

死なばこそ相見ずあらめ生きてあらば白髪子等に生ひざらめやも

と老少不定の理を述ぶるが如き、次に娘子等と和歌九首をあげたる等、万葉集の和歌は其の形式に盛り得べきすべてをつくせるの思あり。

次に昔者有壯士与美女也不告二親竊為交接於時娘子之意欲令親知因作歌詠送与其父歌曰、其他斯の如きもの八あり。されど就て言ふべき無し。

又酒宴の席に誦せる歌あり。就て言ふべきなし。

次に機智的の歌を研究すべし。

長忌寸意吉麻呂歌八首

刺鍋きなに湯沸かせ子ども櫟津いちいつの檜橋ひばしより来む狐きつにあまさむ

右一首伝云一時衆集宴飲也於時夜漏三更所聞狐声乃衆諸誘興磨曰関此饌具雜器狐声河橋等物但作歌者即応声作此歌也。

機智頓才は神速をたつとぶ。此の電光的進行にともなふ快感が美の形式的要素也。然れども斯の如き文学は其の創作の実地的行為に価値を有するものにして、其の甚しきは連歌の如く作りしものに興味あるに非ず。其の作ることに興味を有するを以て、技巧を重んじ又遊戯的態度に出づるもの、現実の一瞬に調和解脱の境を求むる禪が実行を重んずると同時に一步を誤る時は野狐禪に陥り、直観的光景に感情の解脱を求むる俳諧趣味が時に低徊空想趣味に墮落するも皆同一の理由よりするもの也。機智的喜劇的文学の弱点はその浅薄なる楽天観に存するもの也。万葉集の斯の如き歌と後世の「何々尽し」等の間の発展も注意すべきもの也。

又、詠行騰蔓菁食薦屋梁歌

すじも 食薦さし蔓菁煮持ち來梁に向脛かけて息む此の君

以下数首此の遊戯より作りしものにして、前に述べし如く歌より趣味を感得することよりも作ること自身に興味あるもの、読者も亦其手際を賞すること曲芸を見る如き態度をとる也。内心に作歌の衝動ありて作るものに非ず。芸術家の芸人に墮落するは此の間の消息に外ならず。其他境部王詠数種物歌、高官王詠数種物歌二首等皆同類の作也。

諷刺的の歌

児部女王囃歌一首

旨し物いづくはあかじを尺度等が角の膨れにしぐひあひにけむ

右時有娘子姓尺度氏也此娘子不聽高姓美人之所誂応許下姓醜士之所誂也於是児部女

王裁作此歌嗤咲彼愚也

他の欠点を発見するもの也。これは肉体的欠陥を誇張したるもの也。

ながのいみきおきまろ 長忌寸意吉麻呂八首中詠荷葉歌、

蓮の葉はかくこそあるもの意吉麻呂が家なるものは芋の葉にあらし

吾妻女をあざけりしものか、猷新田部親王歌一首、

勝間田の池は我知る蓮なししかいふ君が髭なきがごと

右或有人間之曰新田部親王出遊千堵裡御見勝間田之池感緒御心中置自池不忍憐愛於時語婦人曰今日遊行見勝間田池水影濤濤蓮花灼灼可憐斷腸不可得言爾乃婦人作此戲歌王輒吟詠也

これ所謂反語なるもの也。謗倭人歌一首

奈良山の兎手柏の両面にかにもかくにもねじけ人の友

右歌一首博士消奈行文大夫作之

正面より説明せず、比喻を以て裏面の意を納得せしむ。詩の生命は此の思附にあり、池田朝臣嘖大神朝臣奥守歌一首大神朝臣奥守報嘖歌一首等皆肉体的欠陥を誇張せるものに比する時は一步をすゝめたる諷刺也。戲嘖僧歌一首

法師等が髭の剃材に馬つなぎ痛くな引きそ法師なからかむ

の如きは肉体的欠陥を誇張せしものなれども思想甚だ突飛にして同時に僧の生活情態を諷するものにして傑作といふべし。法師報歌

壇越や然もな言ひそ里長らがえつきはたらば汝もなからかむ

報歌として面白し、一面時代の弱点を捕へたれば也。

作者未詳の

此頃の我恋力記し集め功に申さば五位のかかぶり

自ら嘲りて又世を嘲る滑稽の上乗なるもの也。

怪をうたへるもの。

夢裡作歌一首

荒城田の師田の稻を倉にこめてあなひねひねし吾が恋ふらくは

右歌一首忌部首黒麻呂夢裡作恋歌贈友覚而誦如前

恋夫君歌

飯はめど旨くもあらずありけども安くもあらず茜刺す君が心し忘れかねつも

右歌一首伝云佐為王有近習婢也于時宿直不遑夫君難遇感情馳結係恋実深於是当宿之夜夢裡相見覺寤探抱会無触手欧乃哽囁歎高声吟咏此歌因王聞之哀憫永免侍宿也

怕物歌三首

天にあるやささらの小野の茅草<sup>ちがや</sup>刈り草刈りはかに鶉を立つも

奥つ国知らせし君が染屋形<sup>かんざね</sup>黄染<sup>きんぞめ</sup>の尾形神か戸渡る

人魂のさ青なる君がただ一人あへりし雨夜は久しと思ほゆ

思想的の歌。

厭世間無常歌二首

生き死にの二つの海を厭はしみ潮干の山をしぬびつるかも

世の中のしき借いほに住み住みて至らむ国のたづき知らずも

右歌二首河原寺之仏堂裡在倭琴面也

心をし無何有の郷に置きてあらば藐姑射の山を見まく近けむ

いさな取海や死にする山や死にする死ねこそ海は潮干て山は枯れすれ

これ憶良の思想的歌よりも一步を進めたるものにして其の内面には深き教理と人生上の実験のこもれるを見る。其の譬喩を以てする詩化手段といひ、教理的説明に落ちず意を言外に托したる、前の二首は集中稀有の作也。後の二首も言ひ方露骨なれども当時にあつては進歩せる思想たるを失はず。其他歌に題して無心所著歌二首といふ如き当時思想の發達し居りしを知るべし。

民謡的の歌。

今一々あげず、特種のもの二三に就ていはむ。

琴酒を押垂小野ゆ出づる水ぬるくは出でずまし水の心もけやに思ほゆる音の少なき道にあはぬかもしもしきよ道にあはさば汝衣せる菅笠小笠吾がうなげる珠の七つ緒取りかへもまをさむものをすくなき道にあはぬかも

感情の客観化せられ一般の場合を美しき音調を以ていひあらはせる、民謡として最も勝れたるものならむ。歌の意は思ふどち人の音すくなき路上にあはむと也。

其他豊前豊後能登越中等国名を明示せる民謡あり。能登歌三首中右一首伝云或有愚人斧墮海底而不解鉄沈無理浮水聊作此歌口吟為喻也と左注ある如き支那故事より出でたるものあり  
又

橋立 熊木酒屋に ま罵らる 奴わし 誘ひ立て みて来なましを ま罵らる 奴わし  
の如く教訓的のものあり。其方言を以てせしは注意せざる可らず。又乞食者詠二首中右歌一首為鹿述痛作之也、又右一首為蟹述痛作之とあるが如き長ければ引用せざれども外来思想の影響により所謂寓話の如き歌詠ありしならむ。

附 載・毛筆直筆「万葉集論」より二章

和歌の分類（原文第四章）

万葉集ニ於テハ雜歌相聞挽歌譬喻羈旅問答等ニ分類セリ、古今以後撰集モマタ万葉集ニナラヒタルモノニシテ大同小異也。其他詩ノ六義等ニトリテノ名モアレド皆任意ノ命名ナルヲ以テ今ハ

一、抒情的

二、思想的

三、叙景的

ノ三トスルモ可ナラムカト思フナリ。

抒情的和歌ハ主トシテ作者ノ心中ニ製作ノ衝動ヲ発スルモノ思想的和歌ハ反省的ノ智的感情ヲ歌フモノニシテ民謡ハコノ二ツノ中ニ包括セラル、叙景的和歌ハ主トシテ外界ノ物象カ作者ニ製作ノ衝動ヲ与フルノトキ製作セラルルモノナリ、サレド斯ノ如キ人工的の分類ハ決して余スナキノ適用ヲナス可ラズ全ク便宜上ノモノナリ。

## 和歌連作論（原文第五章）

万葉集ニ於テ他歌集ト比較シテモットモ著シキハ其短歌カ数首連作セラレ全体ニテ全キ一ツノ作物トミナス可キコト也、今ハ其実例ヲアゲズシテ本論ニユヅリ単ニ其理由ヲ研究セム、  
万葉集第三卷二

天平十一年己卯夏六月大伴宿弥家持悲傷亡妾作歌一首

弟大伴宿弥書持即和歌一首

移朔而復悲嘆秋風家持作歌一首

又家持作歌一首并短歌

悲緒未息更作歌五首

コノ一群ノ歌ニ於テ最後ノ「悲緒未息更作歌五首」トイヘルハ作者カ和歌連作ノ動機ヲ自白シタルモノ也。

和歌ハ單純ナル感情ヲ密接ナル觀念ノ結合ニヨリ表現スルモノニシテ其内容ハ俳句ヨリモ單純也、且和歌ハ一般的感情ノ直叙ナルヲ以テ俳句ニ於ケル如キカケ離レタル觀念ノ突然ナル結合ナク又俳句ニ比スルトキハ和歌ノ時間的節奏空間的形体ノ表現ニヨリアル實在現象ヲ直覺的ニ叙シ得ルカ故ニ實在ノ感情又ハ風景ヲ土台トシテ継続近接セル時間空間上ノ現象ヲ

逐次詠出スルヲ得可シ、サレド俳句ニ於テハ全ク抽象的概念ノ結合ニヨル形式の感情ニヨル故ニタトヘ連作ヲナシタリトテ和歌ニ於ケルガ如ク密ナル接合ヲナシ得ズ、又俳句ノ特色トシテ機智的ナルヨリ自然冗漫ヲ嫌フヲ以テ数首連作ノ俳句ノ如キハ却ツテ其特色ヲ没スルノ恐アリ、俳句ニ於ケル一題ノ下ニ数首ヲ作ルガ如キハ各首只其題目ヲ同ジクスルニ止リ各別ノ風景ト情趣トヲ詠ズルモノ也、又俳句ガ主トシテ題詠ニヨリ作ラルルヲ思ヘバ俳句ニ於テ連作ノ不可能事ナルハ明カナルベシ、美術的製作ハ統一ヲ根本条件トスレバ也、何トナレバ統一ナキ単ナル集同ヨリハ何等ノ結果の效果ヲ生ゼザレバナリ、而シテ和歌ガコノ連作ヲ以テスルトキハ作者ノ技倆ニヨリ諸種ノ変化ヲ求メ得可ク叙景的思想的和歌ヲモ抒情詩的和歌ノ群ニヨリ統一シ複雑ナル内容ヲ有スル詩歌ヲ得可シ、独立セル単一ノ短歌ヲ以テ本来ノ形式ナリト認ムルハ伝来ノ誤謬也。

解題

夜久正雄

- (一) 「天皇御歌解説」解題
- (二) 著者三井甲之先生について
- (三) 「万葉集論」解題

(一) 「天皇御歌解説」解題

亀井君から話があつて、今上天皇の御歌に関する書物を出版したいといふことだったので、三井甲之先生の「今上御歌解説」の翻刻をすゝめたのである。

「今上御歌解説」といふ冊子は、昭和二十七年三月、三井先生が、病床において執筆され、自費をもつて騰写印刷の上頒布されたものである。半紙B6版型わづか一八頁の騰写印刷の小冊子であつた。先生は当時戦後の文筆家追放によつて言論活動の自由を失つてをられたうへ、御病中でもあり、世間一般も経済的な復興未だしき折柄であり、私どもにも力がとほしく、活字印刷にすることができなかつたのである。これについて、「三井甲之歌集」（昭和三十三年二月十一日発行）の「三井甲之年譜」に、次のとおり書かれてゐる。

「昭和二十七年 七十歳

三月「今上御歌解説」(夜久正雄騰写)出版。「今上御製集」と併せて知友の間に贈呈配布す。これ病間一切の不自由に耐へ幾度か稿を改めて成れるものにて、しきしまのみち最後の御奉公なり。自ら『永訣の書』となす。

昭和二十六年五月十日消印の先生のお葉書に次のやうにある。

△……「今上御製」を「天皇御歌」と題して三二頁で五〇〇部印刷しようと思つて目下構想に時間をすごし又執筆に「仕事」を見出してをります。天皇御歌はまことに未曾有の作であることを実感しつつこれをねがはくは有志同信にわかちたいと念じ、「講和」と「解除」を目あてとして、それがうまくゆかなかくとも「純學術的」に自費出版し、そのために葬式に村人に酒をふるまふことをやめて之をくばることすると申せば妻子はそれは後にのこるものに任せよと申すやうの次第です。年をこせば七〇才になるので「遺言」をしたゝめましたのです。仏教戒名は二、三年前にきめましたが一寸申上ります。V先生は、昭和二十二年四月十日脳溢血に倒れ、二十三年文筆家追放にかゝられたが、左手左脚の自由を失はれた病臥の床で、隻手執筆をつゞけられ、同信友人門弟との文通に、學術的宗教的論文の執筆に、不撓不屈の文筆活動をつゞけてをられたのである。しかし、先生の言論の発表の世界は極めて限られた世界になつてゐて、小冊子の出版も意に任せられぬ状態であつたことが、このお手紙でわかる。

つゞいて、六月二十一日附のお手紙には、次のとおりである。

△「天皇御歌」はすでにかきをへましたが、三度かきなほし今度三度目の完成をゆつくりこころみつあります。

「枯れたてるコスモスのみにむらがりこがはらひわは冬立つあした」

このミウタ、小鳥の体位を示すやうのことばではありませんか。

「秋ふけてさびしき庭に美しくいろとりどりのあきざくらさく」

と二首つぎへよんでをります。V

つゞく七月二十二日付のお手紙は、A 拝啓、昨日の新聞で追放非解除とわかりましたについて一寸申上ますVにはじまる長文のお手紙で、世界の大勢からシキシマノミチの前途を論じられたもので、その中に、

A 「天皇御歌研究」も脱稿しましたがナホ再考しつゝこれを十六頁位の「生前訣別辞」として諸兄に呈したいと思ひます。当路の大官にも呈するやうになるかもしれませんがミノダ兄靈前にさへげたいと思ひます。V

とある。そうして、この文章の書かれた原稿用紙の欄外に、ただたどしい字体で、

A コノテガミカキテ出スイトマナク病勢重クナリ ソノマ、一ヶ月八月三十一日アサコレヲソノマ、出シマス

神ノマモリヲアリガタクイタダキツ、シルスV

と書かれてある。御病勢は九月には回復され、十月には前に変らぬおたよりをいただくことができたが、十二月二日付でA 一二、四カラ、マタワルクナリ、シツレイシテヨリマス、シカシイマフタタビヨクナリツ、ケフハシヲモツテゴハンヲタバウルヤウナリマシタ、トシガアケレバ執筆デキマセウVと

いふ先生としては異例の鉛筆書きのおたよりをいただき、二七年一月一日付で葉書一面

△だんくよくなりつゝあり 大丈夫です 執筆困ナンノ外ハV

といふおたよりだつた。

そして、二七年一月一八日付のお手紙で、「天皇御歌解説」の騰写印刷の御依頼を受けたのである。そのお手紙に、△別封紙箱内ニ拙稿二通入Vとあり、△田尻兄が十三日拙稿一通持つて行かれ、井上孚（曆）兄へとゞけ、松田福（松）兄へとゞける筈。小生五〇〇〇円ばかり用意し、小さいもの少数、トーション版でねがいます。あさ八時寒いのでこれで失礼Vとある。

私事にわたるが、当時病氣療養中の私は二十六年五月、先生の祝詩をいただいて拙歌集「武蔵野」を自刻騰写印刷し、爾来、「戦後」「流星」と三冊の騰写版歌集を出して販布した。三井先生がどうして活字印刷を断念されたか何がつたことはないが、追放非解除が重なる原因ではなかつたかと思ふ。ともかく、私を援助して下さる御親切もあつて、騰写印刷の註文を出して下さつたわけである。

それで、「天皇御歌解説」の本稿は、松田先生からいただいたのだとおもふ。本書に収めた「二稿・三稿」は、三井先生のお手紙にある「拙稿二通」がこれに当るのだつたと思ふ。鉛筆書きで、欄外に、「第二次稿」、「第三次稿」と書かれてある。さうすると、本稿は、その次に書かれた第四次稿に該当するのかも知れないが、そのところ私にはまだよくわからない。ともかく筐底にとどめるには勿体ないので、別稿として掲載させていただいた。書かれた時機の前後の詮索よりも、先生の御苦心のあとをしりたい。先生の御手紙の数々を引用させていただいたのも、病中の困難に屈せず執筆印刷に努力された

先生の勇猛心をしのぶためである。

たしか、その三月の末日ごろだつたと思ふ。田代二見画伯の版画装幀で、同じく騰写印刷の「今上天皇御製集」と併せて、印刷が出来上つたのである。本文の題は先生の原稿どほり「天皇御歌解説」とあるが、田代先生の版画の表紙には「今上御歌解説」となつてゐた。

その後、もう一度先生は回復なさり、執筆文通をさかんにされはじめられたが、六月ごろからは執筆を止められた。お手紙も夫人の代筆になさつて、再起の御努力をつゞけられたが、遂に翌二十八年四月三日永眠せられたのである。「今上御歌解説」は文字通り、三井先生七十一歳の御生涯の「永訣の書」、龍大な量にのぼる文筆活動の最後の遺書となつたのである。

私はこの御研究を指針として今上天皇の御歌の研究をつゞけ、先生没後の昭和三十四年「歌人今上天皇」を發行することができた。当初、「歌人今上天皇」に、この「今上御歌解説」全文を載せさせていたゞくつもりであつたが、發行所の都合で見合せたので、爾来、本書の翻刻は、私の念願でもあつた。今度、所蔵の別稿二篇を加へて活字にする機会ができて、ほつとした。体裁は簡素だが、要はその内容であるから、活字にさへしておけば、好学の人々の目にふれて、必ず新しい生命の世界がひらかれるに違ひないと思ふ。私などもまたこれを機会に、当時の先生の御苦心を推察申し上げながら、心をこめて先生「永訣の書」を読み返してみたいと思ふ。この貴重な文献の翻刻のお許しをいただいた御遺族に心から感謝申上げたい。

書名は亀井君の希望もあつて「今上天皇御歌解説」とした。別稿三稿に拠つたのである。その方が内

容に合致すると考へたからである。

(二) 著者三井甲之先生について

戦後、三井先生のことを軍国主義、反動・ファツシヨの親玉のやうに書いたものが大分あるが、それこそ一時の左への反動のもたらした曲論である。いま、明治・大正・昭和三代にわたり尨大な文筆活動をつづけられた先生の全体について論ずることはできないので、「日本文学大辞典」と「和歌文学大辞典」の「三井甲之」の項を引用させていただいて、先生の紹介に代へたい。「日本文学大辞典」の方は高須芳次部・金子薫園両氏の執筆、「和歌文学大辞典」の方は広瀬誠氏の執筆にかゝる。

○

「改訂増補・日本文学大辞典」(藤村作編、新潮社刊、昭和七年〜九年初版、昭和二十四年改訂増補)

三井甲之かみち 評論家・歌人〔本名〕甲之助

〔閏歴〕明治十六年十月、山梨県中巨摩郡敷島村に生れた。第一高等学校を経て、明治四十年、東京帝國大学国文科を卒業、同四十一年、正岡子規の遺業、根岸短歌会を継承し、雑誌「アカネ」を編輯して、早くから日本主義の宣揚に努めた。「アカネ」は一時中絶したが、明治四十四年五月再び刊行。同四十五年に及び、「人生と表現」と改題し、主として評論及び短歌・長詩に力を注いだ。大正五年、一時「人生と表現」を休止し(同十年、復活号が出たが、井上右近の手で編輯、京都から発行した)、更に大正十四年に至り、蓑田胸喜と協力して「原理日本」を創刊し、日本主義を唱へた。昭和三年、敷島

の道の会を「原理日本」同人と共に創立し、日本精神の表現について、詩歌の上から力説する所があつた。なほ早くから雜誌「日本及日本人」の短歌選者となり、この方面の開拓に尽した。

〔著書〕「明治天皇御集研究」「民族心理学研究」「我等は如何にこの兇逆思想を処置すべきか？」等があり、なほ詩集に「祖国礼拝」などがある。

〔批評〕正岡子規の傘下にあつて、作歌の傍、日本主義運動に従事し、二十年一日の如く、論戦の陣頭に立つた。その表現には少しく濶ひを欠く所があるが、自ら信ずること厚く、主張の上にも底力と熱意とを有する点は独自の長所である。歌人としては伊藤左千夫と並んで子規門下に重きをなし、しかも子規歿後、左千夫と相和せず、「日本及日本人」に行つてその歌欄を担当し、斎藤茂吉と論争したこともある。日本思想を強調した「人類の世界はひろししかれどもわれら行くべししきしまのみちを」の如き直情的の作を得意とするが、一面に「秋雨のすがしく晴れし夕暮に相見しゑまひ忘れかねつも」の如き、優婉可憐の趣のものもないではない。〔高須芳次郎・金子薫園〕

○ 「和歌文学大辞典」(明治書院刊、昭和三十七年)

三井甲之助みづのすけ 明治一六1883・一〇・一六—昭和二八1953・四・三。七一歳。本名は甲之助。別称は笹野谷人。

〔閨歴〕山梨県生。一高を経て明治四〇東大国文科卒。明治三七から根岸短歌会に入り「馬酔木」に清  
新な作品を発表。伊藤左千夫から深く信頼され「馬酔木」終刊の後をうけて明治四一「アカネ」創刊、

その経営を一任されたが、やがて甲之の人生主義は左千夫の芸術主義と衝突し、感情問題もからみ、左千夫らは別に「アララギ」を創刊して「アカネ」を去り、甲之は後々まで「アララギ」の斎藤茂吉らと論争した。明治四五「アカネ」を「人生と表現」と改題、大正一四年まで刊行。なお甲之は明治四一から「日本及日本人」の選歌も担当した。甲之は大正中中期から祖国主義を強調、やがて敷島の道を説き、明治天皇御製拜誦の国民宗教を宣説し、大正一四「原理日本」を創刊、昭和三「しきしまのみち会」を組織して、終生和歌を中心とする日本主義を唱道した。昭和一四郷里敷島村々長に就任。昭和二三公職追放。翌二四脳溢血で倒れ、病床から昭和二七「今上御歌解説」を頒布、翌年没した。

〔業績〕明治四〇恋愛詩集「消なば消ぬかに」に始まり、大正三の「文学概論」「短歌概論」を経て、昭和二「詩集祖国礼拝」、昭和三、主著「明治天皇御集研究」を刊。その他「しきしまのみち原論」「詩集日本の歓喜」「和歌維新」「三条実美伝」等。「三井甲之歌集」は歿後刊行された。なお青年時代からゲーテ、親鸞、ヴントに傾倒し、「ヴント氏・民族心理学研究」「ゲエテ・ファウスト」「親鸞研究」等の著があり、甲之の文学理論の重要な根底となつてゐる。〔参考文献〕「三井甲之追悼号」(「新公論」昭和二八・一〇)、「童馬漫語」(斎藤茂吉著)、「明治大正短歌史」(同上) (広瀬誠執筆)

先生没後「三井甲之歌集」の出版されたことは、前記にあるとほりであるが、その他、宮崎五郎氏編「三井甲之書翰集・無限生成」は宮崎氏宛戦後の書簡の集録で、極めて貴重な文献である。また同じく宮崎さんの「三井甲之選集」は、論文の抜粋である。他に桑原暁一氏の「三井甲之歌論拾遺」小泉一也

氏「行く春」翻刻もありがたいものである。先生を憶念するものの営みはたえることはない。本集もその系列に加はらうとするのである。また、甲之研究論文としては、昭和三十年岩波発行の「文学」に三号にわたつて、「抒情的ナシヨナリズムの系譜」といふ題の三井甲之論が連載された。左翼的情調に流れた甲之批判ではあるが、甲之のものに直接とり組まうとしたものである。

### (三) 「万葉集論」解題

本書附載の「万葉集論」は、明治四十一年から二年にわたり、根岸短歌会発行の「アカネ」誌上に発表された論文を集めたものである。これは、その前年明治四十年、先生が東京帝国大学文学部国文学科を卒業されるに当つて書かれた卒業論文「万葉集について」に手を加へられたものであらう。

たまたま松田福松先生が三井先生の御遺稿類を整理（昭和四十年）なさつたところ、その中に、「明治四十年四月脱稿の甲之居士直筆毛筆原稿『万葉集論』一冊」があつた。これについて松田先生はかう書いてをられる。「これは居士の年譜に『明治四十年二十五歳東京帝大卒業。卒業論文「万葉集につきて」とあるものを、完成清書されたものと思はれる。これは出来るだけ早い機会に筆写して本誌紙上ででも活字にして残して置かねばならぬ。」（『人生随順』第三十一号、しきしまのみち会大阪支部・昭和四〇年八月一五日発行）と。そしてこの「万葉集論」は、つゞいて「人生随順」第三十二号から、連載されて、今日に至つてゐる。それを見ると、漢字かた仮名まじりの文語体文章で、句読点も読点のみである。「アカネ」所載のものは、平がなになり、句読点も句点読点の区別が付けられ、文体もやや和

らげられてゐる。文章も異るところが相当あるが、それは、一般的の理解度を考へてわかり易く説明しようと思はれる。全文の趣旨は同じものである。ただし、論文掲載の順序は、直筆原稿とは異なる。

そこで、本書には、「アカネ」所載の論文を複製することとし、その順序は、直筆原稿「万葉集論」に拠ることとした。したがつて、本書所載の「万葉集論」は、体裁こそや異なるが、内容は四十年四月の卒業論文・直筆原稿とほとんど同じものとみることが出来る。明治四十年代に、二十五歳でこの文章を書かれた三井先生の独創的天才に驚嘆するのみだが、一面、われわれ後輩の努力の目標にもなるはずである。

この論文の価値について論ぜられたものを近年まで私は見たことがなかったが、たまたま、昨年（昭和四十一年）の一月二十七日、朝日新聞連載・土屋文明「折り折りの人」の中に、「三井甲之」の一章が「印象的だった万葉論」といふ副題がついて掲載された。この文章は直接には当時同じく「アカネ」に掲載された「和歌入門」の批評であるが、「万葉集論」にも適用しようと思ふ。戦後三井甲之といへば、ナチスばりの反動思想家ときめつける風潮に何となく圧迫されてきた私などは、現代歌壇の総帥的地位にある土屋文明氏の、三井先生に対する偽りのない評価が、この上なくありがたかった。もちろん土屋文明は三井甲之の思想に全面的に共鳴してゐるのではない。むしろ、その作歌態度には反撥され、批判してをられるらしいのは文章のふしぶしにうかがはれる。しかし、これは「アカネ」の「万葉集論」について当時の評価を知ることのできるほとんど唯一の文章となつたのではあるまいか。途中から

引用するのは申し訳ないが、直接関係のあるところだけ引用する。

「……ただ（アカネ）毎号の三井甲之の和歌入門という題で万葉集を主とした記事は、特別に興味を引いた。あとで聞いた話であるが、これは甲之が国文科の卒業論文を元にして書いたもので、あるいはそのままの部分も多いだろうということであった。

その時代には、東京大学の国文科の卒業生で、万葉集を研究題目としての論文は、何年に一人というくらいのもめずらしいものであったとも聞いた。たぶん古泉千樞、斎藤茂吉たちからであろう。とにかく『アカネ』の所説は私にはすべてがめずらしく、すべてもつとも受けとれた。ホヤホヤの文学士たちが気負って書くのであるから、田舎の中学生には、むづかしい所があるにしても、大体は共鳴することが出来たのであろう。大須賀乙字の俳句論、広瀬哲士の仏蘭西文学紹介、皆目新しかったが、やはり甲之の万葉集論を中心とした、甲之の書くものが、私にはいちばん印象的であった。

私は甲之の論旨をば直ちに実行に移した。万葉集を読めとあるので、中学生としては大きな負担であるが、大阪版の略解を買い、さらに歌学全書本を求めた。歌をいちいち暗誦するくらいにせよとあるので、暗誦にとりかかった。中学四年生であるが、進学の希望を打ち断たれて、そのための学科の重圧はなかったから、万葉集を手製のカードに取って、通学の道々復誦した。短歌だけであったが、第三巻くらいまで出来たのではなかったかと思う。私は時々私が学校で心理学科を選んだ気持を尋ねられることがあるが、これなども甲之の『アカネ』の記事が最も大きな動機であったろう。甲之に限らず、精神問題の根本として心理学が大切だということが、相当多くの人々によってとなえられていた

時代で、甲之もたぶん学校で習ったことを、そのまま『アカネ』に書いたのであったろう。これは中学生の私にはあまり興味を引かなかったが、学校で科目を選ぶ時に、思い出されたのは確かだ。(中略)東京に移ってからの『アララギ』と甲之とは、きたない名義争いまでするようになったが、そのころから甲之は短歌の実作には興味を失ったらしい。つづいて我々とは縁の薄い思想家となってしまった。が、私はやはり一生の中では重要な影響を受けた人として忘れることはない。左千夫にしても、新仏教の理論家たちに飽き足りない時に、甲之が近角常観を紹介したのは、左千夫の信仰に一転機を作ったものに違いない。けんか別れが必ずしも人を無縁にするとはいえないだろう。私も時には人の尻馬に乗って甲之の悪口などたいたこともあるが、ただ一度蓑田胸喜にあった時彼が、甲之の同門であると感じて、長く長く握手の手を放さなかった時も、悪い気持はしなかった。」

三井先生のこの「万葉集論」が、明治から現代に至る万葉研究史の上で、どういふ価値を持つか、私にはつきり知らないが、「万葉集私注」の著者土屋文明に与へた影響といふ一点を以てしても無視することはできないと思ふ。それよりも、私は、三井先生の「万葉集論」を読んで、その「万葉集」に対する根本的の態度に動かされた。三井先生の研究は子規の万葉復活を一步すすめて、万葉集の歌を万葉歌人の人生体験の表現とみて、そこに彼らの人生の根本的の態度を汲み取り批判しようとしたものだと思ふ。例えば、人麿の歌の優劣を、完成せられた形についてのみ論ずるのではなくて、正岡子規が、源実朝の歌について論じたような態度——つまりその歌の出てくる根本の人生態度にさかのほって、万葉歌人を論じ、万葉集の価値を批判したのである。さうして彼らの精神を味はふことによつて研究者自身の

実人生の目標をうち立てむとしたのであった。いはば、子規の芸術的な態度から人生全体の問題をとりあげようとする真摯な態度へすゝんだものとみることが出来る。これはこの研究ばかりではなく、実作にもあらはれて、「アカネ」「人生と表現」「日本及び日本人」所載の短歌「国民同胞和歌集」となったのである。さういふ意味で、三井先生の生涯の研究の方向につながるものであるのみか、後年、「明治天皇御集研究」に結実した「文献文化史的研究方法」の萌芽を明らかに本論にみとめることができるのである。

附載の「かた仮名書き」の二章は、「アカネ」に載らなかつた毛筆直筆の「万葉集論」第四章、第五章である。この二章は同年発表の「和歌入門」の方に出ている。引用の万葉集の長短歌の訓み方や表記法に今日のそれと異なる点があるのは、著者が当時の訓読に拠つたからである。明治四十一年代の訓み方、書き方を残す意味でそのまま載せた。ただ、振り仮名は、原著よりも多く加へて読み易くすることに努めた。

「永訣の書」——「今上御歌解説」に併せて載せさせていただいた所以である。

## あとがき・刊行のことば

斑鳩会 亀井孝之

一昨年の四月、小田村先生と夜久先生にご無理をお願いして、「天皇と天皇制についての基本的思考」といふ書物を、私たちの手で出版する事が出来ました。この事によつて、私たちは次の事に気がつきました。

天皇が日本国民統合の象徴であるといふ事は皆知つてゐるが、天皇になられた御方がどのやうなお人柄であるのか、またどのやうな事をされてゐるのか、について私たちはほとんど何も知らず、いや、知らうとさへしてゐないといふ事です。天皇の公的生活は憲法によつて決められた範囲で国務に携はられてゐるわけですから、天皇の仕事については憲法を読めば想像出来ますが、お人柄については、天皇御自身が書かれたものを読むほかに、知る方法がありません。天皇御自身が書かれたものといへば、今上天皇には生物の御研究書もありますが、それは特別のことで、歴代の天皇は和歌をお残しになつてをられるのです。

和歌といふと、百人一首などが思ひ出されて、現在では趣味的なものと思はれがちです。といふより私自身が大学二年までさう考へてゐました。そして、自分は技巧を要するやうな文学的表現は苦手だから、和歌は自分には作れないと考へ、和歌などは文学的センスのある人が作ればよいのだと単純に考へ

てみました。従つて、明治天皇や今上天皇が和歌を作られる事も趣味でお作りになられてゐるものとのみ思つてをりました。ところが、亜細亜大学在学中に夜久先生のお話を伺ふ機会が多くなるに従つて、和歌が単なる「月花のもてあそび」―趣味ではないといふことを感じるやうになりました。そして明治天皇や今上天皇が和歌を作られることも、趣味などといふものとは全く違つた次元にあるといふこと、また御二方に限らず、歴代の天皇が和歌をお作りになられてゐるといふことが、大變な意味のあることだ、とわかつてきました。

歴代天皇が和歌を作られる意義について、三井先生は本書の中で、「吉田松陰が『神洲不滅』といつた『神洲』とは実際には『天朝の御学風』であり、具体的には『和歌』である」と述べられてをりますが、私たちが日本の天皇について考へるとき、殊に歴代天皇の御人格について考へるときに、和歌を切りはなして考へる事は出来ないかと思ひます。

歴代の天皇が和歌を作られると言つても、それがつまらない和歌であれば、大して意義もないといふ事になります。しかし、「天朝の御学風」と言はれるだけに、どれも素晴らしいものだと思ひます。殊に、私たちが直接、国の象徴と仰ぐ今上天皇の御歌は、明治天皇とならび称せられるほど素晴らしいと言はれてをります。そこで、私たち自身が、今上天皇の御歌を研究し、常に声に出して詠むと同時に、広く日本人の間で読んで貰ひたいものであるといふ願ひから本書の刊行を思ひ立つた次第です。幸ひ三井先生御遺族のお許しを得ることが出来ましたことを感謝いたします。

「万葉集論」アカネ発表巻号

万葉集の研究に就て

第二巻第五号

詩歌製作の衝動と其表現法を論ず

第一巻第八号・九号

和歌俳句の形式比較論及現代歌俳墮落の原因

第一巻第七号

万葉集の女詩人・額田王

第一巻第十二号

柿本人麿の生活と作歌

第一巻第四号

大伴旅人の生活と作歌

第一巻第九号

山上憶良

第二巻第四号

沙弥満誓の歌

第一巻第七号

山辺赤人の歌を論ず

第二巻第三号

大伴家持

第二巻第五号

万葉集中の民謡

第一巻第八号

万葉集第十六巻に就て

第二巻第一号・二号



三井 甲之著

# 今上天皇御歌解説

附・万葉集論

昭和四十二年四月二十九日 第一刷発行

昭和五十一年四月二十九日 第二刷発行

発行所 斑鳩会

〒二三〇 横浜市鶴見区鶴見町一四六七亀井方

印刷所 奥村印刷株式会社

頒 価 四〇〇円 送料一二〇円

(落丁本乱丁本はおとりかえいたしません)









